立花隆『立花家の戦争の記憶』

2 1 私小説・橘経雄『西苑』 日 次

私小説・橘経雄『西苑』

凡例

一 「1 私小説・橘経雄『西苑』」は、橘経雄の私小説『西苑』(昭和 二十三年)を翻刻したものである。

一翻刻する際、読みやすいよう一部の旧字体を新字体に改め、現代

仮名づかいにしている。

る。

7

から北京城内の各隣組に伝達された。 北京城外の西苑が新たに集結地に指定されたことが、 日僑自治会の本部

一、食糧、燃料の用意は約十日分で良い。

一、西苑には既に設営隊が先着し受入れ態勢を整備している。

設備を準備している。

病院、

病室、

購売部、

共同風呂等を設け病人、

要救恤者に対する

集結者から優先的に引揚完了の予定であるから早く集結 進 -備をされたい。 今回だけは集結地までの配車の予定もつい てい 帰 玉

廻状 の内容は大体このようなものであったが、城内の日本人たちは殆ん

党との内戦が、 状態が不安だったのである。 ど城外に移ることに決心がつきかねていた。 もはや時期の問題として、 日本の敗戦後、 かねてから日本人にも予想され 何よりも噂に聞く城外の治安 今度は中国での国民党と共産

ていた。

っても、重慶軍の北京への到着がおくれていることが、更に国民党軍と共 北京城内には既に色々なデマが乱れ飛んでいた。終戦後一ヶ月近くにな

れ、居留民団は日僑自治会と改称された。城内で発行されていた日本新聞 産党軍との交戦の噂に拍車をかけていた。 日本の軍隊は既に武装を解除さ

も停止されたので、在留日本人たちは正確なニュースを得ることが難しか った。夜になると、きまって何処かで喚声が起こっているのが、高くなり

低くなり潮騒のようにひびいてきた。門をとじてあちこちに一かたまりず つ、息をひそめるように暮らしている日本人達は、それらの喚声が聞える

ごとに何となく不吉な予感に脅えるのであった。そのような時には遠くに

望まれるボーッと赤味を帯びた街の灯りがあたかも火災でもあるかのよう

を眺めていた。見慣れた鼓楼の屋根もひっそりと沈まって、今日もまた しきりどこかでわあっーという喚声が流れてきた。

の片隅に佇みながら織田もしばらくぼんやりと街の灯り

夜の院子 (庭)

が持続され、ここから日本内地へ引き揚げができればと思うのであった。 早くこの中国内戦の危機が通りすぎ、でき得ればこのまま城内での集結

その時、表の門牌がカチカチと鳴ったようだった。

誰呀

声をかけると、思いもかけず同僚の中国人教師李先生であった。

「これは織田先生、しばらく御無沙汰しました。こどもさん如何です」

織田は思わず弾んだ調子で叫んだ。「やあ、これは、これは……おい郁子、李先生ですよ」

李先生は病気で寝ている直子の枕元に座ると、

唯 「困りましたネ」

李先生は戦前、日本の山口高商を卒業、北京に帰りある商社に勤めたが、

と言って直子の痩せた小さい顔を黙って見つめた。

その後引き続き北京高等学校で日本語の教師を勤めていた。織田にとって

「いいところへ来てくれましたよ。どうですか城内での様子は?」

は同僚として、朋友としての五年来の交友であった。

10 北京の盛り場、東単牌楼の広場には終戦後どっと売りに出された日本人

の品物で時ならぬ市場が現れ出、机、本箱、ベッド、靴、万年筆、布団、皿

丼……これらの雑多な品物が連日、中国人によってセリ売りされ、それら の品物に交って、婚礼用の衣装や、赤い長じゅばん等が地面に拡がって客

敗戦と同時に職と家とを失った日本人の不安な表情がこの広場にむき出

を呼んでいる状況などを淡々と話してくれた。

「このまま、ずっと中国に居残りたいという友人もいるんですがね」 しに現われていることが織田の胸にも重くひびいてくるのであった。

「さあ、早く帰国されるのがいちばんですよ。これからがこちらも大へん

と、李先生は複雑な表情を見せて答えた。

です」

「内戦は避けられません」

そして李先生は沈んだ調子でつけ加えた。

- もう会えないかも知れませんが、奥さんもご機嫌よう」

別れ際、織田が握手していると、郁子が織田の耳にささやき、部屋のな

「李先生、これ奥さんに……わたしの訪問着です。花嫁の頃の」

かに駆けこんだ。

李さんは目礼をすると、門を開いて帰って行った。三人はかすかに声を立て、微笑った。

織田と郁子は李さんの長身の姿が、闇のなかに足早に吸われて行くのを

*

じっと見送っていた。

終戦後、一時値下り気味の物価は再び日増しにどんどん高くなって行っ

こたえられそうもなかった。 もはや織田の一家も売り食いの底が見えてきた。とても年内までは持ち

と物価の高さを考え、城外集結をできれば次回まで延ばしたいと思ったが、 織田もはじめは城外に出る危険性を思い、又、噂に聞く城外の治安状態

そんなぜいたくなためらいは許されなかった。

日僑自治会からの伝達の内容をまともに信じるほどの甘い考えはなかっ

第一回の城外集結の申し込み期日は明日に迫っていた。

たが、もはや成り行きに任せる他はなかった。

「いま動かせば直子は駄目だな」

織田と郁子は顔を見合わせて暗然とした。

かりそうもなかった。風土病の一種でもあろうか、医者もしかと病名は分 誕生の頃は丸々と肥っていた直子もいまは骨と皮ばかりで誰がみても助

らず、痩せて青い顔をし、うつらうつらとしているのみであった。細い小 からなかった。一週間ばかり前から一段と悪化し、悪性の下痢はまだ止ま

この混乱時には来診も困難になっていた。 さな腕は注射さえできないほどになっていた。そして医者を呼んでももう

「どうしましょうか」

郁子は訴えるように織田の顔を見つめた。

「あちらには病院もあるというんだし、とにかく集結しよう」

た。

に返事をした。 ガランとした部屋の真中に座っていた織田は立ち上がると、怒ったよう

い組み合わせになって出発した。 だ。トラックのなかに古畳をかこい、手廻りの荷物と共に三家族がめ 北京での城外集結が開始された最初の日に織田達もトラックに乗り込ん

大街を見つめてい をかぶった織田は腕をくんだまま無表情に古畳の上によりかかって北京の の寝顔をのぞいては必死の表情で織田の方を顧みるのであったが、蒙古帽 郁子は直子を毛布にくるんで抱きかかえていた。そして心配そうに直子

埃の煙幕 城門近くの街通りは往来する車馬のために湯気のように埃を立て、その 群衆は立ち止まってトラックの長蛇の列を見送り、口々に何かささや の下に露店のテントが立ち並び、ぞろぞろと群衆がひしめいてい

た。

14 やら大きい声で制止しているかと思うと、中国兵士を乗せた自動車がぐわ (V ているようであった。交叉点に立っている中国巡警が棍棒をふり上げ何

んぐわんと気が狂ったように疾走して行った。

三十分ばかりして、やがて西直門の大きい城門が見えてきた。西直門で

通りすぎ白い埃の街道を二時間近く走りつづけた。途中の槐や揚柳の並木 駝が二頭、 門を出れば、ここから遠く西苑への道である。 下車し、織田達はひとりひとり中国側から荷物と身柄の検査を受けた。 揚柳の木につながれているのが見える。 城壁の傍に荷物を積んだ駱 トラックはそのそばを

祝の伝単がべたべたとはりつけてあった。 には「還我山河」「中華民族勝利萬歳」「中国最高領袖蒋主席萬歳」等の慶

観は想像していたよりも立派な建物のようであった。 舎で敗戦 支には珍しい水田 玉泉山や萬寿山 直 前まで日本兵が使用していたものであった。遠くから見ると外 日の間 の排雲殿が間近に見えだす頃、 の道路を走った。指定の西苑集結所は昔の中国 トラックは左に折れて北 の兵

やがて営門が見え、その前に青味がかった軍服を着た若い中国兵が立哨

『西苑』 ひそと囁かれてい

によればその山の後方には既に中国共産党軍の一部が進出しているとのこ 兵舎の後方には萬寿山の美しい山脈が望まれ、しばらく城外に出られなか 物の検査を受けた。 った人々の眼にはそれらの山肌の色がたまらなく懐かしかった。しかし噂 していた。 トラックは織田達の到着後もあとからあとから続いて営門をくぐった。 営門で下車し、 一列に並んで立哨兵に挨拶をし、再びそこで荷

こ壊れたままで埃がうず高くたまっていた。電燈の準備もまだないようで を開けると、冷たい、黴くさい匂いが強く鼻をついた。板床はそこ、 割り当てられた宿舎の内部はまだ設営が完了していなかった。部屋の戸

とで、この辺もやがては交戦地域になるのではないかと集結者の間でひそ

た。

がまだ異常がないのを認めるとホッとして荷物の運搬にとりかかった。一 織田 は道ばたに待たしてあるトラックに引き返し、 郁子に抱 か ñ た直子

段落をつけると織田はすぐ水を探しに外に出かけた。

15

1

あった。

四カ所もあった。先着の人々はこの湧井戸の前に既に列を組んで順番を待 もと兵舎であっただけに水の便はよく、宿舎の周囲には自然の湧井戸が

っていた。織田もすぐ列の後に並んだ。 織田のすぐ前に、黄色味がかった、すりきれた皮のジャンパーを着た若

者がバケツを下げて立っていた。よく見ると襟元もジャンパーも同じよう

にうす汚れ、埃が白くたまっているのが目についた。

志、といった親近さが感じられるのであった。 それを見ていると、お互いに異国で敗戦の苦労を共にしている日本人同

「やっと着きましたね、疲れたでしょう」

織田は後から声をかけた。

「えっ」

と振り向いたのは若い女の顔であった。

織田は瞬間、

一寸おどろいた。

髪の毛も短く、男の服装なので若い女だとは気がつかなかったのである。

「全く戦争にまけてさ、めちゃくちゃだよ。あたしも、とんだカチューシャ、

流浪の旅さ」

織田を顧みて男のように微笑った。

見、荒んだような表情が見られたが、黒い瞳の光がキラキラとして、

妙に男の心をそそるような魅力があった。

物怖じしないその様子に、織田もついつりこまれるように、

やはり北京からきたの」

と聞くと

張家口からさ」

と、少しうるさそうに前を向いたまま、ボソッと返事をした。

織田は、ああそうだったのかとうなずいた。

もって安全地帯へ逃げ出してしまい、残る婦女子達はいずれも男装して避 なひどい目にあっている。それに軍官の指導者や家族達は飛行隊などで前

終戦当時の張家口は外国兵や暴徒の襲来で混乱に陥り在留邦人達はみん

難しているが北京に辿りつくことは容易なことではない状態である-

どと、北京にも噂が流れていたのであった。

釈をすると宿舎の方に帰って行った。やがて織田も、きれいな水をなみな 順番が来たのでジャンパーの女はバケツに水を汲み入れ、織田に軽く会

「おい、有難い。とてもきれいな水だよ」 みとバケツに汲んで帰ってきた。

部屋に入ると、がっかりしていた郁子をはげますように織田は大きな声

で叫んだ。

部屋の片隅に畳一枚敷いて座席をつくり、郁子はその上に直子をそっと

下すとそのままへたへたとくずれるように座り込んでしまっていた。 もはや、冷え冷えと夕闇が迫ってきた。電燈は修理中でまだつかなかっ

た。一部屋に二十人、六家族の割り当てだった。

名々はそれぞれ古畳を敷き終わり、

れた壁の色を見つめるのであった。壁はしみだらけで、ところどころに「整 と声を上げ、両足を投げ出し、一時はぼんやりした気持ちで黒いうす汚

頓」「規律」「当番」などというビラがはがし残されていた。

19 私小説·橘経雄『西苑』

> 色い光の下で、ひしゃげた、つめたい握り飯の包みを拡げた。ひもじいの ちこちでぼそぼそと食事が始まった。 どこかで赤ん坊の火がつくように泣いている声が聞えてきた。 織田達もローソクのゆらゆらする黄 部屋のそ

か、あるいはどこか苦しいのか、直子が急に泣き出した。

「ね、待ってなさいよ、いま、お湯をわかして重湯にしてあげるからね」 郁子は直子を織田に預けると、やかんを下げて部屋の外に出て行った。

おい、直子も頑張るんだぞ」

織田はその小さな痩せた手をそっと握りしめてやった。

が集結 回の西苑集結者は定数よりは少なかったが、それでも約六千名近く し終わった。二階建の木造旧兵舎で、織田達の割り当てられた部屋

8 は階下にあった。どこの部屋でも二畳位が家族単位に割り当てられ、 い荷物や布団をつみ重ねて隣との境界線をつくり、寝起きの場所を工夫 めい

した。

あたえた。 作っているところもあったが、見た眼にもそれは陰気な暗い部屋の感じを ある部屋では幕や布などをカーテン代わりにして、隣家族との境界線を

にし、ストーブも入口の近くに一つだけ据付けて共同の使用とした。この 織田は部屋の人たちと話し合って、幕や布などをぶらさげることをやめ

集まって色々と話し合う親しい雰囲気ができるからであった。そして寄り

方が燃料の経済にもなり、又、夜になると部屋の人達がストーブの周りに

集まると話題の中心は大概、引き揚げ期日の予想と食物、それから「今後

の生活問題」についてであった。

定され、抑留者の代表機関として中国の管理所との交渉を行っていた。 れていた。そしてその自治会本部や本部役員という組織は、 ここに集結された抑留者たちは、自治会という名の組織によって運営さ 集結前から決

文化などの各班があり、これらの班長、役員たちは集結者から選ばれてい 自治会本部のもとに、総務、渉外、物資、警務、衛生、厚生、救恤

手が出なかった。集結者の福利的施設として、助け合いのための店として

北京城内よりも高かった。余裕のある者でない限り一

般の集結者には

到底

値段は

ここには米も肉も野菜も、果物も酒も石炭も衣服類もあったが、

貨と食品を売っていた。いわば集結所内のマーケットであり、デパートで

本部直営に購売部というのがあって、宿舎の一部を借りて色々の

日

用雑

わゆる有力者たちによって占められてい

たが、もとの居留民団のい

『西苑』

購売部」があるのなら話が分かるが、これでは集結者の乏しい持ち金を

私小説·橘経雄 なものであった。 捲き上げるため、「本部役員」という名のボスたちが店を開いているよう

敗戦という同じ運命のもとに抑留され、これから祖国に帰って行くのを

商売をする必要があるのかと、織田は「本部」のやり方に腹を立てた。 唯一の希望として集まってきたこの集結所生活で、いったい儲けるための

集結してから一 週間 I 織田は集結所の中央建物内にある役員室を訊ね

総務の真下という班長に面会を申し込んだ。

21

1

供たちの救恤の資にあてるのが当然だと思うんですが」 がいいと思う。そして儲けがあるなら全部みんなのために、 - 集結所内の余裕のあるものから資金を集めて協同組合的な運営をする方 と意見をのべたが、赤ら顔をした五十年輩の真下班長は 殊に病人や子

生活困窮者には他に厚生班や救恤班があるから、それに申し出てもらえ

ばいいんで購売部はあのままやって行きますよ」

織田が何かゆすりか難癖をつけにきたものと思ってか、いかにも横柄な と、にべもなくはねつけた。

態度で織田の話をよく聞こうともしなかった。

人にその話をすると、 織田は部屋に帰って、この部屋での年長者であり、日蓮宗信者の吉田老

もう少しでしょうから……」 「そんなこと打っちゃっといた方がいいですよ、ここでの暮らしもどうせ

と無関心であった。そして壁の方に向かって端座し、日課になっている

『南無妙法蓮華経』のお題目を唱えはじめた。

『西苑』

かし一面、心の底では何か割り切れない気がし、吉田老人の後ろ姿までが かに帰国の機会を待っているのが賢明なことだと思われるのであった。し 慨してガタガタと駆けずり廻るよりも、直子の恢復のために専心し、しず 織田もここの短い抑留生活中、購売所がどうのこうのとそんなことに憤

癪にさわるようであった。 その時、部屋の戸をバタンと大きく開いて部屋での独身組である佐々木

「いやあ、すげえおっさんだったな」

と木村の二人の青年が帰ってきた。

「しかし、面白かったよ」

「何かあったの?」 がら笑い合った。 二人はストーブの傍らの上り口に腰を下ろし、ゲートルをとりはずしな

と、部屋の片隅から吉田老人の娘の美代子が声をかけた。

「今日ね、とても面白いことがあったんだよ」 木村はとりはずしたゲートルを振って埃を払い

23

と、部屋中の者に呼びかけるようにして話し出した。

うんだがね-を整列させて、本部の新田という奴に――こいつは班長の上の区長だとい おれたち設営班の仕事に行ったらさ、仕事はじめに設営班長がおれたち ここまでしゃべると、佐々木がその後を続けて ---そいつに敬礼させたのさ」

やがって何てえざまだ。一体、病院のことも救恤のことも、うそっぱちじ じゃないか。それにつまらねえ購売部なんか作って、てめえ達の儲けばか ゃないか、準備ができていなけりゃあ、できないとはっきり言ったらいい 本部の奴等は何だ、自分たちだけ特別の人間だというような大きな顔をし した位のおっさんなんだ。そのおっさんがさ、また大きな声で『お前たち な真似はよせッ』と叱鳴る奴がいるのさ、振り返ってみると、三十一才越 「ところがね、その時、列の後からとてつもない大きい声で『こらっバカ

「それからどうしたの?」

る、こんな奴等に敬礼なんざ必要あるものか』――というわけさ」

りしやがって……勝手に班長だ、やれ区長だのとぬかして訓示などしやが

佐々木は

「それで新田班長が怒って、誰だ、前へ出ろ、と言ったら例のおっさんが いきなり前に出たのさ。――そのおっさん、あごから喉にかけて三寸位の ようとする木村を制するように少し早口で話を続けた。 佐々木はみんなが聞き耳を立てているのに勢いづいて、横から口を入れ

え声で、君が秩序を乱すなら、こちらにも考えがある、なんていうのさ」 傷あとがある、すげえ顔なんだ。新田もこれには一寸驚きやがって、ふる

明したので皆も思わず笑い出した。 そしたらおっさん、カラカラと打ち笑って……と木村が調子をつけて説

私小説・橘経雄 快だったな」 ないでそのまま帰ってしまったのさ。……なあ、木村、てんであん時は痛 「ほんとなんだ、おっさん、大きな声で笑いとばしながら使役の仕事もし

こと、おかげで今日の仕事は楽だったなあ」 「とにかく胸がスウーとしたな、それからの新田や設営班長のバカ丁寧な

と、木村も相槌を打ち、佐々木と顔を見合わせて嬉しそうに笑い合った。

26 「けれども、その人、少し乱暴すぎますねえ、本部の人は中国側の管理所 と色々接衝して一日も早く引き揚げができるように苦心しているんでしょ

う。その苦心も買ってやらなきゃあね。使役するのも抑留者の義務だし、

と、吉田老人は二人の青年をたしなめるような口調で言葉をはさんだ。

引率者に敬礼するのも当然じゃないですか」

なその時はおっさんはこんなことも言ってましたよ。おれは政治がどう つまり、おっさんの言いたいことは本部のやり方に対してなんだ。そうだ 「いやあ、そのことは分かりますがね、乱暴とばかりは思われませんよ。

て色々してくれなけりや困るんだ。それなのにここではまるで反対で何一 ゃ、本部員とか何とか上に立つ者は、一番可哀想な気の毒な者を胃安にし だとか、こうだとか理屈は一切分からないが、こんな引き揚げ生活の時に

木村は吉田老人や織田たちの方を見やりながら返事をした。つしてないじゃないか、なんて言ってましたよ」

「でも、とにかくそんな人、乱暴な人は怖くていやだわねえ――」 美代子は、直子を寝入らせて立ち上がった郁子に賛成を求めて視線をや

兀

けた。

った。

郁子はうなずき返した。

すると、木村は

「ああ、忘れていたがそのおっさん、この棟の者ですよ」 つけ加えた。 と、美代子と郁子の顔を相互に見やりながら少しおどかすような調子で

の通りだ」 「そのおっさん、仲々、筋の通った面白いことをいうじゃないか、全くそ その時まで、布団に寄りかかって黙って話を聞いていた織田は、

ぶっきらぼうな調子でそういうと、煙草の烟をふっと大きく壁に吹き付

それから一週間経ち、また一週間、 やがて一ヶ月経ってしまったが、引

28 き揚げの発表の気配は感じられず帰国は延び延びになった。 そして季節はいつか秋から冬へ。誰もが心ひそかにおそれていた大陸の

想していた人々は、どうせ帰国の際は持って帰れないものと持ち金を派手 酷しい冬へ入ろうとしていた。 集結すれば遅くも三週間ぐらいで引き揚げ第一陣が出発できるものと予

あわてて、引きしめてきた。そして今や特殊な階級のものを除いては大概 に使い、 あるいは酒をのんで呑気にかまえていたが、こうなるとさすがに

は手持ちの食料も衣服も種切れとなってきた。

この集結所にやっと辿りついた者は尚更であった。それらの人達はみんな 揚げが始まるものと思って集結して来た者や、着のみ着のままで奥地から 殊に城内での例の日僑自治会の回覧をそのままに信じこんで、すぐ引き

中国側から配給される黄色い栗の饅頭や、豚の餌のようなふすま類の給食 で露命をつなぐのみであった。

のあいだの道路にはアンペラ小屋の粗末な露店が立ち、落花生や柿や甘栗 方、集結所内ではいつか物々交換の市も立ちはじめた。宿舎と宿舎と

や飴やおやきなどが並べられ、 店の者は砂まじりの風が吹きつける中でお

客を呼んでいた。

も高価であった。そこには又、煙草も、薬も、毛皮のチョッキも、 は感心の他はなかった。また帰国まではと大切にとっておいたメリケン粉 それらの品物は誰がどう外部と連絡して集めてきたものか、その手腕に

何でも売りに出されていた。 を材料にした手製のおやき類も盛んに売られていたが、それだけにいずれ

持ち金を使い果たしてしまおうと、一本八百円の白乾酒を場外から仕入れ には毎日スキ焼きを食べている者や、帰るまでに外地で稼いだあり余る所 持てる者と持たざる者との差は部屋の中でも鮮やかに一線を画し、一方

金がなければ何も買えなかった。

金があれば何でも買えた。

給食用の 屋でもくりひろげられていた。 の雑穀の雑炊を食べている家族たち……そういった風景がどこの部

て呑んでいる者がいるかと思えば、

一方には同じ部屋の片隅でボ

・ソボ ソと

母親の心がいちばんたまらないようであった。 狭い一部屋の中であるだけに、大勢の子供をかかえて集結している貧し

「大人は何としても我慢できますが、子供が可哀想で……こんなもの売ら

が、連れの者と話し合っているのを、通りがかりに耳にした織田はしみじ なけりやいいのにねえ」 一つ五十円也と書いた露店のおやき屋の前で、子供をつれ四十近い母親

みとその言葉に同感すると共に無性に腹が立ってきた。 このような弱肉強食的なバラバラな生活をして、一体、敗戦後、何を目

中に投げこまれたおでんのように、唯、一緒にわけもなく煮えくり返って いるようなここでの生活であった。 指して焦土の故国に帰って行くのであろうか。そして何も彼も大きな釜の

なっているのであろうか。あれこれと思いながら何かに追いかけられるよ 事で生きているであろうか。大空襲で焼け野原と化したという東京はどう 織田は集結所の建物の裏を流れている小川の冷たい水の色を見つめなが 艦砲射撃を受けたと聞く東北の故郷の町を思いやった。老母や姉

Ŧi.

31

うな寂しさと焦燥を感じないではいられなかった。

死ぬ奴は勝手に死んで行く。ただ、それだけさ」 日本に帰っても、きっと、ここと同じ生活だろうなあ、生きる奴は生き、

直子が急にまた細い声でねちねちと泣き出した。 部屋に帰った織田は妻の郁子をかえりみて吐き出すようにつぶやいた。

いっそ、郁子や、直子が死んでしまったら、どんなにホッとするだろう 織田は破滅への快感を自ら追うように、投げやりな気持ちになるので

あった。

第一班、第一号室

第一区、

、世帯主、吉田定男(六十一才)元東洋被服会社工場長。妻、清子(五十四 才)、長女、美代子 (二十六才)、次女、春代 (二十二才)

二、世帯主、織田研一(三十一才)元北京高等学校教員、妻、郁子(二十七

才)、長女、直子(三才)

三、世帯主、木村直太郎(二十六才)元東亜機械会社社員、独身者、佐々 木桂介 (二十四才)、元東亜公司建築部勤務、 独身者

四、世帯主、脇本千代吉(四十八才)元旅館業、長男、勇吉(十九才)、 次男、雄二(十七才)、長女、鶴代(十一才)、母親は死亡

Ħ,

世帯主、

北村はる……。

名簿を本部に提出し、本部はこれをまとめて至急中国側に提出するとのこ 織田は第一号室から順次に名簿と調査票を整理していた。引き揚げ者の

ないことになっていた。 とであった。新しい様式によるこの名簿に名前が漏れれば引き揚げができ

棟がそれぞれ第一区、第二区、第三区に分かれていた。 おり、ここの集結所には三十六棟 単位となっており、四つの隣組が一班となっていた。 このためにいっそう隣組が強化された。隣組は六部屋、 (三十六班) があり、 一班が一 建物の位置で十二 約三十世帯が一 棟をなして

制で「火の用心」の拍子木を叩いて各部屋を廻っていた。 引き揚げは後まわしになるとも言われていたので、どこの班でも夜は当番 ら火事でも引き起こそうものなら、 隣組 は 17 わば 「五人組」みたいな共同責任体であった。もし隣組や班 失火の責任を問われてその隣組や班

か

織田の受け持ちは階下の六世帯で、名簿の作成のためにあちらの部屋

げできないかも知れぬなどと噂されていた。織田の隣組にも、 もし、「好ましからぬ人物」としてマークされれば「戦犯」として引き揚 こちらの部屋へと駆け廻らねばならなかった。 それにこの名簿は中国側に提出される、いわば「人別張」でもあるので、 素性や職業

私小説・橘経雄 しかし、とにかく名簿の整理が促進されたことはうれしかった。 これであてにならぬ引き揚げ期日がどうやら目鼻がつき、希望が持てた

のあいまいな、偽名でもあるのかなと思われるような人も見受けられたが

「やあ、ご苦労さんです」 発ができるわけであった。 のであった。それに先着順ともなれば織田達の部屋の者が第一陣として出

そこへ本部の杉本班長が入ってきた。

金通帳等も明細に調べて明日の夕方までに出して下さい」 「その調査票ですがね、宗教、特殊技能、大陸への来往月日、所持金、貯

と言っている処へ、佐々木が部屋に入ってきた。

「丁度、良かった。佐々木さん、特殊技能は」

と、織田が調査票を片手に問いかけると、

「酒と女ですな、……所持金?」ええと、マイナス、何しろ設営班に入っ

て土方をして細々露命をつないでいるんですからね、木村に借金してるん

ですよ。宗教?
おれは何も信じていませんよ、チェッ、一体何が信じら

れますか」

佐々木は丸い黒い顔をニヤニヤさせ、織田が調査票に、特殊技能ナシ、

ていた。 と適当に記入するのをつばをはじき飛ばし、しゃべりながら面白そうに見

をひそめ、 杉本班長もそれを聞き一寸笑いかけたが、帰りがけに織田に向かって声 『西苑』

私小説・橘経雄

ですが……」 か。今までこの二階にいたんですが細君が病気なので階下の組に移したん るんですが、今度、折があったらくわしく素性を調べておいてくれません あなたの組、五号室に黒沢という男と、それから有賀という若い女が居

「これですか」

と、いかにも仔細ありげに眉をひそめた。

二、世帯主、有賀キクヱ(二十三才)独身者。と簡単に書き込まれてある (三十一才)、元炭鉱勤務、妻、芳江 (二十八才) 病気臥床中、長男 (九才)。

織田が名簿をめぐり、五号室のところを見ると、一、世帯主、

黒沢健

んです。ほら、ご存知でしょう。最初に新田区長さんに食ってかかったり、 「ええ、それなんです。……この黒沢という男が全く無頼漢で仕方がない だけだった。

で、組長として充分、監督をおねがいしますよ。それじゃまた。……」 本部に意味もなく暴れこんだりして……織田さんも、ひとつその点を含ん

35

杉山班長は出て行った。

36 ういうわけかいつも晴雨に拘らずレイン・コートを着ていた。自分の部屋 杉本は本部の役員でもあり、同時に第一班の班長をしていた。そしてど

入っているのか、ふくらんだ本革の折鞄を脇にかかえ、場内のあちこちを は第一班の二階のはずれであったが、本部の役員室にいる方が多く、 何が

癖ありそうな感じの男であった。 せかせかと歩き廻っていた。物腰はやわらかったが眼のくばり方の鋭い一

のも杉本班長であった。杉本の部屋の者に聞くと、「杉本さんは日本に帰 ,つか中国側の李管理所長が集結所を視察に来た時、案内役をしていた

している」とのことであった。 和建設のために尽くす有力者の一人であり、管理所側にもそういう宣伝を ったら民主党という新しい政党を組織し、中国と提契して日本の再建、平

て思わず苦笑した。 今日もレイン・コートを着、折靴を持った杉本の後姿を見送っ

織田はそれからすぐ五号室の方に出かけて行った。

五号室は階下のはずれに在り、丁度、夕飯時であったので、そこら中、

織田が尋ねると、

出かける者や、外から帰ってくる者たちが小忙しく動いていた。 火を煽いでいた、 ゴタゴタしていた。狭い通路には幾つも七輪が並んで、みんなバタバタと 青い煙がもうもうとくすぶって、その煙の下を水くみに

黒沢は不在であった。

てある布団によりかかっていた。その前にあるお盆の上にはよごれた茶碗 黒沢の妻君の芳江は一目で病身と思われる青い顔をして片隅に積み重ね

と落花生の食べ屑が散らかっていた。

「有賀キクヱさんもお留守ですか」

「ああ、有賀さんは大概、お出かけですよ」

えた。 と、寝転んで古雑誌を読んでいた眼鏡の男が、むっくり起き上がって答

眼鏡 の男が、そう答えるとまわりにいた者たちが、意味ありげに一 緒に

黒沢の妻君は頬杖ついて無関心に窓から外を眺めていた。

小さい笑い声を立てた。

38 の方法を説明し 織田はその部屋での年長と見える岡村という者に、調査表を渡し、記入

お願いします」 「それじゃ、明日とりにきますから午頃までに必ずみんな記入するように

のずんぐりした男が、ずしずしと歩いてくる姿が目に入った。 岡村に頼んで織田が狭い部屋の中の通路を帰ってくると、向こうから背

十燭光の赤ちゃけた鈍い電灯の光の下なので、その容貌は定かには分か

らなかったが、直観的にそれが黒沢らしく織田には思われた。

狭い通路に立ち止まり、その姿を待ちうけていた織田は、近寄ると

「あの黒沢さんですか」 と、声をかけた。

「ああ、黒沢ですが」

「いま、丁度、調査表のことで五号室の方に行ってきたところなんです」

を見合わせると一度、会ったことがあるなと思った。 その時は、黒沢の後をついてきた女も同時に立ち上った。織田は女と顔 そして

「あたし有賀です」

を着ていたので、始めはそれと気がつかなかったが、例の黒い瞳の底に妖 張家口から脱出してきたというあの女であった。今日は緑色のジャケット しく輝くような視線に合うと、織田はすぐにそれと気がついたのであった。 それは集結した最初の日、井戸の所で織田が声をかけたジャンパー姿の、

組長さんにも知らせに行こうと思ってましたがね、何分、宜しく」 「ああ、組長さんでしたね、今度は世話になります。部屋が代わったので

黒沢と一緒に女も頭を一寸下げて挨拶した。

というと、いたずらそうにペロリと小さい舌を出した。 織田も挨拶を返しながら、心の中で行方不明者の居所をつきとめた時の

ことを考えていた。 どんな関係があるのであろうかー ようなある満足感を覚えるのであった。それにしてもこの女と黒沢と一体 一織田は二人と別れてから、途々そんな

六

ことが何より有難かった。 の人たちが「ひでえなあ」などとこぼしながらも同情し大目に見てくれる に報告に行かねばならなかった。しかし、一方には駄目かも知れないと思 の使役や風呂券の配布など。そして隣組の者に異状があれば、本部にすぐ た使役の当面や、便所の掃除の割り当てをきめたりまとめたり。共同風呂 がたまらなかった。三日にあげず組長会議があり、 うわけで、とうとう組長を引き受けなければならなかった織田は内心雑用 に留守がちであり、 った直子が容態を持ち直し、夜通しぴいぴい泣くことが多かったが、 木村や佐々木達、 部屋の若い者はみんな設営班や使役の仕事に出るため 他の部屋には女子供や病人が多くて適任者がないとい 隣組へのその報告、 部屋 ま

ま疲れてごろりと横になったままいつか寝入ってしまった。 今日も組長会議があって、織田は夜が更けてから帰ってくると、そのま

やがて、戸がしきりに叩かれる音で織田はハッと目を覚ました。

「組長さん、済みませんが――」

そういう声と共に、誰か部屋に飛び込んできた。 織田が起き上がると、土間のストーブの傍に有賀キクヱが立っていた。

キクヱは例の皮のジャンパーと男ズボンをはいていた。 あの黒沢さんの奥さんが急病で、お医者さんのことをお願いしたいんで

と、ひどくあわてた調子で訴えた。すが」

「急病、どんな風なの」

なければ駄目だというんです」 んが一度、杉本班長の所へ行ったのですが、医者なら夜が明けるまで待た 「苦しみ通しですから何とかしてやらなければと思って。……実は黒沢さ

「そんなばかなことを……とにかくすぐ行こう」

織田は防寒帽のひもを結び、いまの騒ぎで目を覚まして聞いていた郁子

13

「一寸行って様子をみてくるから」

と廊下へ出た。

部屋の外へ出ると、氷のようなつめたさが身体中に襲いかかった。

五号室に入って行くと、黒沢の妻君は下腹をおさえてうなりながら苦し

んでいた。額にはじっとりと汗が滲みだしているのが見えた。

黒沢は手の下しようもない、といった様子で枕元に座っていた。そして

「どうも、すんません」

織田の姿を見上げると、

と頭を下げた。

「……盲腸でもなさそうだし、口もけないで苦しんでいるもんですから」

と、黒沢はじっと腕のくんだまま、独り言のようにつぶやいた。

「とにかく医者を呼んでくるから」

織田はすぐにキクヱと外へ出た。

二人は第一区の通用門まで走って行った。

そこから道路を越えた向かいの兵舎内に診療所があった。しかし、通用

門は固く閉ざされ、通用門を守っている警務班の男は

一診療所はもう閉まっているし、あの兵舎には管理所の軍隊もいるし夜間

と説明した。

は絶対に入れませんよ」

いんだが」 「そりゃ困ったな、実は急病人なんだ。診療所の当直の人に来てもらいた

行っても、あっちには絶対に入れませんよ。そうですな、本部の人に診療

「どうも、わたしにゃ何ともできませんな、とにかくこの通用門から出

所に電話をかけてもらうんですな」

織田は本部の建物に向かって走り続けた。キクヱもその後をついて走っ

|階をあちこちしながらやっと総務部長室を探し求めた。

本部の二階に駈け上がると、もうどこの部屋も灯りが消えているので、

織田は思い切って乱暴に部屋の戸を叩いた。

43

しばらく経って、

「どなた、何のご用?」

と不機嫌そうな女の声が内部から聞えた。

「実は急病人ができて、医者を至急呼んでもらいたいんですが」

戸は開けられず、しばらくボソボソ話し合う声がしていたが、今度は男

の声で

「第一区、第一班の組長です」 「何班の者ですか?」

「それなら第一班の杉本班長に相談してくれませんか」

と、寝床から腹立たしそうに返事をしている気配であった。

杉本班長なんか駄目です……と、キクヱはわきから怒った表情をして織

「診療所は夜間は行けないんです。一つ、本部から電話をかけて連絡して

くれませんか?」

田にささやいた。

織田は役員室には非常用の電話もある筈なのに、それにも返事もせず、

戸も開けないので癪に障りいっそう大きい声で部長室の前で叱鳴った。

ついに灯りがともり、起き上がる気配がした。

「ごめん下さい」……織田は遠慮なく部長室の戸を開けてズカずかと部屋

の中へ入って行った。

た不機嫌さを露骨に表して座っていた。 白くたれたカーテンの向かいの寝床に総務部長と奥さんが叩き起こされ

から、診療所のお医者さんを呼んでいただこうと思いまして」 「どうも済みませんでした。組の者が急病で非常に苦しんでいるもんです

織田はくり返して頼んだ。

「夜間は駄目だといったじゃないですか。それじゃ、たしかこの一区内に

『西苑』

私小説・橘経雄 「それは何班ですか、部屋の番号と名前は分かりませんか」 医者が一人居ったはずだから探してみてください」

からそこで見つけて下さい。これからはこんな時には先ず班長の所へ行っ 「それがいま思い出せないから……杉本班長の所に各班の名簿があります

織田はムッとしたが、黙ってそのまま階段を下りてきた。

45

て相談して下さい」

とキクエをうながすと、
「これからもう一度杉本班長の部屋へ行ってみよう」

「いまの総務さんとやらと同じで埒があきません」

と反対であった。

「ばかな、ぐずぐずしていると助かる病人も助からんじゃないか」

思わず叱りつけるように言った織田は、ハッと気がついたように立ち上

がった。

「そうそう、あの保健婦さんならいい「あの人なら分かるし、親切な人な んだ。僕がすぐ引っぱって行く」

「済みません。それではあたし先に帰っていますから」

キクヱは男のように首肯くと、さっと身をひるがえし、五号室の方に駈

けて行った。

「お大切に」

と手で制し、

なって苦しみに堪えていた。 織田が佐藤という保健婦さんを連れてきた時は病人はまだ、うつぶせに

やら病人の震えもとまったようで苦しみもうすらいで行くらしかった。 盲腸炎ではなかったらしい。佐藤さんが手早く注射を一本打つと、どう

やがて病人はかすかに目を見開き、気持ちがよくなってきた、と言った。 白いエプロンをした佐藤さんは、いかにも病人扱いに慣れた親切そうな

「夜が明けたら診療所の方に連絡をとっておきますからね」

人であった。

黒沢が、帰って行く佐藤さんの靴を直すと、佐藤さんは

「いいのよ、いいのよ」

と挨拶して部室を出て行った。

織田もはじめてホッとした。そして気がついて額の汗をハンカチでぬぐ

47 った。

「いやあ、えらいお世話に」

黒沢はタバコを一本とりだし、織田の方に差し出した。

七

ら黒沢がやってきた。 夕飯後、 織田が直子を抱いて部屋の前の道路に立っていると、向こうか

な印象を与えた。そして月の輪の代わりに、あごから喉にかけて例の三寸 背の余り高くない、ずんぐりしたその格好は丁度モサモサした熊のよう

近い傷跡が一条の線をなして走っていた。

にしていたが、織田は黒沢に対して始めに会った時から、直観的にある親 しみと愛情とを感じていた。最もその感情には動物園の熊に寄せるような 人々は何とはなしに、その荒々しい、獰猛な相貌を見て彼を避けるよう

散歩ですか」

親しみと愛情に似かよっているところもあった。

黒沢は近よって挨拶をした。

「奥さんもあれから落ち着いて結構でしたな」

「ええ、お蔭様で有難うござんした。然しね、織田さん、あれなんぞ早く

くたばった方がお互いのためかも知れませんよ」

「あいつは、病気のしつづけで、大陸へ来てからあの通り人に世話ばかり 「どうしてさ」

かけ通しなんです」

『西苑』 「まあ、くたばった方がいいなんて考えるもんじゃありませんよ」

ちをふと抱くことがあった。最もそんな時にはあとでは却ってふしぎにも と、織田は慰めるように言ったが、織田自身も家族に対してそんな気持

直子は小さい手を出して黒沢に抱かれようとした。

切ない感情を意識するのではあったが――。

私小説・橘経雄

黒沢は手を出して直子を受け取った。

「あっちへぶらぶら行ってみませんか」

49 織田は黒沢を誘って裏手の小川の方へ歩き出した。

食いをしてペッペッと柿の皮を吐き出している子供達がわいわい騒いでい 途中には使役から帰ってくる者、水くみにバケツを下げて行く者、

ズボン類は帰国の際、「危険な色」となっていたので、それらを持ってい やしながら、カーキ色の軍隊ズボンを黒く染めていた。 十号室の建物の前では、若い女が三、四人集って、石油缶の下の火を燃 カーキ色の 軍 一服や

る者はみんな別の色に染めかえるのが「流行」してい やがて小川の朽ちかけた土橋を渡り、二人は大きい砂利のゴロゴロ して

る広場の方に歩いて行った。広場のはずれは、もとトーチカのあった所

の塊の林が森蔭を背景に、 で、今は鉄条網の柵がはりめぐらしてあった。 鉄条網の外、十米ばかり先には、幅五米位の川が音を立てて流れ、遠近 廟や泥屋根の中囲の農家が点々としていた。

部屋にいても、どうせ食う物もなくて毎日くさくさしていますからな」

外の方が寒くても気持ちがいい

ね

黒沢はニヤリと笑って相槌を打った。

「いや、全くひどいなあ、この頃は

ちになるのであった。 まだ引き揚げの見込みは立たず、織田も先のことを考えると不安な気持

が冷えてきた。 振り返ると、集結所の窓々にも、あちこち灯りが見えはじめ、急に空気

「わたしの故事来歴を知ったら、もうつき合わない、なんてさすがの織田

ぽつんとそんなことを言い出した。 さんも驚くだろうな」 帰りみち、黒沢は織田の手に直子を渡し終えると、一時、足をゆるめて、

『西苑』

私小説・橘経雄 らな――」 「この傷あとでも分かる通り、随分、色々な生活をして暴れてきましたか

「つき合わない、なんてそんなことありませんよ」

「張家口では何をしていたんですか」

それより前は奉天、四平街などにいましたが、大概は飯場暮しでした。故 「終戦当時は蒙彊地区にいたんですが、張家口ばかりでなく、保定、大原

51

52 事来歴はあとでゆっくりやりましょうが、日本へ帰ったら新規まき直しに 炭坑で又、うんと働く積りですがね」

「腕に覚えがある、というのはいいなぁ。僕もこれからは何でもやる積り

ますな」 ですよ。昨日は棺桶作りまで覚えたし、あれでここの使役も随分役に立ち

「そうですかなァ」 「いや、まだまだ織田さんなんぞ、鍛えられ方が足りませんよ」

二人は顔を見合わせて笑いあった。

「それはそうと、黒沢さんは長い間、大陸に生活していて感想はどんなで

たしの世話になった李子明という親分がいましたがね、よくこんなことを 「中国人は一旦信用したらテコでも動きませんよ。たしかなもんです。わ した。例えば日本人と中国人のちがいなど……」

くては駄目だよ、とね……全く、日本人の方がコセコセしすぎていますね、 言っていました。……腹の中を千石船がするすると通るような人間じゃな

それにまるで、人間としての『仁義』がありませんや」

「実際もっと土性骨がしっかりしていないといけませんな」

「でも織田さんや佐藤さんのような人を見るとホッとしますがね」

「冗談いっちゃ困るよ」

織田は思わず苦笑した。

「いや、お世辞はわたしは嫌いだから言いませんよ。……あれ、あそこを

通ってるでしょう。わたしはあんな手合いがいちばん虫がすかないんです

な

『西苑』

黒沢は話しつづけた。

折鞄をかかえて、宿舎の角を曲がるところであった。 黒沢の指さす方に視線をやると、レイン・コート姿の杉本班長が、 例の

「日本人だとか、中国人だとか、そんな区別や、それに国境なんぞという ものもいりませんな。わたしゃ大陸に来てから、そんなこと考えたことあ

私小説・橘経雄

は簡単ですな。……いや、こりゃどうも図にのって、えらそうにしゃべっ りませんでしたよ。いいことはいい、わるいことはわるい――しごく物事

53

てしまって……」

黒沢は自分の頭を叩いて、アハ……と笑った。

がはっきりしないところがあるんですよ。つまり誰かがチョロまかしてし まってるんですな」 や米が北京城内からここの本部に相当きたというんですがね、どうもそれ 「それはそうと織田さん、知ってますか。集結者用に配給される筈の布地

「そのことについて一つやってやろうと思っているんですがね」 「そういうものがあるなら、皆、困っているんだ。すぐに配給すべきですな」

黒沢はそういいかけて、思わずニヤリとうすく笑った。

この笑い方は、一種の、しずかな凄味を帯びた彼独得の笑い方であった。

i

それから三日後のことであった。

織田が組長の打ち合わせ会に出かけようと土間に下りると、木村が側へ

寄ってきて話しかけた。

「織田さん、昨日の晩、例の黒沢のおっさんの大活躍があったそうですよ」

織田は帳面を丸めて手に持ち、立ったまま訊いた。

いでいたらしいんです。そこへおっさんが出かけて行って、安眠防害はよ 「何んでも向かいの班の連中が五、六人酔っぱらって、 階段の下あたりで騒

せ、とか何とか言っているうちに、大立廻りになり、おっさん一人で全部 首をしめ上げて殴りつけてしまったそうです」

「どっちが先に手を出したのかね

私小説・橘経雄 『西苑』 がまだあるんです」 「先に手を出したのは、あっちの酔っぱらい連中なそうですが、そのあと

「そのあと?」

「ええ、そこへ杉本班長が騒ぎをききつけて出かけて行き、大きな声で『早 くやめさせろ』なんて、遠くから叱鳴ったもんだから、黒沢のおっさん、

一旦やめにしたのに今度は杉本班長相手に大した見幕で叱鳴りつけたそう

「酔っぱらいの連中はどういう者だった」

「それが本部の警務班や購売部の連中なんで、おっさんが余計暴れたらし いんですな……貴様達は、この間もおれたちの班に来て、一軒一軒部屋を

叩き起こし、女の顔を覗き歩いたりしやがって、今度なめたことをすると、 どいつもこいつも生かして置かないぞ、班長もよく覚えておけ……なんて

言われ、杉本班長なんぞ、まっさおになって逃げてしまったそうですよ」

「昨晩、何時頃だったのかな、一寸も知らなかった」

「何でも一時頃だと言ってましたよ。おれの友達が丁度、便所に起きた時

「いやあ、有難う。聞いといてよかった」だそうですが、とにかく一時は大騒ぎだったそうですよ」

織田はそれから会議に出かけて行った。

と共同炊事の件、 組長会議は既に始まっていた。中心議題は集結者の生活危機打開の方法 及び最近における盗難事件頻発に対する防止策

実際、織田達の部屋でも、外の廊下に出して置いたバケツが三つ続いて

ついてであった。

私小説·橘経雄

ごとなくなってしまった、という話も聞かされていた。 紛失したし、又、 向かいの部屋では野菜類や煮物を入れておいたものが皿 洗濯ものなどは

どこでも一寸、監視を怠ると生かわきのまま取られてしまったり、

共同 風

呂場では下着類などの盗難が続出していることも噂されていた。

組長のひとりが、そのことを話し出すと、一しきり「盗られた話」があ

とから、あとからと続いた。

織田は黙ってその間中、 煙草ばかり吸っていた。

各班で置こうということになった。共同炊事については論議だけに終わっ やがて盗難防止については、 火気の取締りと共に、これからは不寝番を

会議もやがて終わろうとする頃、眼鏡をかけた福本という組長が、

「あなたの組の黒沢という男が、一昨夜酒をのんで大暴れに暴れたそうじ ゃないですか」 織田に向かって話しかけた。

1

57 「さあ、自分はそれとは反対に聞いてましたが」

「反対といいますと?」

「黒沢さんの方で却って、酔っぱらって暴れていた連中をとっちめた、と

今度もまた何か乱暴をはたらいたのかと思いましてね。本当にそうじゃな 「わしは又、この間も新田さんの所へ叱鳴りこんで暴れた男だというから、 聞きましたがね」

と福本組長は半信半疑の表情であった。

かったんですか……」

「とにかく、あの男は乱暴者に違いないですよ。あんな奴が一人いると、

班も組も大迷惑しますから注意した方がいいです」

と、織田に向かって他の組長が話しかけた。

織田は別に答えなかった。

やがて、散会となり織田も帰りかけると、杉本班長が、一寸一寸と呼び

かけた。

「実はあなたにだけお耳に入れるんですが、どうも最近の盗難事件には例

の黒沢の子供が怪しいんです。それにあの部屋に同居している有賀という

「僕に監視していろというんですか」

織田の反旗的な強い語調に、杉本班長はあわてて、

「いや、集結者として埒外に出た行動ですな、例えば賭博とか、酒乱で暴 うの注意をおねがいしたいというわけなんです」 れ廻るとか、暴行とか、そんな事件を起こさないように一つ各組でいっそ

私小説・橘経雄 『西苑』 「それから織田さん、参考までにはっきり言いますがね、黒沢やあの女の 酒気を帯びているというし、救恤者として本部に報告をして給食をうけて 調査表には 『所持金全然なし』と書いてあるのに、部屋の者に聞けば大概

「その点はめいめいの責任として、組の者にもよく注意しておきますよ」

るのか白い飯を食べているという話ですよ、これじゃ困りますからね いるのに、給食の雑穀はうまくないといって捨て、毎日、どう都合してい あたかも組長としての織田の責任をなじるような皮肉な調子でもあ

59

った。

癪に障った織田は打ち切るような調子で、

よく理由もたしかめないで始めから人を疑って色眼鏡でみることも反対で 「とにかく僕は探偵みたいに他人の行動を監視するなんてご免です。また、

者のためにやるべきことがもっともっとあるように思われますよ」 す。……それよりも本部関係の方でこそ、診療所のことや、その他、集結

杉本班長はあてこすりを言われたと思い、一寸、不機嫌な表情を見せた

の黒沢だけはよした方がいいですよ」 「いや、あなたが組員をかばおうとする気持ちはよく分かるんですが、あ

黒沢はね、本部の人たちに対してあちこち恐喝をしているんですよ。と

それから杉本班長は一段と声をひそめて

次第、又くわしくお知らせします。……それじゃ、どうも」 から黒沢のことをよくお願いしているわけなんです。恐喝の真相も分かり すから結局、班長、組長の責任というわけなんです。それであなたにも前 にかく箸にも棒にもかからん無頼漠ですよ、何しろここでは連帯責任制で 「奥さん、着たきり雀でもうこれしか無いワ」

と言いながら屈託のなさそうな笑顔であった。

ジャンパーの上衣のポケットに男のように両手を突っこんで、

だよく分からなかったが、 黒沢は恐喝ばかりしている無頼漠である。 織田もすっきりしない気持ちで自分の部屋に帰 - 杉本班長の話だけではま

九

って行った。

り当ての使役の用事がふえてきたので、この頃はよくやってきた。 交代でやる隣組に割り当てられる便所掃除とか、風呂場の掃除などには 有賀キクヱは今まで織田達の部屋に入ってくることはなかったが、 組割

や、隣組の勤労奉仕にも出てくれた。 郁子が忙しく、直子を手離せない時にも自分から進んで郁子の分担の使役 黒沢の妻君が病気なのでいつもその代わりに出てよく働いた。時とすると

が妙に男の心をそそるのであった。 灰色の部屋の空気を色めき立たせるような、ふしぎな魅力があった。それ っぱり、何だ彼だと冗談を投げ合った。実際このキクヱが部屋に現れると 木村や佐々木たちは有賀キクヱが来ると、いつも大歓迎をして部屋に引

然し、部屋の者はキクヱに従いてくる黒沢の長男・武男には閉口した。

け上り、 武男は部屋に入ってくるなり、すぐにまっ黒い泥足のまま、 果ては窓際に飛び移ったり、あちこちの布団の山をくずしたり、 畳の上に駈

嵐のように走り廻るのであった。

った。 にまたはじめるのであった。しかし一面、表裏のない無邪気な性質らしか 誰かが叱れば一時は恐縮したように静かにするが、五分と経たないうち

他の子供たちより、 ねちねちしないで、よっぽど好感が持てるわ」

男に直子のお守りを頼むと決して嫌と言わず、呼びに行くまでいつまでも 郁子などは武男のこと暗に支持していた。最も郁子にとっては、武

喜んで直子をおぶっていてくれるので、それが武男に寄せている好感の原

ある時、 佐々木が郁子に向かって、部屋のストーブに焚く共同のたきぎ

因であるらしかった。

の中に投げこんで駈けて行った。 男が、どこからか丸太棒を二本、泥のまま引っこぬいて来て、黙って部屋 が、もう無くなってしまったことを話していると、それを耳にはさんだ武

「おもしれえ子供だな」

佐々木は半ば感心したようにその小さい後姿を眺めていた。

までは随分悩まされたそうですよ」 いるそうですよ。はじめは五号室の連中も黒沢のおっさんの気心が分かる 「おもしれえ、と言えばね、奥さん、 あの黒沢のおっさんも実に変わって

有賀キクヱの様子を郁子に紹介した。

佐々木は五号室から来ている設営班の仕事仲間から聞いたという黒沢や

* *

黒沢は大概おそく部屋に帰ってきた。 部屋の者はきっと花札の賭博の帰りだろうなどなど噂をしていた。

部屋

て共同用のストーブを焚きつけ、他の人の鍋や湯わかしなどがストーブに に帰ってくると黒沢は傍に誰が居ようとも頓着なしに、煙をもうもう出

それからお粥をつくって妻君の芳江と武男に食べさせ、自分は給食配給

のっていれば、それを取り下して自分の鍋をのせた。

の雑穀 りと吸い始めるのであった。 の粥を冷たいまま食べ終わるとどっかりと座って煙草を一本ゆっく

横に動かし一言も口を利かないのである。 それまでは黒沢はそのずんぐりした熊のような身体を狭い部屋の中で縦

める。 て自分でいれ、 ている者に「一本くれ」と無心し、 そして他人の汲んできたバケツの水は勝手に使い、煙草のない時は持 妻君の食事が終わればやがて便所に連れて行く。 部屋の人たちにもすすめながらゆっくり甘そうに飲みはじ お茶も勝手に他人の戸棚から借 -といった調子 n 出 0

であった。

一本

といって手を出した。

いる者に遠慮なく

どは、わしづかみにして部屋中の子供に与えて喜ばせた。しかし、そんな 無遠慮な一面、黒沢がふいに何処からか落花生をたくさん買ってきた時な 流のやり方について黙認の形となってしまった。――それは、このような 上げて批難し、 部屋の者たちが一斉に怒ったが、それがいつの間にか彼

始めはそのような黒沢のやり方が余りに傍若無人なので、荒い声をは

わなかった。煙草もある時は畳の上に投げ出しておいて、誰かが黙って取 って吸おうとそんなことはお構いなしであった。そして無くなれば持って

時、誰かがお礼の言葉でも言おうものなら怒った顔をして、てんで取り合

うであった。 佐々木の語るところによれば黒沢の部屋での様子は大体こんな調子だそ

「あのキクヱさんという人はどんな人なの」

65 郁子は黒沢よりむしろ有賀キクヱの方が興味があった。 織田に聞いても

「分からん」

というだけなので余計に知りたい気がした。

「カチューシヤなんて仇名があるそうですよ。何でも一度酔っぱらって『カ い者がそう言ってるんです。『商売女』でしょうな。それにしては純情ら チューシャ可愛いや』の唄を仲々いい声で歌ったことがあるので部屋の若

誰かが『キクヱさんなら大丈夫だ。前をパッとまくればどんな巡警でも好々な。 が通過できないな、何かうまい通行証が借りられないかな、なんて話の時

というわけかな。この間、五号室の者が北京城内に行きたいが城門の関所 しいところもあるが、とにかく堅気な方じゃないですね。『大陸を流るる女』

と通してくれるよ』と冗談を言ったら、いきなりキクヱさんに横っ面を殴

られたそうですよ」

しあわてて 佐々木の話が雑然として、飛んだ方向に脱線しはじめたので、郁子は少

らも随分世話をしているようだし、黒沢さんとは古くからの知り合いだっ 武男ちゃんもキクヱさんによく懐いているし、あの病人の房江さんとや 私小説・橘経雄

いではなかつたようですね」

そこへ織田が帰ってきた。

と話を戻した。

たんですか」

こめているということを聞いて親戚同士でもあるのかと聞いたら、キクヱ 「そうなんです、僕もキクヱさんが啖呵をきってあの黒沢さんも逆にやり

風でいて、とても病人の房江さんをよく世話するし、見ていてあの真似は ら移って同室にしてもらったと自分で言ってましたよ。黒沢さんはあんな さんと房江さんは能本の同郷同村で、それが名簿で分かったので他の班か

とにかく房江さんとはそういう知り合いで、黒沢おっさんとは別に知り合 できない、感心してしまつた。といつかキクヱさんは言ってましたがね。

「明日からまた別な使役があります。第二次の集結者が入ってくるのでそ

「第一次も出発しないのに、 第二次の準備か」 の準備です」

67 集まってきた部屋の者たちは不平そうにつぶやいたが

「いや、第二次が入ってくればいやでも第一次出発が促進されるよ」 との織田の言葉にみんなもそうだなと首肯いた。

+

であった。 今日の使役は広場のはずれにある元のうまやの掃除と、野外便所の設営

ガランとした板囲いのうまやはすきま風がぴゅうぴゅう入り込んで寒か

「後から入ってくる方が割がわるいな」

った。

と、第一次集結の者たちは少し満足気であった。

「そりゃそうさ、集結しなければ帰れないというのに城内にいたまま巧く

に相追を打つ着られる。

帰ろうなんて虫がよすぎるんだ」

と相槌を打つ者もいた。

織田達は小川から少し離れたところでツルハシを振り上げていた。

らず、徒に小砂利をはじき飛ばすのみであった。 チコチの土なので掘り起こすのに容易でなかった。ツルハシは中々突き通

寒い風が吹きまくっていたが、みんな額から大粒の汗を流していた。黒

沢はいかにも軽やかにツルハシを休みなく動かし、ひとりでその三分の一

|織田さん、帰りましょう。 あんたの分も掘りましたから、かまいませんよ」

をきれいに掘ってしまうと、他の者にそのツルハシを手渡した。

黒沢は織田のそばに寄ってきて誘った。

織田は黒沢に冷やかされて額を掻いた。

「大分へこたれていたようですな

『西苑』

私小説・橘経雄

「行きましょうや」

「なに、やることやりゃ、かまいませんよ」 そう言われても、誰もまだ帰らないので織田は一寸ためらった。

班長に言い残して帰ってしまった。 管理所から監督に来ていた若い兵士は少しその辺を見廻ると何やら設営

69

70 織田は設営班長に一寸、会釈し、黒沢と連れ立ってそのまま帰ってしま

って歩いてくると、崩れた煉瓦塀から、中国の百姓家の子らしい十四、五 った。設営班長は微苦笑しただけで何とも言わなかった。途中、土堤に沿

才の少年が落花生や煙草を籠の中に入れて売りに来ていた。

るので少年は時折監視兵の姿に注意の視線を向けていた。 遠くの方に重慶軍の監視兵の姿が小さく見えた。見つかれば追い払われ

黒沢は煉瓦塀の穴に近寄

何があるんだい (有甚摩東西呀)」

と呼び寄せた。

そこから黒沢はその少年としばらく話し合い、何がおかしいのか大きな

声をして面白そうに笑い合った。

しばらくして黒沢はよごれた帽子の中に、落花生と煙草をいっぱい入れ

「うまいもんですな、中国語が、あれじゃ中国人同様だ」 て帰ってきた。

と織田は感心した。

「この間はそーっと抜け出して、あの万封山の麓の村まで行って来ました 重品の一つである落花生を食べはじめた。

「ほう、そんなことしてあぶなくないもんですか?」

「何でもありませんよ。村通りは重慶の兵隊がいっぱいでした。最も中央

言ってボヤいてましたよ。一緒にいっぱいやろうと思いましたが金がなか 軍じゃない、雑軍でしょうな。あの連中はこれから満州の方に行くんだと

中央軍の者はまだ到着していないようですな。それに共産党軍の勢力が強 あの連中と色々話してきましたがね、大概は寄せ集めの新兵で、重慶の 織田は中々大胆だなと黒沢の顔を見つめた。

私小説・橘経雄『西苑』

ったのでやめました」

毛さんの天下争いだね。日本は敗けてどんな様子か。 いことを知っているので、奴さん達も内心は複雑ですよ。今度は蒋さんと 共産党になるか、と

聞くから、帰ってみなければ様子が分からないが、とにかく軍人の威張る

71

世の中や、食えない世の中はまっぴらだと言うたら賛成だと言ってました。

したがね。お茶や煙草などくれてとにかく歓迎でしたな」 これからは日本と一緒になってアジアを守るために戦おうなんて言ってま

れの野の上を、白い雪が悠々と流れて行った。 寒い風が吹いていたが、空は青々晴れて気持ちが良かった。大陸の冬枯

二人はやがて立ち上がった。

織田は黒沢の上衣がないのに気がついて

「いや、なに……一寸煙草と落花生に化けたんですよ」「さっき着ていたようでしたが、上衣はどうしました」

黒沢はそう言うと、愉快そうに笑った。

+

かった。帰国が延び延びになるにつれ、どこの部屋でも食料と燃料の心配 集結してから二ヶ月近く、十二月に入っても引き揚げ期日は発表されな

であった。手持金なしで、 がますます深刻になった。 救恤を受けている大半の者も古い雑穀の饅頭で 特に病人や幼児をかかえている者は尚更のこと

はひどい下痢をおこした。

をしていた。 五号室でも皆がストーブの回りに集って、さっきからわいわいしゃべり

「ひね米をこの間購売部で売っていたそうです、わたしはそれを後から知

『西苑』 「一人一斤ずつだったそうだが、すぐ売り切れだったそうだ。しかし大概 の人は知らなかったらしい」 ったのでとうとう買いそこねましたよ」

私小説・橘経雄 「それならここにも配給があった筈だ。とにかく今まで何回も組長にも本 「それが怪しからん。噂では、城内の残留者には中国側からの食糧配給が あって大分放出されたということだ」

「そりゃ組長ばかりに責任を持たしても無理だ、責任はわれわれさ」 部にかけ合って買ったのだが、さっぱり要領を得ないや」

73 「一つ班長会議をおこして助け合いの方法を強化し、また中国側にも本部

74 からうまくかけ合ってもらうんだな」

「もう悠長なことを言ってはおられん、あと二週間も経てばみんな手をあ

げてしまうよ」

「二週間どころか、おれたちは明日から手を上げるよ。とにかく早く引き

「全くだ……それにしても、まだ悠々白い飯を食って酒をのんでいる奴も 揚げできるようにしてもらいたいな」

「本部の二階にいる奴等なんかも相当なものらしいな。何とか会社の重役 いるのだから驚いたなあ」

や銀行家で、『敗戦成金』的な連中もいるらしい」

「とにかく帰国まではお互いどうにかして生きのびて行かなくちゃなあ。

給についてもうやむやになったら大へんだ」 今までの本部がだらしなければすぐにやめてもらうことだな。さっきの配

部屋の者たちが盛んに話し合っているのを、ごろりと横になって黙って

聞いていた黒沢が

「うやむやにしなければいいじゃないか」

75

みんなは一斉に黒沢の方を振り向いた。

と、ふいに口を入れた。

「いい方法なんて、まあ、ないね」 「それにはどんないい方法がありますか?」 と、少し突っかかる調子で聞いた。 水田という洋服商をしていた中年の男が

「なんじゃ、それじゃ……」

黒沢は寝転んだまま、ゆっくり答えた。

と、部屋の者たちは仕方なく苦笑してしまった。

「ぺちゃぺちゃしゃべり合ってるだけじゃ、他人まかせじゃ、いい方法は

見つからないということさ。……おれが話をつけてきてやろう」

黒沢は寝転んだ姿勢を変えずにうそぶいた。

出かけて行った。 しばらく経って夕飯を済ますと、黒沢はいつものように独りで何処かへ

物資班長の白井の居室は本部一階のはずれにあった。

「第一斑の黒沢だが、一寸用事があって来た」

と、黒沢は戸を叩いた。

内部では瞬間、話し声がぴたりとやみ、やがて

どうぞ——」

と茶色のジャケットを着た若い者が手を開けた。ここは個室で細長い部

部屋は酒くさかった。

屋であった。

赤い顔をした若い者は、狭い土間に乱雑に脱ぎすてられた軍靴をよろよ

ろした足で一方に片寄せ黒沢を通した。

ソーセージをのせた皿や半分のみかけのウイスキーの缶が見えた。 いままで酒盛りをしていたらしく、真中に置かれた机の上には落花生や

「今晩は――」

「やあー

と、大様に挨拶を返して、白井班長は

「まあいっぱい」

と茶碗にウイスキーをゴボゴボとついで黒沢の前に出した。

白井班長の妻君は、黒沢が部屋に入ってくると白井に何か耳打ちされ、 壁にはもう一人の若い者がよりかかって煙草の煙を吐いていた。

濡れた手を前がけで拭きながら、チラリと黒沢を一目し部屋の外へ出て行

ら、つみ重なった布団の端が見えた。 細長い部屋の奥の方はカーテンで仕切ってあって、カーテンのすき間か

私小説・橘経雄『西苑』

った。

カーテンの蔭には、誰かが酔っぱらって寝転んでいる気配であった。

黒沢は茶碗のウイスキーには手をつけず、

しているそうだが、白井さん、一つ早く配給を頼みますよ」 「ここの集結者にも中国側から食料の配給があって、 物資班でそれを保管

77

1

78 「配給?……そんなもの有りませんよ。多分城内ではあったかも知れませ んが、ここではまだです」

早く困っている人に廻してもらいたいもんですな」

「然し、五日前にも城内からトラックが入ったようですが、あれは何ですか。

「そんなことがあれば勿論、救恤用、厚生用としてすぐ廻しますよ」

と、白井は自分の茶碗にウイスキーをつぎ、ぐっとあおった。

「ふん、救恤、厚生班か、ここの本部は名前ばかりで実際何もやってない

じゃないか」

「そりゃあ、わたしの責任じゃないよ、本部も必要だからできてるんで、

「なにっ、お前も本部役員の一人じゃないか、大体、本部のなかでも物資 班の連中がいちばんインチキらしいぞ」 文句があったら本部にかけ合うんですな」

「インチキ……? 君は今日、一体何の用でここへ来たんだ」

は、鋭い目付きをし、やおら上体を起こした。 隣で落花生の皮をつぶしながら、じっと様子を窺がっていた二人の若者

が病人をかかえてお困りのこともわたしはよく知ってます。わたしも個人 「まあ、そう大きな声をしないでいっぱいのんだらどうだい。……あんた ひねりつぶしてやるからな」

黒沢はニヤリと笑って

「おい、物資班のおい連中、どうだい」

と声をかけた。

二人の若い者は口をかたく結んで、黒沢の鋭い視線を外した。

「まあ、いいさ、狸共がインチキしているのが分かり次第、ひとりひとり

『西苑』

的に一つなんとかしますから」

「マアキュリイ五つですか」

白井班長は上衣のポケットから千円札を二枚取り出し、黒沢の目の前に

私小説・橘経雄

79

方で売られている外国製煙草で、ここでも物々交換の材料になっていた。

黒沢の笑い声に、白井班長は急いでその肥った上体を前に突き出し、大

と、黒沢は蹴飛ばすようにアハハ……と笑った。マアキュリイは華北地

きな声で烈しく叱鳴った。

困っているからと思って親切に言ってやったんだ。それが何だ?(おい、 「わしは、君にゆすられるような覚えはないんだ。病人の妻君をかかえて

ゆすりに来たんなら帰ってくれ」

たくて来たんだ。……集結者のための救恤用予算の金は自分の商売用に廻 「ゆすり? 勘ちがいしちゃ困るよ、今日はな、筋道をはっきりして貰え

か。そんなことが許されるのか。それを聞きにきたんだ」 す筋合いのものか、どうか。配給品はおのれの懐に入れていいものかどう

「おれは、お前たちが毎晩手下を集めてここでソーセージを丸かじりにい

白井班長は黙っていた。

や子供たちのことをもっと真剣に考えろ……ただ、それだけのことなんだ_ っぱいやってることなんぞ、ぐずぐず野暮なことは言わねえ、せめて病人

「……それができないというなら、すぐに本部の役員はみんな辞めてくれ。

黒沢は白井班長の顔をぐっと見つめながら続けた。

おれはいつでも知っていることは皆に公表して黒白をつける積りなんだ」

君の言ったことについても全力を尽くそう」 「君の話はよく分かった。そう簡単に行かない事情があるんだが、今後は

「ほんとだな」

と黒沢は念をおした。

「本当だよ……それじゃ、これで話は打ち切っていっぱいやろう」 と、白井班長は傍の若い者に目くばせして机の上を片づけさせ、新しい

ソーセージを台所の方から運ばせた。

「いや、話が分かればおれは帰るよ」

きで立ち上がり、棚の上の箱から何やら取り出した。

と、黒沢が立ち上がると、白井班長も酒くさい畳の上を泳ぐような手つ

「帰るのか、じゃ、これは改めてお見舞いだ」

私小説・橘経雄

『西苑』

白井班長は分厚い百円紙幣の札束をわしずかみにして突き出した。

なんだ?」

振り返った黒沢は、それを見ると烈火のように怒った。

「ふん、あくまでも買収して丸めこもうとするんだな。おもしろい、それ

は絶対帰らんぞ」

ならここへ百万円、耳を揃えて並べろ。そうしたら帰ってやる。それまで

黒沢はどっかりと机の前に座り直し、腕組みをした。

部屋の空気がしんとなった。

蒼ざめた白井班長は唇の端を小刻みに痙攣させ、じつとそのまま立ちつ

くした。

「貴様、本心から話が分かったんじゃないんだな」

黒沢はその姿をにらみつけて低くつぶやいた。

白井班長は救いを求めるように、カーテンの蔭に視線をやった。

すると、それに応じるようにカーテンをまくり上げ、背の高い男が

「おい、黒沢、しずかに帰ったらどうだ」

った。 と、ずかずかと前に現れた。その後にもう一人の四角い顔の男が目に映

背の高い男は元警察官で、現在ここの警務班長をしている岡で、後に従

っていたのは第一班の杉本班長であった。

¯やあ、これはこれは、お客様が居たんでしたか。失礼しましたねえ」

黒沢は腹の中で

「ふん、こんなことだろうと思った」

と合点しながら、とぼけた表情で二人の姿を見上げた。

だけが取り残されて帰国できなくなるぞ」 おい黒沢、あまりいい気になって暴れない方がいいな、……いまにお前

岡の脅かすような言葉に

「なにいっ? もう一度言ってみろ。貴様たちこそぐるになって毎晩ここ

で酒を食い酔うていやがる。よしっ、こうなりゃとことんまでやってやる

『西苑』

ぞ

帰ったらいいじゃないか」 「わからねえ奴だな、白井さんが親切で出したお見舞い金だ。受け取って

私小説·橘経雄 「貴様の知ったことじゃねえや、そんな腐った見舞い金を貰うより餓死し

83 「へえ、立派な心がけだな」

た方がましだ、見損なうなっ」

「黙ってろっ」

「なにっ」

「やる気か」

と黒沢はうすく笑って立ち上がった。

「よせっ、岡さん」

殺気が部屋中に流れた。

白井班長は手で制し、ふたりの仲に分け入って、

「静かに飲もう、これから徹夜でやろう」

と哀願の表情になった。

「いや、こいつくせになる。方々で今までもゆすりをしやがって……」

と岡の言葉が終わらぬうちに、ガンと横顔に一撃を受け、岡の身体は部

屋の奥にどうと突き飛ばされた。

両方から若者が飛びかかろうとするのを

「しゃらくせえ」

とせせら笑うなり、黒沢は目の前の机を足で蹴飛ばした。

ウイスキーの罎や小皿が壁にぶつかって部屋中に散乱した。

「早く警務班の者を呼んで来い」

杉本班長がおろおろ声で言っているのを後に聞き流し、黒沢はゆっくり

と部屋の戸を開けて帰っていった。 黒沢が五号室に帰りついた時は消灯後だった。

「ふん、笑わせやがらあ」

と黒沢は独りごちた。

「おめえに言ったって仕方がねえさ」

隣の寝床からまだ起きていた、有賀キクヱが声をかけた。

『西苑』

「どうしてさ?」

「おや、ごあいさつだわね」

私小説·橘経雄

顔を向け キクヱは、そのまま寝入ろうとしたが、しばらく経ってから黒沢の方に

「やっぱりあんたでもうやむやだったんでしょう」 と訊ねてみた。キクエは黒沢が今夜、ひとりで本部に談判に行ったこと

「うやむやにはしないさ」 を推察していたのであった。

入ってしまった。 と太い声でうるさそうに返事をすると、黒沢はいびきをかいてすぐに寝

織田が定例の組長会議に出席すると、杉本班長はいらいらした不機嫌な

様子を見せていた。

に相談してからやってもらいたい。その点、組長さん方もお含み願います」 言う者が多いそうだが、組や班に関することは勿論、その他のことも班長 「この頃、組員のうちで直接本部や役員室に押しかけ、色々不平や不満を

- 時にこの班の者は直接派が多いようですし織田さんの組なども猛者揃い

と杉本班長はなぜか織田の方は見ずに一気にしゃべった。

ですから、充分ご注意をねがいます」

杉本さん、昨日の晩だか、 購買部の倉庫が破られ、大分品物が盗まれた

という噂ですが本当ですか

組長の一人が杉本班長に訊いた。

「どうもそうらしいです。はっきりしたことはわかりませんが、とにかく

困った事件が色々起こるので嫌になりますよ」

『西苑』 「ところが今の話ですが、ひね米などが相当盗られたというので、まだそ んなものがあったのかと憤慨している者も多いですよ」

と他の組長がみんなを見廻しながら言った。

「全くだな、砕けた砂交じりのひね米でも病人にゃ助かるし、第一そんな ものがありゃ購買部で安く売ればいいんだ」

と若い組長が応じた。

私小説・橘経雄

「班長さん、盗んだ者は外部のものですか、内部の者からですか」

「そんなことはわかりませんよ、いま調査中ですから」

と杉本班長は言いかけ、購買部の盗難事件の話を打ち切るように、一段

と大きい声で

「では皆さん、今日は耳寄りの話をお知らせいたします。……近くLST(上

陸用艘艇)によって第一回の引き揚げが始まることになります」

杉本班長の報告にみんなは思わずワッとばかり歓声をあげた。

「ほんとうですか?」

「具体的なことについては城内の日僑自治会本部とも連絡中ですが、近く

LSTが出ることは組員にも発表してください。いずれ詳細についてはわ

かり次第また集まってもらって発表します」

「いやあ、ありがたいな」

「なによりだ」

「第一回の人はうまくゆくと内地でお正月を迎えられるかも知れんぞ」

皆は急に活気づいて、興奮して話し合った。

杉本班長は一座を見廻し、改めて

皆さん」

と呼びかけ

に見つかったそうですが、この班からは絶対にそんな者を出さないように 「この際、特に自重しなければならないことは、さきほど申しました注意。 また最近消灯時間後でも花札などをやっている不心得な連中が警務班の者

共同責任ですから、その組の者だけ帰国できないということも考えられま をのんで乱暴したり、賭博をしたり、そんなことがもし管理所にわかれば 願います。責任をもって組長さんはご注意願います。火事を出したり、酒

「そうだ。そうだ」 人々の間からそんな声が一斉に起こった。

- もしそんな奴があれば、われわれでどしどし制裁を加えるんだね」

十四四

「どこでも朝から大騒ぎよ」 翌日の朝、 本部に打ち合わせに出かけた織田が午近くに戻ってくると 1

んももう一頑張り頼みますよ」 いよいよ帰れるんだものなあ、大騒ぎも無理ないよ。直子ちゃんお前さ

と織田も上機嫌で直子の小さな頭を撫で、頬をつついた。

郁子の必死の看護ぶりが功を奏してかようやく危機を脱した。 集結したらとても助かるまいと半ばあきらめ覚悟していた直子の容態は

の饅頭を自分で丹念によくかんでから口移しに直子にやった。直子は相変 なくなると給食用のくさい包みの、大人でも下痢する者の多い黄色い雑穀 合いになった者に売りに行って米に換え、それでお粥を作った。売る物が 郁子は手持ちの米が無くなってしまうと持ち物を一つ一つ集結所で知り

にも股にも肉がつき、時折はかすかながら笑い顔もみせるようになってき

わらず瘠せて小さかったがふしぎにも下痢もだんだん止まり、少しずつ頬

織田は丸々と肥えた、つぶらな瞳の誕生頃の直子の姿を思い出

「よしっ、この調子なら元のように元気になるぞ」

く思い文句を言わずに郁子に協力した。 し、今までは成行きに任せていたようないわばなげやりの気持ちをすまな

することも度々であった。手が切れるような水でのおしめ洗いも毎日交互 直子が泣きやまないために、郁子と交互に一晩中廊下に立ってお守りを

ことができたのであった。 でやった。そしていつか直子は声を立てて笑うまでにどうやらこぎつける

今日、本部から聞いたところでは第一回の出発は、独身者や家族を先に返 ほんとうに郁子も、もう一頑張りだから、しっかり頼むよ……それから

しているような単身者に決まったらしい。家族連れは、その次になるそう

「それにしても第一回が出発すると希望が持てるので有難いわ」 と郁子は微笑ったが、急にその微笑の影を消して、

私小説・橘経雄

「ああ、忘れていたわ、黒沢さんが今朝中国の憲兵さんに引っ張られてい

ったとかお向かいの部屋の人に聞いたんですけれど、ほんとうかしら?」 と心配そうに織田の顔を見つめた。

91

「引っ張られたって、黒沢さんが」

あなたがお留守のとき、キクヱさんが一度見えましたが、その時はなん

いきましたが、その報告にでも来たのでしょうか」

とも言っていませんでした。キクヱさんはまたあとでと言ったきり帰って

織田はそれを聞くと、すぐに五号室に出かけて行った。

の姿を認めると水枕から頭をはなし挨拶をした。 五号室には黒沢もキクヱの姿も見えなかった。黒沢の妻君の芳江は織田

「朝、出かけたきりまだ帰ってきませんので、よくわからないんです」

織田が黒沢のことを訊くと、

と芳江は仰向けに寝たまま、かすれた声で返事をした。

部屋の人たちにきいても皆はっきりしたことはわからなかった。

をしているとやがて中国の巡警が来て、黒沢の腕をとって管理所の方へつ

唯、今朝、黒沢が本部前の道路で警務班の腕章をつけていた者と立ち話

れて行った――ということは確からしかった。

「キクヱさんはすぐ飛んで行きましたから帰ってくるとわかると思うんで

すが。本当に組長さんにご迷惑かけますねえ」

を見つめた。

三屋の戸口の傍に腰を下ろしていたおかみさんが、心配気に織田 日の顔

織田は少し不安になり急いで杉本班長の部屋に出かけたが留守であっ

「又、あとで来ますから。杉本さんが帰ってきたら織田が来たとお言伝で してください」

賀キクヱの姿が見えた。 と杉本班長の部屋の者に頼んで足早に階段を下りてくると、窓の外に有

央の入口で待っている織田の姿を認めるとキクヱも足早に近寄ってきた。 風が吹く度にキクエの持っていたお盆の上の白い布巾が落ちそうになっ キクヱは手に何か抱えて急ぎ足でやってくるところであった。階下の中

「黒沢さんどうしたんです」 と織田が訊くと

た。下にお茶碗とお皿がのっているのが見えた。

94 「いま黒沢さんの差し入れに行ってきたところなんです」 とキクヱは返事をした。

「差し入れって、一体どこにいるんですか」

「どうして留置場に入れられたんです」

「留置場にいるんです」

「原因がよくわからないんです。今朝、黒沢さんのことを聞いたのですぐ

所の方へ行ってみたんです」 織田さんの所へ相談に行ったんですが、お留守だというのでとにかく管理

「おかしいなあ、どうしてそんな所へ入れられたのかな……? ここに留

置所があることも今まで知らなかったよ」

「とても立派な留置所がありますよ」

とキクヱは皮肉気に笑ったが、すぐ真面目な表情に帰

「黒沢さんが第三区にある留置場に入っているということがわかったので

開けなきゃ、勝手に出るぞと叱鳴り、四角の太い格子をみしみしと持ち上 とにかく麦飯を作って差し入れてきたんです。あたしが行ったときここを ていた。

けた。

げるので警務班の人たちも困っていました」

班長の部屋へ出かけて行った。 キクヱの部屋で説明を聞き終わった織田はキクヱと連れ立って再び杉本

杉本班長は夕方近くなってもまだ部屋に戻って来なかった。

士五.

織田は毛布一枚と箱から抜き出したバラのタバコをポケットに入れて出か キクヱが夕飯を差し入れに行くというので織田も一緒に面会に行った。

第一区、第二区、第三区の建物はそれぞれ道路をさしはさみ向かい合っ

野菜を大切そうにかかえた奥さんや使役帰りの一 隊や、 中 国 側の管理所

まだ暮れ方なので各地区間の往来禁止の時間には余裕があった。

の役員や女や子どもたちが忙しそうに出入りしていた。各区の通用口

には

「警務」の腕章をつけた日本人側の警備員が外出証や通行証 の有無を調べ

銃剣をつけた重慶兵が警備していた。織田は通用門と立哨所で通行証を示 たりして自治的に警備にあたっていた。中国側の管理所や兵舎の表門には

し第三区へ入っていった。留置所は第三区の通用門の傍にあった。 キクヱは第三区の通用門の受付の窓際にお金を置き

「お願いします」

と頼んだ。

「第一区第一班の組長ですが黒沢さんに面会に来ました」

織田は受付のわきの土間をとおり次の部屋に入っていった。ここも六畳

位の広さの土間になっており、煙の出るストーブを囲んで警務班の者がお

茶を飲んでいた。

「どうもご苦労さんです……あの黒沢さんはどこにいますか」

織田の大きな声にストーブを囲んでひとかたまりの者たちがジロリと一

斉に織田の方を振り返った。

誰も返事をしないうちに奥のほうから

「やあ、すみませんなあ」

であった。 と声がした。見るとそこに四角の太い木を格子に組んだ内地式のブタ箱、

「いままで眠っていましたよ」

と黒沢はその格子の合間から顔をのぞかせた。

ような錯覚を感じた。 こんなブタ箱を見ていると織田はいかにも日本内地の警察署に来ている

「わたしたちは本部の指図でここに黒沢さんを留置したんだし本部は中国 ことの真相はここに居る警務班の者も分からなかった。

『西苑』

側の了解をうけたんでしょうし、あとのことは私たちにも分かりませんよ。

とにかく飯のときはここで食べていいことになっています」

私小説・橘経雄

「さあ飯にするかな」 と畳のしいてある部屋の片隅を無愛想に警務班員の一人が指さした。

「ここはもとの営倉でしょうか」 黒沢はブタ箱から出てくると畳の上に座りゆっくりと飯を食べ始めた。

97

「そうでしょう」 「そうでしょう」

払いやがって暴れるもんだから見せしめにね。こんなことははじめてだっ 「この間は女の酔っ払いを一人ぶちこんでやりましたよ。女だてらに酔っ

7

と腹立たしそうに付け加えた。

「そんな者はみせしめにするのも仕方がありませんが、もう少しでみんな

緒に帰っていくんですからお互いに仲良く行きましょうや」

と織田が年輩の割におだやかな容貌の警務班員に話しかけると、

「そうなんですよ、この人にも僕はそう言うんですがねえ」

夕飯を食べ終わると黒沢はストーブの方にずかずかと寄ってきた。 と黒沢の方を一瞥した。

「どうしたんです、一体」

「いやあ、あとでわかりますよ」

「あとでわかります」

「どうも済みません」

と近寄り、低く、短く

黒沢は織田と視線を合わせると目尻に皺をよせてにやにやと笑っただけ

だった。

「留守の方はキクヱさんもいることだし、心配ないとしても、帰国も間近

気をつけて下さい」 に迫ったことだし早く出してもらうように運動しますよ。今夜も寒いから

ストーブの囲いの者に分けた。 織田は持ってきた古毛布を手渡した。それから煙草をとりだし、黒沢と

く織田の後に、 黒沢は織田の差し出した煙草を一本うまそうに吸い終わると、帰って行

った。 とささやいた。そして又、警務班の者に促されてブタ箱の中に入って行

差し入れのお盆を持って外へでると、待っていたキクヱが

99

「あたしが持ちます」

と、すぐに走り寄ってきた。

もう各区の通用門は閉じられていた。

織田は立哨の重慶兵に挨拶し、外出許可証を見せて第一区の方へ帰って

きた。

流れていた。 各班の部屋には灯りがともり、各棟からはストーブの煙がうすく夜空に

ときワッと歓声が聞こえたが、あとはまたひっそりと静かになった。 寒いので外には人影は殆ど見当たらなかった。どこかの二階の方でいっ

「寒くなったなあ――」

織田は真深に蒙古帽をかぶり直し、後についてくるキクヱを振り返った。

昏いなかでキクヱはうなずいた。

二人は本部の裏手の小さな流れに沿ってゆっくり歩いて行った。

いつも元気によくしゃべるキクヱが妙に黙りこんでしまっているのに織

るのであった。

やった。

「どうしたの、いやに黙りこんで」田はふと気がついて、

と顔を覗き込んだ。

たが、夜目にも白い歯ならびを織田は美しいと思った。 キクヱは何でもない、という風にかぶりをふり、黙って笑っただけだっ

しんしんと冴えかえるこんな星空を眺めていると、織田の胸にも異境の

にはまた何も彼も投げすて、思い切り酒にでも酔ってみたい衝動にかられ 放浪者といったような佗びしさに身を噛まれる思いであった。そして一方

その時、キクヱが小さく叫んで立ち止まったので織田もその方に視線を

入って行く二つの黒い影があった。 がらんとした朽ちかけた前方のうまやの建物のなかに、もつれるように

織田もキクヱも瞬間ハッとしたが、織田はすぐにそれが何であるかに気

がついた。既に部屋の木村から、うまやのなかでのあいびきや、性の営み が行われているということを聞いていたからであった。

織田は久しく忘れていたような熟っぽい血が急に身体中を駆け巡るのを

覚えた。 暗い、ぽっかりと大きい穴があいているようなうまやの入口がへんに誘

惑的であった。 織田は妄想を打ち払うように足早にうまやの前を通りすぎた。

「キクヱさんには今度の黒沢さんの事件について何か心当たりがあります

調でたずねた。 土橋を渡り、宿舎が間近に見えてきた頃、織田はいつもの落ち着いた口

かにも愚か者のようにみんな誤解してしまうんでしょう」 るとか本部では言っているそうですが、あの見たところ凄い顔つきからい 「はっきり分からないんです、最近の購買部の盗難事件にも何か関係があ

と投げ出すように言ってから、

お金の方はどうなんです」

にぶつかって行く気持ちがよく分かるんです」 ざんだまされて苦労しましたから、男の黒沢さんがあんな風に本部の役人 たしも張家口引き揚げの時などは軍のおえらい方達や役人様などにはさん 黒沢さんが、白井なんか日本人の面よごしだと怒っていましたがね、あ

ているのか分かりゃしない。全く怪しいことだ」 あの黒沢は救恤を受けているくせに白米や卵子を食べている。なにをし

織田はいつか杉本班長が部屋に来て

『西苑』 「立ち入るようだが、調査表の所持金なしの報告は別として、黒沢さんは と言っていたことを思い出し、思い切って、

「金遣いが荒いので、そこがみんなから誤解されているんだと思うんです

で話を続けた。 キクヱは一たび、そこで言葉を切ったが何も彼も織田にぶちまける調子

103 「あの人は、賭博にかけては天才的らしいんですよ。ここへ来た当時も毎晩

食べさせなければ明日にでも参ってからでしょう。自分では炒った大豆を どこかでやっていたようですが、それも芳江さんに白米のお粥や卵子でも

キクヱはそう言ってしばらく黙っていたが、やがて織田の横顔を見つめ

ポリポリ食べているだけなんですが」

沢さんは『他の者にいくら誤解されても平気だが、織田さんだけには収中 のありのままのことを分かって貰えればそれでいいんだ』と言ってました」 「今朝、差し入れに行った時でした。一寸、言葉をかわす暇があったが黒

えるように遠くの方に視線をやった。 「そんなこと言ってましたか」織田はさりげなく返事をしたが、じっと考

「とにかく黒沢さんの奥さんが可哀想だし、何とか早く出して貰うように したいね。第一、こんなところで日本人同士が争うのも恥さらしだよね

頼みます」

織田はうなずいて約束した。キクヱは自分のことのように心配して頭を下げた。

織田は怒った。

れてしまった。 ということが伝えられると、もう、それだけで黒沢は稀代の愚漢扱いにさ 日本側の本部でも手に貰えず、引き渡され、黒沢が留置所に入れられた

「あんな奴はどうなったって構いやしないじゃないか」

「すぐに集結所から追っぱらってしまえ」

「日本人の今の立場も忘れやがって、こんなことで帰国が一体どうするん おかしいことには、黒沢のことや、事件の真相をよく知らぬ者ほど、余

が黒沢に対する連署の身柄引き受けの陳情書提出を相談しても、杉本班長 白井、杉本、岡などの本部関係の者は特に強硬だった。もちろん、 織田 計にいきり立ってあれこれと興奮して噂をバラまいた。

はてんで受けつけなかった。

「いいですか? して、早く留置所からだしてもらう工夫をするのがわれわれの責任じゃな 杉本さんもご存じでしょう。何で中国側に引っぱられたのかを早く調査を ればいけないんです。中国には昔から保甲制度の連帯責任制があることは まで責任を負い、黒沢さんが残されればもちろん私たちも一緒に残らなけ 今度のことは連帯責任なんですよ、班長と組長とが最後

構わないが、あいつとのお付き合いで居残りなんて真っ平なこった」 引き揚げの最後まで居残って日本人の面倒を見る積りだから、居残るのは あいつはどこまで他人に迷惑をかけるか分からん奴だ。わたしはここの

柄を責任をもって預かるという陳情書を管理所側に提出することに同意し ときめつけられると、にわかにあわてだし、結局、第一班連署で黒沢の身 のことを説明され、きつい語調で『じゃあこのまま打っちゃっておこう』 杉本班長は、はじめはいきり立っていたが織田からじわじわと連帯責任

それから五日目に、本部からも管理所に接衡に行き、黒沢はやっと釈放

「やあ、敗けましたよ」

もひとまず落着したのでホッとしました。黒沢は私にも謝りに来たので、 互いえらい迷惑でした。皆さんにも色々と骨を折らせましたが、まあ事件 も了解し、やっと釈放されました。全くあんな奴がこの班に居るためにお い、前科を悔い一切左様なことはいたしませんと謝ったので、当局も本部 黒沢もいままでは色々なゆすりをしたり、あばれたりして真に相済まな

された。

ると、杉本班長はすぐに話題をかえて、次の議題に移って行った。 に、いかにも勝ち誇ったような様子で話をしていた。が、織田が部屋に入 ん油をしぼってやりましたよ」 その時、この班の組長さんにも、よくお詫びをしなさいと言って、さんざ 田 が次の組長会議に少し遅れて出席すると杉本班長が他の組長たち

十七

留置所から出てきた黒沢は、織田の部屋に挨拶にやってきた。

思いなしか、その横顔は蒼くやつれて見えた。

棚に沿って、二人は新しい墓地のある野原に向かって歩いて行った。 黒沢からはっきり真相を聞きたかったので、織田は黒沢を誘って部屋を

かし、 たというわけです。すまんこってした」 に嫌になっちゃって、徹底的に戦わず、うやむやのうちに出てきてしまっ 奴らの内幕をぶちまけて徹底的に黒白をつけてやれと思ったんですが、し らしいんです。わたしは懇切丁寧あちらで取り調べられるのをいい機会に から、やれ恐喝だとか、やれ暴行を働いたとか、色々、中国側に密告した がありましたが、終戦と同時にみんな売り払ってしまいましたから。それ 星がついています。もちろん、短銃は今持っていませんよ。昔はいいやつ り調べのために引っぱられたんですよ。誰が密告したかは、 わたしが短銃をかくして持っている、 本部 の連中、 白井や杉本や岡など、 と誰かが管理所に密告したので取 あんな奴らを相手にするのが急 わたしには目

大概、子供や赤ん坊だった。

でいた。

武男だった。

と、黒沢は織田の方に向かってぺこりとお辞儀をしました。

れに本部でも大いに集結者の救恤のためにも全力を尽くしているよ。これ いや、敗けたんじゃないよ。いまの自分たちには限界があるのだし、そ

と織田は黒沢を慰めた。でよかったんですよ。もう、それに帰国も追いついてきたしね」

「随分、死にましたねえ」

柵のはずれ近くになり、二人は急に足をとめた。

棚の土堤の下には土を盛り上げた新しい墓所がもう十五、六ばかり並ん

盛り土の上には墓標代わりに、大小の石が無雑作に置いてあるだけだっ

やがて墓所をめぐり、 土橋をすぎ広場に出ると、二人の姿を見つけて、

遊んでいた子供のひとりが矢のように走ってきた。

武男は走りつくと、黒沢の手にふれ、織田の背中をどんと叩いて、

何か

久し振りの父親の姿にうれしかったのであろう。うれしそうにわめきながら、また駆け抜けて行った。

「しようのねえ奴だ」

黒沢はその後姿に視線を送りながらつぶやいた。

「子供は武ちゃん一人ですか」

「いやあ、三人あったんでしたがね、二人は生まれるとすぐ死んでしまい

ました。何しろ、そいつらの生まれる頃は、日本人が五十六人しかいない

所で暮らしていましたから、自分が産婆代わりにとり上げたこともありま

いつか来たことのある土堤の枯草の上に二人は腰を下した。

したよ」

珍しく、黒沢は自分から身の上ばなしをはじめた。

彼自ら話すところによれば、黒沢は福島の一寒村に生まれた。小さい時

がて自分も抗夫となり父親と一緒に足尾で働くようになったが、十七才の 母に死に別れ、炭抗夫の父に連れられてあちこちの抗山を転々とした。や 『西苑』

頃には既に酒と女と賭博の味を覚えた。

れなくなり、満州で馬賊になって思いきり活動したいものだと単身大陸 一十才の時、 酒 の上から喧嘩となり、 相手を傷つけて、その土地に居ら

渡った。満州放浪中、いまの芳江と四平街で夫婦になった。

山から宣化へ移った。朋友は寧ろ中国人に多く、李子明や、また青幣の親 それから大陸生活十五年、主に抗山関係で働き、五年前華北に流れ、唐

であった。 働 分の劉白山ではその太っ腹の膽っ玉に敬服し、自分からその客分となって 1 、たこともあった。ずうっと生身のこの身体を賭けて暮らしてきた生活

しまった。 親父は自分の満州放浪中に死んだ。芳江は満州時代は身体が丈夫であっ 華北に流れてからは無理な生活がたたり、胸もすっかり悪くなって 帰国まで身体が持つかどうかと思っている。はじめ自分は中国

て様子を見たいと思うようになった。 外国 の兵隊に占領されてめちゃくち

にこのまま残れるものなら残りたいと思ったが、戦争にまけた日

本に帰

ゃになっているという話も聞いたが、 そのくらいで亡びるようなら亡んで

111

と思っている。 なるだろうし、武男もまた一人前の抗夫に仕上げ、一緒に抗山で働きたい しまえばいいんだと思っている。まあ、飯場に行けば食うだけには何とか

あれこれと断片的ながらその半生を話し終わった黒沢は

帰れて、もしまた抗山で働くようになったら、この恩返しをしたいと思っ 「織田さんとはふしぎな縁でえらいお世話になりましたな。無事に日本に

ているんです」

と、つけ加えた。

「キクヱさんとはどんな関係ですか」

と、織田がたずねると。

ら聞きましたが、女一人での暮らしですからそれから随分苦労をしたらし ちで暮らすようになったとか。男にはだまされてすぐに別れたとか家内か も芳江とは同じ熊本在の生まれで学校も同じなんです。何でも結婚約束を 「キクヱさんですか、わたしはここへ来てからの知り合いなんですよ。最 したり男を追っかけて無断で家を飛び出しハルピンに来て、そのままこっ

『西苑』

っぱり合ったり、石けりをしたりして、それでもみんな元気そうに遊んで

大概、蒼い顔をし、ボロボロの学童服を身につけていたが、破れ布を引

ら遊んでいるのが見えた。

になりっぱなしです」

友達のように気が合うんですな。今度はあのキクヱさんにもすっかり世話

前の広場の方では、子供達が黄塵の吹きまくる中で、ガヤガヤ騒ぎなが

いまどき珍しい気性の女ですな。

N

んです。自分では何にも話しませんがただふしぎにうらおもてのない、

わたしにはよくそれが分かるので、

古い

私小説·橘経雄 いた。

どの親たちも疲れ、目前のことに追われ通しで、どこでも子供のことな

どは構っていられなかった。

あの新しい墓所といい、これからの子供達といい、どう考えても戦争責

と織田は無心に遊んでいる姿を見ながらそんなことを思っていた。

任のありそうもない小さなものたちが、黙って親たちの償いをしているの

113

「おやじ連中は勝手に戦争を起こしたり、毎日騙し合ったり、喧嘩したり、

祿なことをしないのに」

と、黒沢も何かしみじみとした感じの調子で言った。

二人は広場の片隅に立って、しばらく子供たちの遊んでいるのをじっと

-

見守っていた。

間近に出発するということが発表されたので集結所内は、にわかに活気づ 年内にLSTによる第一回引き揚げの出発が確定され、続いて第二回も

いた。

度はいよいよ本物だと歓声をあげて手廻りの物を整理しはじめた。 単身者、独身者が第一回に引き揚げ完了と当局より指定されたので、今

杉本班長も自分の部屋で荷物をぽつぽつ整理しはじめていたが、ふと、

「かいつい、、、その手をやめ、

「あいつも、もう暴れることも出来ず、いい気味だわい」と、思わずにや

のだった。

杉本班長はあれ以来、五号室の者に黒沢の行動をずうっと探らせていた

な有様とのことであった。しかし、ご当人は相変らずの調子でますます意 して金に換えたが、一方、細君の病状はますます悪く、よそめにも気の毒 黒沢はよほど、どんづまりにきたものと見え、この寒空に外套まで手離

「ははあ、黒沢の奴、大分困っているな。意気昇然もやせがまんさ。それ 気昇然の態度であった。 そういった報告を聞いた杉本班長は

に花札ももう出来ないし、自業自得というものさ」 杉本班長は早速、そのことを白井班長に報告した。白井班長も上機嫌だ

と笑いながら、 真新しい皮のジャンパーの上に毛皮のオーバーを引っか

「おれにたてつく奴は、

あの通りさ」

った。

115 けて外へ出かけて行った。

ていたので、もう少しねちねちと彼に復讐をしてやらないと気が済まなか 黒沢に二度ばかり、まちがった振りをして殴られたり、怒鳴られたりし

まさに昇然と胸をはって行くのが癪に障った。 った。それにあの事件以来、廊下で会っても黒沢は挨拶一つするでなし、

留置所から出てきた時も、

トキあ」

長会議で組長達に話したこととは丸で反対の黒沢の態度であった。 と一言憎々しげに言って、にらみつけられただけであり、 杉本班長が組

侮辱のように感じられ、杉本は癪に障っていた。織田の奴も、結局は黒沢 又、妙に組長の織田が黒沢をかばうのも、自分に対する一種の面あて、

とにかく黒沢の奴はもっと、こっぴどく、やっつけてやらなければ腹の

の腕力に媚びているのだと、織田に対してにがにがしく思っていた。

虫が収まらん。それにまたキクヱという女も癪に障る奴だ」

しく思い出し、恥辱感で赤くなった。思い出す度に心が震えるほどいまい 杉本は一度、 酔ったまぎれにキクエに言い寄って頬を打たれたことを新 私小説・橘経雄

ましい思いだった。

杉本がそんなことを思っている時

「白乾酒が一本、とうとう百円になりましたよ」 と、岡がパイカルの罐を二本下げて、杉本の部屋に入って来た。

十九

発予定の第二回は予定が狂い、三週間延期で年を越してからになった。 第一回の独身者組の一隊が、潮の引くように出発してから、引き続き出

どこでも当が狂い、気持ちもいらいらと落ち着かなかった。 第一回に引き続き第二回がすぐ出るというので、そのつもりでいたので、

「まあ、いいさ。とにかくあと三週間だから何とでもなるよ」 織田も、もう売り払う余分の品物は手許になくなってしまった。

117 心は重く、妙に何か腹が立ってくる気持ちであった。 と、これまで持ちこたえてきた直子を抱き上げ自ら元気をつけてみたが、

118 うになった。 一時、途絶えていたかに見えた盗難事件の噂がまたあちこちに起こるよ

とてもこの頃、急に金費いが荒く、変よ」 「他の班から遠征してくる者もあるんですよ。……それにあの武ちゃんね、

食いをしている実例を織田に話し、織田にたしなめられたことに不平顔で 快な表情をしてたしなめたが、美代子は、武男が場内の露店で盛んに買い 郁子と美代子が部屋で話をしているのを織田は聞きとがめ、露骨に不愉

抗議した。

郁子も

子に何か買ってやるらしいのよ。この間も直子の胸元に飴みたいなもの 「美代子さんのいうこと本当よ。武ちゃんにお守りを頼むと、この頃は直

こんなこと今までなかったのに。キクヱさんでも買ってやったことがある て外に出ると、露店の前で、『ウマ、ウマ』とねだって動かなくなるのよ。 がべっとりついていて、おかしいなあと思っているところよ。直子をつれ

のか一度聞いてみようと思っているところなのよ」

端に上ったが、郁子は思い返して

「そりゃそうだ」

ゃんが金費いが荒いと言って、すぐ疑ってかかるのはよせよ」 直子に今、へんなものを食べさせたら大へんだが、しかし、第一回で引

者で余分のお金を置いて行くような篤信家なんてあるもんですか」 き揚げた連中が余分の金を子供達に置いて行った者が多いんだから、 ·疑っているんじゃなく、事実を知らせているんじゃないの。それに独身

の世話で駆け廻る暇なんかありゃしないのに……ふと、そんな言葉が口の ヱに対していつもかばうような態度がへんに心にひっかかっていた。他人 郁子も不機嫌そうに言い返した。郁子にとっても織田が黒沢一家やキク

せたりしちゃ大へんだから気をつけましょうよ」 「とにかく、武ちゃんがへんな可愛がりかたをして、かげで直子に食べさ

の方へ、ぶらぶらと出かけて行った。 織田は面倒くさくなったので、話を打ち切り、直子を抱いて場内の露店

第一班の階段の途中で、織田と警務班長の岡が話し合っていた。

その時、中央の入口を入ってきたばかりの黒沢は、

「クロサワ――」

という名がチラリと耳にひびいたので思わず足を止めた。

子であった。 途中からで意味はよくのみこめないが、珍しく織田の興奮したような調

飛ばっちりを食いますぜ……まだ、事件はあれだけで済んだと思ったらま 「織田さん、しかし、あなたも余りあんな者の肩を持ちすぎると、とんだ

「君は一体、僕に何を言おうとしているんだ。とにかく僕は黒沢さんの方

「立派な男……?」あの留置所にぶちこまれた男がですか、この集結所で

を人間として立派な男だと信じていますな」

ちがいですよ」

留置所のご厄介になったのはあの男だけですよ」

私小説·橘経雄

を破壊するので、中国側にも知らせたんです……。

あなたが黒沢を立派

のことをでっちあげて、本部にゆすりに来たり、色々集結所内の安寧秩序

そんなことをする権利があるのか?」 に入れこんだり……僕はそんなやり方が卑劣で嫌なんだ。一体、君たちに 「権利はないかも知れませんね。当局からの指示を受けて逮捕したのさ」

暴露し合ったり、

密告したり、あげくには

君たちは恥ずかしいとは思わないのか。

日本人同士で解決できることを いかにも罪人みたいにあんな所

「丸く治まるのを勝手にぶちこわしたのは黒沢ですよ。あいつこそ、 たり、恐喝事件をでっち上げたり、君たちの料簡が分からん」 「うそだ。内部で丸く治まるものを、無実の密告をしたり、デマを飛ばし 無実

沢があなたの組員だから親切に知らせているんです。……気を付けてごら 今日だってあの武男という子供が、運動場の横で、 おやきや飴

かける真似をし)手当り次第やられたんでは、迷惑しますよ。わたしは黒 男だと信じているのは勝手ですがね。これを(と、岡は指先を曲げ鍵で引っ

を十位買ってましたぜ。一つ五十円也のをですぜ。知らぬは親ばかりと

121

んなさい。

いうところですが、案外、知っているかもしれませんよ。親の方ではね

リと唾をのみこんだ。 そして、階段の下のかげに寄り、聞き耳を立てていた黒沢は思わずゴク

杉本班長は盗んだ者がある子供だということも目星がついているんです 「杉本班長の部屋でも班の金を集めて置いたのを誰かに盗まれたんですよ。

たしには立派な男だと思われんですがね」 が、自分で弁償し、黙っているんですよ。杉本班長みたいな者の方が、わ

ったが、やがて織田はひとりで先に階段を下りていった。 やがて声が小さくなり、岡と織田とは何か鋭く言い合っているようであ

「やあ、織田さん」

けた。 今、丁度、戻ってきたばかりの様子で、黒沢は入口から姿を現し声をか

黒沢は芳江のための診療所からの帰りらしく、左手に薬瓶を下げていた。 後から階段を下りてきた岡は、黒沢の姿を見ると、ぎくりとした風で目

123

「少しはいいようですが」 「やあ、芳江さんはその後どうです?」

をそらし、すばやく反対の出口の方から去って行った。

「一本どうです」

織田が煙草をとりだすと、黒沢はすぐに手を伸ばしたが、手がかすかに

震え、思わず煙草の箱から抜きそこねて土間の上に落とした。

れて行った。 黒沢はとり落とした煙草を拾い上げ、火をつけると、織田に挨拶して別

「おい、武男はどうした?」

黒沢は部屋の戸を開けるなり、芳江に向かって怒鳴った。

「おや、いまそこで夕はんを食べていたのに」 芳江は寝床から身体を起こして言った。

救恤用として配給されるオカラのような「夕飯」が、武男の茶碗の中に

「なんだ、いつも食べ残したこともないのに、仕方のない奴だ」

半分ばかり残されてあった。

部屋の者は大概、食事を終えていた。

せた。そして自分は武男の食べ残した茶碗に、少し湯をかけ、一杯かきこ 黒沢は芳江の枕元に薬瓶を置き、ストーブの上に病院用のお粥の鍋をの

んだだけでやめにした。

芳江はふらふらする身体をどうやら支えながら、ゆっくりと寝床から立

ち上がった。

「どこへ行くんだ」

「便所へ」

いつもなら手をかして従いて行ってやるのだったが、

「ひとりで大丈夫か。ソレ練習してみろ_

と、言ったきりで、今日は黒沢は立ち上がろうともしなかった。そして、

そろりそろりと歩いていく芳江の後姿に視線を移し、

と声をかけた。

ぶら下がるようにして嬉しそうに従いてきた。 しばらく経って、部屋の戸が開き、芳江が帰ってきた。武男が母の手に

「ビー玉遊びばかりしていて……夕飯はどうしたのさ」

「おれ、くいたくないや」

武男が芳江にまつわりついてしゃべっていると、

「おい、武男、一寸来い」

『西苑』

手振りをとめ、しばらくじっとしていた。 へんに改ったような黒沢の静かな声に、武男は母に甘えかかろうとする

武男はなるべく母の枕元近くに坐って、それから黒沢の方にいざり寄っ

私小説・橘経雄

「おい、一寸来いと言ったろ」

「今日、お前は運動場の並木のそばで、太鼓焼を買って、みんなにも分け

125

てやったそうだが、誰にそんな金を貰ったんだ」

「おれ、買わねえよ」

買わなければ、誰からおやきを貰ったんだ」

「織田さんのおばちゃんから」

「よし、それじゃ、織田さんのおばさんに聞いてみる。ほんとうに今日買

「ううん。今日でないや。もうせん、織田さんのおばちゃんから貰ったんだ」 ってもらったんだな。いくつ貰ったんだ」

と、武男はかぶりを振り低い声で言い淀んだ。

「バカヤロウ。今日のことを聞いているんだ」

低くうなだれた武男は、いきなり右頬を打たれた。

「泣き声を立てたら承知しないぞ」

しばったが、たまりかねてすすり上げた。 父親の押しつぶしたような低いだみ声に、武男は必死になって歯を食い

「正直に言えば痛い目にあわなくて済むんだ。一体、今日誰からおやきを

「おれ、直子ちゃんをおんぶして、広場で遊んでいたら、よその小父ちゃ

買ってもらったんだ」

「うん、それから――」

「それから、黒沢武男、二年生と言ったら、よくお守りするね。これ上げよう、

とおやきを二つ買ってくれたんだ」

武男はしゃくり上げながら、途切れ途切れに説明した。

と、黒沢はたたみかけて聞いた。「どんな人だ。その買ってくれた人は。この班の人か」

「班長さんか」

武男は首を振った。

「ちがう」

『西苑』

「杉本班長ならお前も知っているしな……誰だろうな」

私小説·橘経雄

と、言いながら黒沢は考えこんだ。

「背の高い、ひげのある小父さんか……? なに、違うのか。 そんならお前 黒沢の脳裏にふと岡の姿がチラリと浮かび上った。

買ってくれた人のことをよーく思い出してみろ」

127

まだ半信半疑の様子ではあったが、黒沢の声も顔も少し柔らかくなって

いた。

武男はいつか、しゃくり上げるのをやめ、

「お父ちゃんの友達の人だ」

と、つけ加えた。

「分からねえな……おい、今言ったことはみんな本当のことだな」

と、黒沢は腕を組んだ。

武男はうなずいた。

「父ちゃんはな、お前が正直に、ありのままに言ってくれればいいんだ。

分かったな」

武男はまた、うなずいた。

しばらくあたりを見廻していた黒沢は、

ぐずしるんだ」 「どれ、そのお前の上着のポケットを開けて見せろ。……おい、何をぐず

武男は怖ず怖ずと黒沢に近寄った。

私小説·橘経雄

『西苑』

ただけだった。 ポケットからは蓼秋 (煙草の名) の空箱や、ビー玉が五つ六つ転がり出

のせた。 黒沢は上着を武男に返し、立ち上がってストーブの上に豆の入った鍋を

「今日はお前にも豆を煮て食べさせようと思って外から買ってきたんだ。 ……これからは決して知らない人に物をねだったり、買ってくれなんて言

貰うのはいいが、広場で名前も分からねえ者に買って貰うんじゃないぞ」

黒沢の声はいつもの調子に返っていた。

「父ちゃん。豆の煮えるまで、隣の陽ちゃんと遊んでていい?」 武男は黒沢がうなずくと、すぐに隣の部屋に遊びに飛び出して行った。

「今日、実はな、帰ってくると階段の所で岡の奴が、 心配そうに成り行きをうかがっていた芳江は、ほっと溜息をついた。 あの警務班長の奴が

よ、織田さんにからんでいやがるのさ。みんなこの俺に関係したことなん

129

だ。おれはその話を蔭で聞いていて織田さんの気持ちが涙が出るほど嬉

骨のくさった奴なんか、ひねりつぶすのはわけはねえんだ。ただここでは 「おれはな、岡でも、白井でも、杉本でも、それに本部の役員連中の土性 黒沢は芳江に、手短に階段の所で立ち聞きしたことを話した。

みんなに迷惑をかけると思うから我慢しているんだ」

「あたしも早く快くならなければ……」芳江は床の上に起き直り

と、低くつぶやいた。

さんなんかも、もう少しだ。早く快くなってみんなで一緒に無事に日本へ 「そうさ。早く快くなってみんなに迷惑をかけないようにするんだ。織田

帰って行こうと待っているんだ」

芳江は素直にうなずくと、櫛をとり出し乱れ毛をかき上げた。

いやに今夜は冷えやがるな」

煮豆を先に食べ終わった黒沢は窓ぎわに立ってぼんやりと外を眺めてい

道路をへだてた向かいの警備詰所で、夜警の青年達が拾い集めた古材木

冷たさは、バケツを持つ手がそのままバリバリと凍りついてしまうほどで、 の蓋をとる度にパッパッと窓ガラスが赤く染め出された。この頃の朝夕の を割ってストーブに投げ込んでいるのが窓に映ってよく見えた。ストーブ

十二月に入った大陸の気温は夜に入るとぐっと下がり骨身に応えた。

てきた。今日も遠くで一しきり、パーン、パーンと続けざまに銃声が鳴り、 み、何や彼やと話し合っているらしく、時折、甲高い女の声などがひびい 各部屋でも思い思いの工夫で獲得した燃料で焚いているストーブを囲

私小説・橘経雄

『西苑』

131 「はーい、ご苦労さーん」 「火の用心をおねがいしまあーす」

また、

あたりはもとの静けさに帰った。

である。武男とキクヱのために煮豆を残して置き、黒沢は破れ毛布を引っ 各部屋から返事する声が伝わってきた。最初の火の番が廻りはじめたの

たものを片付けはじめた。そして脱ぎすててある武男の黒いズボンをとり 芳江は自分の寝床を片方に引き寄せ、枕元に散らかっているこまごまし

かぶり、ごろりと横になった。

上げ、何気なくズボンのポケットに手を入れた。

「仕方がないねえ、こんなにきたないものばっかり入れて……」

しゃ丸まったものなどをとり出した。まだポケットの奥の方に小さい紙の と、芳江はポケットの中から新聞の切れはしや、雑誌の表紙のくしゃく

ような手触りのものがあるのでそれも取り出した。

意識し、 何の気もなく取り出して芳江はハッとした。さっと、顔色が変わるのを 芳江は黒沢の方を鋭く盗み見しながら、そっとそれを手の中にい

そいで丸めこんだ。が、おそかった。

黒沢はすばやく、それに目をとめ

「おい、いまのは何だ、一寸見せてみろ」

「母ちゃん、もう豆ができたろう、腹がへっちゃった」

と、毛布をはねのけて手を伸ばした。

瞬間、芳江はうすく顔から血がひいて行くのを意識しながら、機械的に

それを黒沢に手渡した。

その札の皺を伸ばしながら、黒沢は 小さく、かたく折りこんだ千円札が二枚、五百札が二枚入っていた。

と、うなるような声でつぶやいた。

|武男の奴――|

そこへ武男が 芳江は黒沢の鋭い視線を全身に痛いほど感じ身動きもできずにじっとし

ていた。

「座れっ」 と、勢いこんで入ってきた。 黒沢は叱鳴った。

武男が不審そうに座り終わると、黒沢は黙ってさっきポケットから見つ

「これはどうしたんだ?」 け出した札を武男の前に並べた。

武男はそれを見ると、がっくりとうなだれた。

「よくも、おれを騙したな」 武男は小さい顔を上げ、何か言いわけをしようとしたが、父親の見幕に

気圧されてそのまま頭をたれた。

「杉本班長のところから盗ったのか?」 一気に突っ込むように黒沢は低く、鋭く聞いた。

武男はかすかにうなずいた。

立てッ

と、黒沢はにらみつけた。

「武男、早く手をついて謝んな」

黒沢に言われるままによろよろと立ち上った。

芳江はおろおろとしわがれた声で言ったが、武男はもはや観念したのか、

「おれの顔に泥をぬりやがって……もう駄目だ。いいか、貴様のような奴

武男はかすかにうなずいて土間に下りた。はおれの子供じゃない。すぐ出て行け」

「いいかと、芳

と、芳江のとりすがるような必死の声に、

ぞし 「いいからお前は黙っていろ、今夜のことは他の者にしゃべるんじゃない

の後について外へ出て行った。 小さい破れた運動靴をはき終わった武男は、そっと部屋の戸を開け黒沢

黒沢は芳江にそう言い残すと土間に下りた。

*

黒沢は黙ったまま先に立って歩いて行った。

部屋部屋の灯りもここまではとどかず、あたりは塗りつぶしたような暗闇 本部 の建物の裏手を廻り、 壊れかけた古い車庫の前の広場に出ると、各

だった。

人影はなく、槐の大木がザワザワと風に鳴る音のみである。

黒沢は立ち止まって前方を指さした。

「ここからまっすぐにどこまでも歩いて行くんだ」

前方の百米先には古い鉄条網の柵があった。その柵の外――

-それは子供

「父ちゃん……もう、しません」 にとっても、いや、大人にとっても死の世界に等しかった。

武男は寒気にぶるぶる震え、泣き声で言った。

「もう、いまからではおそいんだ。ここからひとりで歩いて行くんだ。い

いと言うまでお前は帰ってくるな」 あきらめたのか、武男はうなずくと、一寸の間、黒沢を見上げそのまま

黒沢の指さした方に向かって歩いて行った。

といつまでも見つめていた。 小さいその姿が一歩一歩つめたい闇の中に吸われて行くのを黒沢はじっ

遠くの方で、また一しきり銃声がしていた。

二十

急に五号室の戸がバタンと開けられ、サッと冷気が部屋に流れこんだ。 有賀キクヱが帰ってきた。

「おお、つめたい」

と、キクヱは手をこすりながらストーブににじり寄った。

ストーブの周りにはまだ四人ばかり部屋の者が集まっていたが、誰も妙

「どうしたのさ、小母さん達、いやに元気がないね」

に黙りこくっていた。

さした。 キクヱは隣の小母さんに話しかけると、小母さんは黙って芳江の方を指

芳江はうつぶせになったまま、泣いているのか肩先がぶるぶる震えてい

137 「おやっ、芳江さん、どうしたの? 急に具合でも悪くなったんじゃない?」

顔を上げた芳江は胸をおさえながら、とぎれとぎれにキクヱに一部始終、

わけを話した。

キクヱは聞き終わると、

「なにい――」

と、男のように怒った声を出して、すっくりと立ち上った。

「あんな小さい、可愛い武ちゃんを……よしッ、あたしが連れてくる」

キクヱの大きな声に、さっきからよく事情が分からず様子をうかがって

いた部屋の者たちが、

「一体どうしたんですか」

と、芳江の枕元に集ってきた。

その時、しずかに戸が開けられ、黒沢が帰ってきた。

その姿を見ると、キクエは

「黒沢さんッ」

と鋭く呼びかけた。

「武ちゃんを一体どこへ連れて行ったの」

きはじめた。

あいつらのことだ。裏で何をたくらんでいるかも知れやしない。よしんば、

そんなことがあったって子供だもの、よーく話をしてやれば分かるんだ」 黒沢は壁によりかかって芳江をにらみ、キクヱの言葉には何の返事もし

なかった。

「黒沢さん、どこへ武ちゃんを連れて行ったの? 悪ければあたしが謝る。

「うるさいな、おれは自分の気がすむようにやっただけなんだ。責任はお 何とでもするから、今度はかんにんして頂戴」

『西苑』

れが持つ」

私小説・橘経雄 まう積りかい。……芳江さん、もうこんな人にゃ頼まないから、ストーブ 「あんたはこの凍りついているような外へ武ちゃんを放り出し、殺してし

で武ちゃんに盗みをさせるように誰かが仕組んだかも分からないじゃない

をどんどん焚いといてくれ、あたしが見つけてすぐ帰ってくるから……蔭

か。それもつきとめずに、バカな、どこに武ちゃんを犬死にさせる必要が

あるんだ」

キクヱはすばやくジャンパーの上に外套を引っかけると土間に立った。

そして黒沢を鋭く見つめるとキッとなって叫んだ。

だ。あんた流のも分かるし、他のことはいいさ。……が、あたしの言いた 「あたしは他のけちくさい連中と違ってもっと立派な男だと思っていたん いことは、黒沢さん。あんたはなぜ独り先に帰ってきたんだ。あたしなら

んだ、親なんだ。それが何さ。のめのめひとりでよくも帰ってこられたも 一夜一晩、一緒に武ちゃんを抱いて泣いてやるよ。それがほんとうの男な

キクヱの言葉がつきさすようにひびいた。

んだ」

ち上がると出かけようとするキクヱの肩をおさえた。 その時まで黙って壁によりかかっていた黒沢の瞳が異様に光り、急に立

「おれが行く」

黒沢はしずかな声でそういうと、帽子をわしづかみにして土間に下りた。 キクヱは戸口まで追いかけ、黒沢の後姿に

「今度だけは許してやってね、叱らないで連れて帰ってきてよ」

と、いままでの伝法肌の啖呵の調子とは違い、優しく頼んだ。

|有難う|

部屋に戻ると、芳江はキクヱに向かって感謝の瞳を伏せた。

二十四四

冷めたい窓ガラスに顔を寄せて、キクヱは黒沢の帰ってくる姿を待ちう

けたが、前方の槐の森が魔物のように風にゆれているのが目に映るだけで、

キクヱは窓から身をはなし、ふり向いて芳江に聞いた。黒沢も武男の姿もなかなか現れなかった。

私小説·橘経雄

『西苑』

「芳江さん、武ちゃんが出てからどのくらい経ったの?」

1 「もう三十分位になるだろうねえ」

それを聞くと、キクヱの顔色がサッと変った。

141 「駄目じゃないの、早く、それを話してくれなくちゃ、……やっぱりあた

しも行ってくる」

キクヱは思わず叱りつけるように芳江に向かって言うと、すぐに外出の

その時、二階の階段をドヤドヤと下りてくる多勢の足音が聞え、その一

用意をした。

「起きていますか」

つが五号室の前で止まった。

元気のいい織田の声だ。

キクヱは中から部屋の戸を開けて迎えた。

がいよいよ一週間目に出ることが確定しました」

「いまね、組長会議が終わったところなんですがね、第二回の引き揚げ船

てきた。 それを聞くと、寝ていた部屋の者も全部起き出し、織田のまわりに集っ

速、知らせにきたわけです。準備その他はすぐ分かり次第知らせます」 「もうおそいので明日にしようと思ったんですが、いいニュースなので早

織田はそう言って帰りかけようとした時、キクヱは走り寄って、

私小説・橘経雄『西苑』

と、手短かに武男のことを報告した。

「織田さん、実は……」

腕組をして聞いていた織田の顔に不安の影が漂った。

「ええ」

「まだどっちも帰ってこないんですか?」

と、キクヱは泣きそうになって返事をした。 織田は持っていたノートをそこへ置くと、部屋の者から防寒帽を借り受

け、キクヱと一緒に五号室を飛び出した。 土橋を渡り、槐の森を突っきって二人は広場に走った。

風の鳴る音ばかりで人影は見えず、何の足音も聞えなかった。

広場の中央に立って、しばらく耳を済してあたりの気配をうかがったが、

「キクヱさん、あんたは東の方からずーっと廻って行って」

走り走り武男の名を呼ぶ織田の声がだんだん小さくなって行った。

織田はそういうと広場の西の方に向かって走って行った。

織田はがらんとした崩れかけた古い車庫の建物の中にも入りこみ、武男

143

の名を呼んだがどこからも手応えはなかった。 西の突端に立っているもとの立哨所の中ものぞいてみた。ここにも武男

ルクル風に吹かれて飛び散っているのが、闇の中にかすかに白く見えるだ の姿はなかった。ただ、埃くさい、しめった空気が鼻をつき、紙くずがク

けだった。

東の方から足音がし、

「やっぱりどこにも見えない――」

と、キクヱが走ってきた。

急に不安になった。

武ちゃんも見えないし、どうしたんでしょう」

「たしかに広場の方に出かけたと芳江さんは言ってましたが、黒沢さんも

キクヱは迫った口調で言った。

「武ちゃあーん」

はなかった。

二人はもう一度、大きな声で名前を呼んだが、やはりどこからも手応え

私小説·橘経雄

待ちうけたが、何の気配もなかった。柵外にある水門の近辺の川の流れ 黒沢が武男をおんぶして帰ってくる足音を祈るような気持ちでしばらく

音だけが、妙に不安をそそり立てるかのように大きく響いてきた。 五号室からも織田達の帰りを待ちかねて、応援の者が懐中電燈の光を丸

たら柵外だな」 「よし、もう一度この土堤の近辺をずーっと探してみよう、もし居なかっ く照しながら駆けつけてきた。

った。 かれになり境界線の土堤の枯草を引つかむようにして武男の姿を探して行 織田は新たに駆けつけた三人の五号室の者と打ち合わせると、分かれ分

てしまっていた。 空はいつかすっかり曇って、いままでかすかに見えていた星の光も消え

った。 織田は古い鉄条網に手を傷つけながら、土堤の廻りをずーっと進んで行

145 「おーい」

描いた。 その時、 西の突端近くの土堤で、懐中電燈の光が上下に大きく揺れ輪を

約束の見つかった合図だ。

皆は夢中になって、その方に走り寄った。

武男は西の土堤の突端から五、六米離れた枯草の窪みの中に倒れていた

のだった。

二十五

武男は手も、足も、顔も氷のように冷えきっていた。が、息はまだかす

キクヱは着ていた外套を脱いで、すっぽりと武男の身体をつつみ抱いて

時計は一時を過ぎていた。

帰った。

かにあった。

部屋の者もみんな起きていて待っていた。

「武ちゃんはいい子よ、いい子よ」

とくり返した。

パイカルの空壜の湯たんぽが四つも入れられ、部屋のストーブにはとっ

ておきの燃料が投げこまれた。 やがて-

られた。 かに見開いた。温かいお茶がのまされ、又、しずかに毛布につつんで寝せ ――武男は土気色の顔色からようやく生色を取り戻し、目をかす

だんだん顔色も恢復し、武男の意識もはっきりしてきたようであった。 しばらく経つと武男はキクヱの顔をふしぎそうに見つめ、

と、うわごとのように言うとまた目を閉じた。「父ちゃんは? 父ちゃん帰ってもいいと言った?」

私小説·橘経雄

『西苑』

と、うわごとのように言うとまた目を閉じた。

「もういいんだよ、いいんだよ」

147 首をそっと握ってやった。 織田は子供心のひとすじさをいじらしく思い、武男のまっ黒い小さい手

武男が意識を恢復すると、織田も皆も急に疲労を感じた。が、それは快

い疲れでもあった。

「もう大丈夫だ、よかったな」

織田はそう言って、芳江に向かい

芳江はうれしさに言葉もなく、頭を下げてうつむいていた。

「黒沢さんもすぐ帰ってくるでしょうから、僕はこれで失礼しますよ」

「黒沢さんなんて、もう帰ってこなくてもいいわねえ、芳江さん。……黒

沢さんたら、どこまで探しに行ったやら」

キクヱのおどけた調子に、みんなは思わず安心した気持ちでどっと笑っ

黒沢のことは誰も心配しなかった。

のことや武雄のことを簡単に話し、そのままぐっすりと寝入ってしまった。 自分の部屋に帰った織田は心配して待っていた郁子に第二回引き揚げ船

然し、翌朝になっても黒沢はまだ五号室へ帰ってこなかつた。

それから二日目の朝早く、杉本班長が織田の部屋にやってきた。

織田の顔を見ると、いきなりぶつけるように

「まだあのならず者は帰ってこないそうですな、全くあきれた奴ですね、

本部でも打ちすてておくわけにも行かず……この帰国準備で転手古舞をし

ている時なのに全く大迷惑ですなあ」

杉本班長は腹立たしそうに額に八の字を寄せ、持ってきた部厚い名簿の

『西苑』

頁をめくった。

「織田さん、わしも今度の船で引き揚げること決めましたよ」 「杉本さんは最後までここに居残って日本人の世話をし、後仕末をしてか

私小説·橘経雄 ら引き揚げるんだと言ってたんじゃないですか」

織田は少し皮肉気に聞き返した。

てみりゃ、私なんぞ、何も最後まで居残る義理合いもなし……それはそう 「いや、こんな事件が起こったりして実際やりきれませんよ。それに考え

149

と織田さんも勿論、 黒沢さんのことはどうします?」 今度ので帰りますね?」

うに処理して貰いましょう。第一、妻君が病気じゃ今度の船では帰れませ 「そのうち消息もはっきりするでしょうし、うっちゃって後の者にいいよ んし、自分で適度な時に帰るでしょうよ」

く提出して下さい。あなたの組では黒沢の家族は居残りでしょうが、あの 一織田さん、それじゃ今度の引き揚げ者の名簿提出は明日メ切ですから早 杉本班長は無雑作に言って、織田たちの部屋を一わたり見廻し、

なければ後廻しにしますから。……じゃ又、どうもお互いに目が廻るよう 有賀キクヱがまだはっきり報告に来ないんで困っているんです。報告に来 に忙しいですな」

織田にとっても忙しい明け暮れであった。 名簿の作成、運送関係の下調査

杉本は鞄をかかえ急いで帰って行った。実際この頃は杉本の言葉通

注意など、後から後からと用事が出来、場内は朝から夜まで腕章をつけた 連絡と報告、事故者の有無の調査、刻々に変る服装や荷物制限についての 私小説・橘経雄

心を重ねていた。そしてみんなは一日も早くと出発を待ちわびるのであっ 有無相通じ、乏しい中から防寒の用意や、携帯食料の準備のために毎日苦 り抜け、つつがなく日本へ辿りつくことができるかと、知り合いの者達と 郁子も小さい病後の直子をかかえているので、どうしたら長い道中を切

係員たちが大きい声を立ててあちこちと飛び廻っていた。

暮れ方、武男をつれてキクヱが織田の部屋にやってきた。と、そのあと

を追うようにして杉本班長が部屋に入ってきた。

「あっ、やっとあんたをつかまえたよ。今朝から何度五号室に行っても居 けてきたんだ」 ないんだからかなわんよ。織田組長さんの所へ行ったと聞いたので追っか

最初に終結したんだから第二回ので引き揚げできる優先権があるんだから はは……。 逆に言えばその通りさ。さてあんたも今度ので帰国ですね

「あたしが居ないときばかり班長さんが来るからですよ」

ね。早く名簿を作成しないと間に合わないんだよ」

151

との杉本班長の言葉に、有賀キクヱは

「あたし、この次の引き揚げにして貰います。あとまわしで結構です」

と、きっぱり言った。

杉本班長は瞬間、キクヱの顔を黙って見つめていたが

「ああ、そうですか、それならば――」

と、引き揚げ者名簿を開き、有賀キクヱと記入してある部分を赤鉛筆で

ぐいと赤線を引いた。

「あとで割り込みや変更願いは絶対に出来ませんから左様承知して下さい。

実は第二回以降は今のところいつ引き揚げになるやら予定は分からんらし

いですよ」

と、杉本班長は人の不幸をいかにも楽しんでいるような表情でつけ加え

「あたしは黒沢さんのこともあるし、芳江さんを見捨てては帰れませんか

「いや、あんたがそうして居残ってくれると尚更、安心して自分たちは帰

杉本班長は立ち去ろうとしてふと傍の武男の姿を認め、

の親父を持って可哀想だが、しかし親子揃ってよく迷惑をかけたもんだな 「これが例の武ちゃんという、しぶとい子供かね。この子もあんな無法者

と冷やかすように言った。

あ、よくできてるよ」

「杉本さん――」

私小説·橘経雄 『西苑』 「そんなにこの子をいじめないで頂戴……黙って帰ったらどうなの、この 子はあんたに何の関係もないんだから……」 キクヱは杉本班長の顔をまっすぐに見つめ声だけはしずかに呼びとめ

「いや、関係ないどころか大ありだから言ってるんだよ、はっきり言うと

だね、今度の黒沢のやったことも、わしの部屋からこの子供に金を盗ませ

したのさ。いかにも自分は乱暴者だが、曲がったことは嫌いな男でござい といて、それが皆に分かりかけたので照れかくしにこの子を手ひどく折檻

153

……とね。元をただせばそんな芝居さ」

行った。 うとした時、既にキクヱの烈しい声が発止とばかり杉本班長にぶつかって 黒沢が居ないと知っての余りの毒舌に織田は思わず怒って身を乗りだそ

かるのさ_ 者呼ばわり。どっちの気持ちがきれいだか、見る人が見りゃ、ちゃんと分 「黙って聞いてりゃ何さ。まるでこの親子のことを泥棒呼ばわり、ならず

「ほおら、盗んだ方が気持ちがきれいだという理屈だね」

帰りかけた杉本はわざとキクヱの正面に向き直ったが、あわただしく、

その視線をそらした。

れも自分の手下を使ってさ。部屋に連れて行っては金をわざと放りっぱな 「腹がへった子供にわざと大きなおやきを買ってやって味を覚えさせ、そ しにして置いて盗ませ、黒沢さんにぬれ衣をきせようと蔭でさんざんデマ

杉本班長はキクヱの烈しい啖呵に身動きもならず、じっと立ちつくした。

を飛ばしたのさ。何という卑怯者ッ」

「は……、女だと思って言わせておけばいい気になって……もう、お前た 度こそ日本は亡んでしまうだろうよ。あんたこそあまり迷惑をかけない方 どうなの。最も火事場泥棒のような根性の者が集まって政治をしたら、今 「ふん、早く帰ってあんたの宣伝通り、代議士さまとやらに立候補したら

ちのことなんかあとはどうなろうと勝手にしろだ」

「大きな声を立ててすみませんでした」 て行った。 杉本班長は満面朱をそそいだようになってキクヱを叱鳴りつけ部屋を出

の手を引いてそのまま一号室を出て行った。

キクヱは部屋の者たちに頭を下げると用事のことも織田に話さず、武男

二十七

その日の暮れ方、織田は夕飯を済ますと、郁子の前にどっかりと座った。

郁子は一寸おどろいた表情で

「なに?」

と目を挙げた。

「郁子、僕は居残ることにした。郁子も一緒に残ってはくれまいか?」

帰国の日を一日千秋の思いで今まで待ちつけていた郁子は織田にそう言

われても、即座に返事はできなかった。

「黒沢さんに対して、そんなに義理を立てなければいけませんの」

「義理とか人情とか、そんな気持ちに引きずられて残るんじゃないんだ。

ただどうしても黒沢の家族を見捨てて帰る気がしないんだ。どんなに苦し

国会子のこれない。

くても僕はやはり僕なりの道を守って行きたいんだ」 しばらく考えに沈んでいた郁子は、やがて顔を上げ思い切ったような口

もりでしたの」 「あなたはもしやキクヱさんが今度残らなかったとしたら、どうなさるつ

調で

て行きたいんだ」

「あたしもよく考えてみますけど」

157

「意味って……ただそれをお聞きしたい <u>、</u>の

「それはどういう意味なんだ」

「キクヱさんが残ろうが残るまいが、僕は勿論残るよ」

「ほんとう?」

「ほんとうだ」

と織田はきっぱり言い切った。

たくないんだ。それが守れずに日本に帰っても僕はこれから駄目な人間に 「……一度、信頼し合った男の約束、仁義というのかな、僕はそれを破

なってしまう気がするんだ。やせ我慢でもいい。僕は意地でもそれを守っ

せっせと荷物の整理や、名前や番号を上衣の胸に嬉しそうに縫いつけてい

郁子は直子を抱いて、しばらくはぼんやりした気持ちで、帰国のために

織田が黒沢のために残留するというのを聞いて部屋の者は挙って反対し

る部屋の者の忙しそうな姿を見つめていた。

158 た。

うじゃありませんか。黒沢さんなんぞ誰かに任せて打っちゃっときなさい ·冗談じゃありませんよ、織田さん。次はいつ船が出るか分からないとい

と、吉田さん夫婦も、脇本さんも、北村さんも口を揃えた。

「直子ちゃん早く日本へ帰りましょう」

子の囲りに集ってきた。 と、部屋の美代子や春代姉妹も、小さな脇本さんの鶴代までも驚いて郁

笑わせていた独身組の木村、佐々木がLSTで帰国し、第二回の引き揚げ 既に一号室も「木村情報」などと言って面白いニュースを拾ってきては

出発は明後日に迫っているのである。

で部屋中揃って帰国できるのを待っていたのであった。

見に出かけて行った。 その夜、 決心がつきかねるままに郁子は織田には黙って五号室に様子を

<u>-</u>

てくると、遠くから織田の姿を認めて、キクヱが走ってきた。しばらく並 んで歩いてきたが、途中でキクヱは織田を見つめ、 翌日、本部での組長会議を終え、暮れ方近く織田が購買部の横の門を出

時にはあたしは……」 辛くても、最後まで助け合って生き抜いて帰りましょう。……と言われた かなと思っていたんですが、帰りがけに芳江さんの手を握って、どんなに 「昨日、奥さんが芳江さんをお見舞いにきてくれました。お別れに来たの

てしまった。 そこまで言うと、キクヱはそれっきり、うつむいて顔にハンカチをあて

* *

を水門の流れの方まで探しに出、ついに足をすべらして深みに落ち込んで それから五日の後、水門の流れのそばで黒沢の死体が発見された。 武男の姿を求めて柵外に出た黒沢は、恐らく憑かれた者のように闇

の中

黒沢の亡きがらは織田やキクヱに守られて終結所の片隅の墓地に埋葬さ

しまったのであろうか。

れた。

* *

でし、 の水で直子のおしめの洗濯までするのであった。 で働きつづけた。そして暇を見つけては武男や芳江の食事、便所の世話 キクヱはその後、救恤者食堂の雑役にやとわれ、朝は五時から夜更けま 郁子の方まで応援した。そして日課のように手が切れるような小川

が分かった。 キクヱの手は傷だらけになり、 血が滲んで身体は日増しに痩せて行くの てしまった。

織田さんの方が心配ですよ」 織田もキクヱに合う度に、診療所へ行って診てもらうようにすすめたが

ヱの例の瞳の色だけは却って前よりもいっそう冴え冴えとして輝いている と、いたずらそうに笑って自分のことは取り合わなかった。ただ、キク

ように思われた。 な決意が暗黙のうちに感じられ、もはや何も言い出さなかった。 織田はキクヱの恐らく死を覚悟しているようなひたむき

引き揚げの予想もつかないことを見てとって、第二回の引き揚げ船で帰っ も、そんなことは全然見込みがないばかりか、 あとまで残って何かうまいことでもと始めは思っていたらしい杉本班長 国共衝突の緊迫化で今後の

*

やがて第三回の引き揚げ船も、三週間後、続いて出発して行った。

二十九

それから三ヶ月後、織田を隊長とする西苑最後の引き揚げ部隊が編成さ

道をひとりしずかに歩いて行った。前方の墓地のあたりに赤いネッカチー 廻りの品物をつめこみ、一先ず仕事の手筈も片付いた織田は土堤に沿うた フをした女が子供をつれて立っている姿が見えた。 明日は出発という西苑での最後の日。小さいリュック・サック一つに手

「明日出発になりましたよと、黒沢さんに別れの挨拶をしてきたところで

近づくとキクヱと武男であった。

二人はしばらく墓地の前に佇んでいた。

やがて、キクヱは織田の横顔を見つめ、

らも織田さんに会う機会があればいいなアと、思っていたところです」 「日本に帰ってどんな生活が待っているのか分かりませんが……帰ってか

瞬間、 とどまるようにその視線を外し、 ⁻これからも頑張って生き抜いて行こうよ」 織田はキクヱと顔を見合わせ、そのきらめくような瞳を感じると、

と言った。

思わずキクヱを力強く抱きしめてやりたい衝動に襲われたが、ふみ

その

と、キクヱの肩に手を置いた。

の編隊機が、一しきり爆音烈しく、夕暮近い北京の空に向かって通り過ぎ 遠くでかすかに爆音がし、やがて青天白日旗の標識をうけた中 キクヱは男の子のように大きくいた。

·国飛行隊

て行った。 後から武男の手を引いてキクエも登った。 織田は土堤の上に登って行った。

え、遠く西山、 武男はしばらく、 墓地の後には散在する農家の泥屋根が見え、槐の林がところどころに見 山脈が望まれた。 あたりを眺めていたが、ふと思い出したように、

「小父ちゃん……」

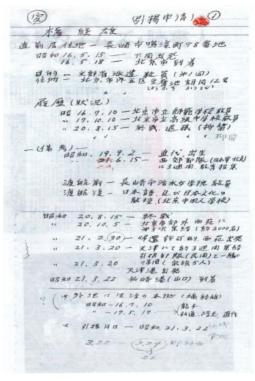
と、織田に呼びかけた。そして

「……父ちゃんは、とうとう、一緒に帰れなかったねえ」 と、かなしそうに小さい瞳を伏せるのであった。

茫々たる大陸の野をじっと見つめていた。

織田は武男の頭をしずかに撫でながら、キクヱと共に、柵の外に拡がる

(昭: 二三) 完



立花家の対談で使われたメモ

[人物紹介]

龍子 = 橘龍子

龍子=橘龍子(1915年、茨城県龍ヶ崎市生まれ。立花の母。

(本名・橘隆志。1940年、長崎市生まれ)

菊入=菊入直代(1944年、中国・北京生まれ。立花の妹) 弘道=橘弘道(1938年、長崎市生まれ。立花の兄) たりの流れをお聞きしたいということです。

いま戦争を語ることについて

立花

いま、戦争のことを知っている人が世の中からどんどん消えていく

お母さんには、長崎・活水学院の先生であるお父さんがある時北京に行っ いて聞き取りを始めています。その一環としてこの家族の対話もあります。 中で、少しでも戦争の記憶を世の中にとどめるために、お年寄りを訪ね歩

北京の生活があり、終戦後北京を引き揚げるというながれがある。そのあ ち家族がそのあとを追って北京にいくという流れがあります。そのあと、 てしまう背景、状況をお聞きしたい。まず、お父さんが北京に行って私た

弘道 龍子 立花の父・経雄と活水学院 それは、 引っ越したのは終戦から数年前でした。 昭和16年のことですか。

龍子 はい。昭和16年の12月が開戦です。

立花 の日記です。その現物がこれで、当時の事情がここに書いてあります。 昭和9年から16年まで活水の先生をしています。ここにあるのがその時 この資料は、お父さんの葬儀の時に参列者にお配りした資料です。

まで熱が出て翌日に下がったとか、それが知恵熱だと書いてあります。ぼ 1940年前後のものです。僕が生まれた時のことは抜けています。 39 度

くが一通りの流れを話しますから、その後でお母さんのお話をうかがい

いと思います。

聞き取れるかどうかということをお断りしておきます。戦時下のことなん 龍子 その前に、 私は難聴が進んでいるのでみなさんの言うことの半分が

て、果たしてどれだけ覚えているか(笑)。

ミッションスクールですから軍政が進んでいく過程でミッションスクール 立花 ぼくが大雑把に流れを話します。まず、なぜ活水をやめて北京に行 ったのかという疑問があります。その点について先日聞きました。活水は

彼女がまだまだやりたいがもう一年居られない状況になってきたという話 が圧迫を受ける時期がありました。当時の校長先生がアメリカ人でしたが、

を伺い知ることができる。を伺い知ることができる。を伺い知ることができる。

より女性のための学校としてエリザベス・ラッセル女史に活水学院。アメリカ人女性、(2) 活水女学院:長崎市にある

開校された。

〈戦争の記憶〉 立花家の

だったと思います。

経営的に非常に苦しい状況になりました。給料が全く上がらなくなりまし をして教職員がいろいろな話をする状況がありました。一つの状況として

た。給料が5年間全く上がりませんでした。 当時、国立大学出が月給80円でした。お父さんは早稲田だったので

ないか」というアドバイスをいただきました。経済問題が最も大きな要因 が上がらない状況のもとで、みなさんが心配して「考えた方がよいのでは 70円でした。家賃が10円代でした。当時、既に子どももいたので全然給料

立花 とで1匹90銭で売って儲かったという話もあったようです。 話がありました。また、内職を始める先生もいて、うさぎを飼って売るこ 当時は、先生だけでなく事務の方も苦しく給料をあげてくれという

2 戦時下のミッションスクール

169 龍子 経営手腕がある人が学校をまわしていればよかったのですが、残念ながら 当時は、 校長がアメリカ人で教頭にあたる副校長が日本人でした。

そういう手腕がない人が経営をしていたようです。

立花 当時の学校には「奉安殿」というものがあり、天皇皇后の「ご真

影」があるのですが、もともと活水にはなかった。戦局が進むと急きょそ れができて、みんなが天皇のご真影に最敬礼しなければいけない状況にな

龍子 ご神影を学校に迎えるのがたいへんな行事であったと覚えていま

っていった。

す。私は、授業に出ているわけではありませんでしたが、家族の一員とし

て黒い紋付の羽織を着、お召しの着物という縞のものを着るようにという

ことで、紋付をデパートに注文したのを覚えています。それを着て、当日

は何時間もお迎えの時を待ったという記憶があります。

立花 たのですか。 当日は、 校長か誰かがどこかに行って「ご真影」を受け取りに行っ

龍子 校長先生がしずしずと受け取ってこられました。

立花 と受け取ることを求められたのですね。内村鑑三がご神影にお辞儀をしな その校長先生がホワイト氏ですか。やはり当時は、それをしずしず

の日本には、天皇と皇后の写の日本には、天皇と皇后の写の日本には、天皇と皇后の写

龍子

そういう風潮はあったと思います。

部さんと話しをする話が日記に出ています。 すが阿部さんが活水に来たのですか。お父さんが阿部さんが活水に来て阿 う話が多少出てきますよね。よくわからない話は、阿部知二の話がありま 神影」にお辞儀なんてしたくなかったのでしょうね。日記の中でもそうい ことが起こったのでしょうね。だから、 で一高 の先生をクビになるじゃない? そうした流れの中で、こういう ホワイト先生も本来ならば、「ご

立花 する文章が出ました。 蒔 0 天声 人語には、 キリスト教のミッション (宣教団体) を攻撃

龍子

阿部さんの話はあまり覚えていません。

記 書かれています。天声人語そのものの内容が書かれていないので断片的 立花 その中で滑らの道とか、平沼内閣とか森有礼のことなどが断片的に 載しかないのですが、 ちょうど森有礼が殺されかかる時があったではな な

171

ですか?

その時も、

天声人語ではミッションスクール

ب

宗教に基づ

く教育を批判しています。ここに清水幾太郎のことが書かれていますが

2

内村鑑三不敬事件」: 189 礼をしなかっただけなのだが、 どによって非難され、 内村鑑三が天皇親筆の署名に 年(明治24年)1月9日、 それが不敬事件とされた。こ 社会問題化した。敬礼を行な ったことが同僚教師・生徒な 対して最敬礼をおこな れた教育勅語奉読式において、 の事件によって内村は体調 わなかったのではなく、 一高等中学校の講堂で挙行さ 2月に依願解嘱した。 それが わなか

7 6) 阿部知二(190 英文学者、翻訳家である 1939年1~8月の内閣。 973年):日本の小説家、 院議長の平沼 第1次近衛内閣の後、 棋一郎 3 の 枢

日新

聞

の委員ですから。

その時の天声人語を書いたのが清水幾太郎ではないかと思います。 当時、

141 66、音く窓へでよって言って言いていてい

おお、清水幾太郎は、天声人語を書いていたのですか。

日記に線を引いて「清水幾太郎のなんとか」と書いてありました。

立花

ここで日記に出てくる中島さんというのは教職員ですか。

龍子 事務職員でした。

立花 「中島さんと学校で話す。人間が人間を信じられなくなって……一

龍子 番悲惨」と書いてあり、線を引いて「現代の特質」と書いてありました。 校長先生と教頭先生は、戦争に対してあいまいな態度をとる人たち

立花 国全体が国粋主義的な風潮でしたから、面と向かって批判はできな

かったのでしょうか。

でした。

龍子 そうそう。 しかしキリスト教主義の学校として、我慢ができないこ

る職員はそちらに固まり、それを全く考えない人たちと学校の内部が分か とはあったのではないでしょうか。戦争に向かっていくときだから、心あ

憲法発布の日に斬りつけられ、憲法発布の日に斬りつけられ、な洋化主義者としても知られな洋化主義者としても知られな洋化主義者としても知られな洋化主義者としても知られる。1889年の大日本帝臣、明六社会長、東京学士会臣、明六社会長、東京学士会臣、明六社会長、東京学士会を廃止し、英語を展し、おけい大部大を原と、現代の文部大を原と、現代の文部大を原と、対している。

(9) 清水幾太郎(1907~1908年):日本の社会学社学藝部専属、1941年かれ学藝部専属、1941年から讀賣新聞社論説委員を務めら請賣新聞社論説委員を務め

翌日死亡。

龍子

れていったようでした。

立花 職員室はいくつかあったのですか。

4階建ての建物に職員室は4つあったと思います。お父さんは文学

部なので4階でした。

龍子

立花 あるいは、全部解読出来てないですが、この大戦を機にしてキリスト教は い。まさか餓死はしまい。日本人は天皇陛下の子だからと書いてあります。 日記には、「武士はくわねど高楊枝」。しかし食わぬわけにはいかな

どうなるか。滅亡するのではないかと書いてあります。 湊川 完置ではいう人も日記に出てきます。知っていますか?

知っています。湊川さんは、九州大学出身の尊敬できる先生でした。

爆の爆心地に住んでいて、双子のお一人が生き延びて神戸でお医者さんに 男のお子さんが3人、うち双子がいました。ご夫妻とお子さんの5人が原

立花 湊川先生という名前がよく出てくるので、わりと仲がよかったので

いまは生きているでしょうか。

なったと聞いています。

すか。

連動 'n 形成されるようになった。 れるようになる。 を徐々に強くし、ついにはフ 民族主義、 時の政府の対外膨張の国策と て見直そうとしたものと言わ を西欧文化と同等に相対化 の社会風潮に反して、自文化 の優秀性を論じ ァシズムを許容する風潮も現 国粋主義:日本の伝 やがて自文化至上主義が 或して、 全体主義への傾向 他文化排外主義、 欧化一 K 統 文 化 辺倒

11)湊川孟弼:活水女学院の教 を偲んで描かれた絵画が存在 投下により死亡。当時の様子 哲学を担当。長崎 の原爆

立花

龍子 哲学を勉強していらして、私たちは尊敬していました。

龍子 戦争に向かっていくことを一番心配していた人です。

荒木大将がどうのこうのということも出てきますが。

立花 神の国の三ヵ年運動とか書いてありました。メソジストとも書いて

あります。活水はメソジストですか?

龍子 青山学院、 先日メモ書いてあげたでしょう。活水はメソジストです。関東では 関西では関西学院がメソジストです。

立花 断片的に書かれているからよくわからなかったのですが、アメリカ

のメソジストと書いてありますね

龍子 そのあたりは、『活水学院百年史』を見ればわかると思います。

直代 ないでしょうに 清水幾太郎は、当時読売の論説委員です。お兄さんが知らないわけ

立花 幾太郎が書いたのだと思いました。これは、27日となっています。何月か ころに線が引いてあって、 その日付の天声人語を調べればわかるのでしょうか。天声 清水幾太郎と書いてあるので、天声人語を清水 人語のと

本の陸軍軍人、第一次近衛内(1877〜1966年):日12) 荒 木 大 将 = 荒 木 貞 夫

気盛んな青年将校のカリスマの重鎮であり、昭和初期の血最終階級は陸軍大将。皇道派閣・平沼内閣の文部大臣、男爵。

的存在であった。

員長に就任。富田満が委がエルサレム会議の精神を継がエルサレム会議の精神を継がヨッサンはので、賀川豊彦の協議会において、賀川豊彦の協議会において、賀川豊彦の協議会において、賀川豊彦のは、

山学院、関西学院が生じた。て興された教派。日本では青でジョン・ウェスレーによっていまない。日本では青年のでは、英国

みたいな立場でですか。

175 2

お兄さんが1歳の時ですね

はわからないけれ

直代

そういう状況の中で、だんだん食えなくなるようになってきたらし

いですね

立花

龍子 生活問題が深刻化しました。

立花 日記だから筆致に濃淡があって、お正月のあたりはくわしく書かか

す。くわしいことはわかりませんが、すごく大変だと書いてあります。こ

す。このころ活水の中でいろいろな問題が職員会議で起きているらしい れていますが薄くて読みづらくなっています。家計の詳細なども出てい

で ま

うした中で、北京の師範学校に赴任することになるのは文部省の派遣教員

任統治領を治めるための省がありました。 龍子 文部省ではなくて、大東亜省だと思います。当時、 大東亜帝国の委

立花 ったのではないかと思います。 それは、その先ではないでしょうか。 大東亜省というのは戦争が始まってから、 長崎から行くときは文部省だ

> 15 初等・中等学校教員の養成 師範学校:戦前に存在した、

範教育) を目的とした中等・

16) 大東亜省:大日本帝国の委 任統治領であった地域及び同 高等教育機関。

戦争)に於いて占領した地域 を統治するために置かれた省。 国が第二次世界大戦(大東亜

ますので。

1943年11月に設置されます。 植民地のことはすべて大東亜省が管轄

父・経雄、師範学校教員として北京へ

の教員という立場で北京に行きました。 龍子 そのあたりのことはあまり覚えていませんが、お父さんは師範学校

立花 そのことは、資料のここに書いてあります。昭和16年北京市立師範

ます。派遣された場所はここに書かれている住所で、北京市の地図がここ 学校教員。昭和16年5月に文部省派遣教員第一号として着任と書いてあり

にありますので、見てみましょう。

ました。当時はまだ監視が厳しい時代で、たちまちに警官につかまり、 ぼくは、ずっと後になって北京に一度行って、かつての自分の家を訪ね

る豆腐池胡同 ょうがないので事情を話したら、 の向 かいには、毛沢東のお妾さんの家があったのです。 Ňγ ろいろ説明してくれました。近所にあ

龍子

その話は知っています。

情報ソースはその人からという可能性があります。

立花家の〈戦争の記憶〉

党があり、 立花 北京にいるときから知っていたの? 当時 は国民党が北京を支配 してい 当時 た時 対ですよね Ď 中 ・国には国民党と共産

弘道 その毛沢東のお妾さんの話も、 事実かどうか (笑)。

弘道 え。でも、 それは、その地区の共産党員が言っていましたよ。 毛沢東が図書館の司書をしていた時代にその愛人を作ったのかね 当時 の日本人が中国の内戦状態の中で、敵の親玉の愛人が 13 る

仲間 立花 (T) 誰 お父さんは文部省の派遣教員になるわけですよね。 ごかが中国に行って話をしに来るということが日記に出て来ます。 その前に、 既に

と知っていたのだろうか。

龍子 そんなことがありましたか。いつごろの話ですか?

立花 ホワイト先生が校長をしていた時代の話です。

東において孫文等により結成。

龍子 っていた時に隣の席に日本の教官がいたの。その人からかもしれません。 か覚えていません。 それは知りません。北京にいるときにそのことを知ってい あ れかしら。 私が子ども二人を連れて神戸 から たかどう

177

2

中国共産党:1921年7月に、 主義組織を糾合する形で らが各地で結成していた共産 北京大学図書: コミンテルンの主導により、 京大学図書館 北京大学文科長の陳独秀や北 長の 館司書の毛沢東 `李大釗

中国国 を開催、 って1894年11 華民国の上海にて第一回中国 ロシア革命の影響を受け、 共産党大会(中共一大会議 成された興中会を母体と 民党:蒋介石 1919年10月10日に、 結成。 月にハワイ 文によ

立花 といろいろな人が中国へ行っていたと思います。中国人が日本人に親切に おそらく早稲田の仲間かなにかの話ではないですか。 あの頃、 わり

してくれているという一般情報が新聞に出ていて、それは実は本当ではな

く宣伝工作的な情報だということが書かれています。

設が作られて、そこの人は日本人に対する見方が違っていました。 龍子 北京で住んでいた場所から歩いて5分のところに自由学園の教育施(®)

お父さ

(18) 自由学園:1921年、

リスチャンの思想家、羽仁も

自由主義に立った女子学校。 に創設した学校。キリスト教 と子が東京都豊島区雑司が谷

のち男子部をおいた。

んもそこで手伝いしたことがあります。

立花 の教え子がいたわけです。 当時、自由学園は中国に足場を作っていた時期でした。羽仁もと子(B)

龍子 わりと教え子が現地に残っています。

立花 羽仁もと子さん自身も北京にいたのですか。

ときどき、いらしてました。自由学園の卒業生が著作集を持ってい

たりしました。

19) 羽仁もと子(1873~ 記者(女性初の新聞記者) 子教育家。教員、 1957年):青森県出身の女 立花隆の母・龍子はその支持 よらない女子教育を創始した。 人之友』)を創刊。文部省令に へて、『家庭之友』(のち『婦 報知新聞

立花家の宗教的バックグラウンド

戦争中に塚本虎二という有名な無教会の指導者が集会を開き、 うちの両親は、 活水関係者ではあるが、宗教的には無教会主義でし 何百人

龍子 も集まったと書いてあります。 それは丸の内の全国集会で、階段まで人がいっぱいでした。

弘道 それは戦後の話ではないでしょうか?

弘道 龍子 それは戦後に、水戸から行ったということですね。 直代が赤ん坊の時です。

立花

P

軍人がいたということですから、戦前のことですよね。

立花 龍子 そう。 ということは、戦前に長崎から東京に行ったということですか? 海軍の軍人が多かった。

龍子 案内が出ていてそれで知りました。 時期とどこから行ったかは覚えていませんが、月刊誌にその集会の

位の人を集めたと書いてありました。この人たちは、内部的なベタを配布 本訳の聖書を日本聖書協会で作っています。その塚本さんの集会が数百単 立花 ある時期までは、塚本虎二がいて、この人は聖書研究者でもあり塚

では、

聖書の「

新共同訳」で

知られる。

179

2

独立に機運を持つ。 ンに追従しないという自主・ 戦時中、アメリカのミッショ 唱したキリスト教の信仰。 を信仰のよりどころにする。 会の制度によらず、聖書のみ 無教会主義:内村鑑三の提

21) 塚本虎二(18 ギリシャ語を学び、雑誌『聖 村鑑三に接し、無教会へ入会。 リスト教伝道者。一高時代内 1973年):福岡県出身のキ 書知識』を刊行。 8 5

(2) 日本聖書協会(Japan Bible Society):1875年以降、 手に移され設立される。近年 って行われていた日本の聖書 メリカなど各国聖書協会によ コットランド、イギリス、ア 事業が1937年に日本人の

龍子

それは、

湊川先生の関係です。

する仕事があったわけでしょう。

あっ、それでわかった。きっと塚本さんのグループの個人雑誌かな

龍子 そうですね。当時の文部大臣であり、獨協大学を開いた天野貞祐と にかを読んでいて、それに書いてあったわけですね。

いう人も関係の本を出しています。

長崎から北京へ

北京の社会の中に入れていったようです。昭和16年5月北京市到着、 辺国の支配を広げていく中で、北京は一種の戦場であり、役人的なものを 師範学校教員、 しい、ミッションに対する社会的圧迫などが積み重なり、一方で日本が周 長崎から北京への話に戻します。長崎ではそういうわけで生活が苦 翌年は北京市高級中学校教員となっています。 今で言うと 7 月

進学する割合の高い高校ということになります。父は、終戦を高級中学校

日本で言えば日比谷高校のような高校です。

北京大学に

ころの高等学校、

23) 天野貞祐(1884)学長を答めた。 (1980):神奈川県出身の哲学者、教育者。第四次吉田内学者、教育者。第四次吉田内学者、教育者。第四次吉田内学長を答めた。

度北京に戻り、 の教員として北京で迎えました。戦争が終わり、引き揚げの後に、もう一 北京大学で日本語を教える先生もいました。

龍子 それは岡崎さんですね

立花 そうです。岡崎さん。だからある時期の北京大学で日本語を学んだ

学生は、ほとんどが岡崎さんのお弟子さんです。戦後すぐの中国で日本語

サントリーが中国に進出してビールを作ったりした時期です。 ができる人はみんな北京大学で学んでいているわけです。その時期とは 当時に北京

〈戦争の記憶〉 を賞品とした。それの取材に来ないかとぼくに誘いがあり、行きました。

で宣伝のためにマラソンを始めました。マラソンで一番の人に電気栓抜き

そんなこともありました。

立花家の これは、北京から引き揚げるときにうちの父が書いた小説です。タイトル 今回、その岡崎さんという人に会って、いろいろと話を聞いてきました。

は 西西 [苑]。 内容的には、直木賞を狙うというような内容の代物です。

2

181 その引き揚げのプロセスが書かれています。まず、集結地を作ってそこに むとすごくおもしろい。終戦の過程で日本人が北京市内に何十万人といて、

のです。第一段階として、北京は大きな城壁で囲まれた都市で、城内と城 です。その代表が中華民国の政府と相談しながら船の手配などをしていく 集まります。 北京にいる日本人は、「居留民団」という組織を作ったよう

当時、 き揚げ者の最初の集結地にしました。第一次集結、 外があり城外は治安が悪いわけです。城外にもともと中国軍の兵舎があり、 日本軍が自軍の兵舎にして使っていました。戦後、その兵舎跡を引 第二次集結というプロ

セスを経て引き揚げをしていきました。

ければならないという混乱もあいまって完全にパニック状態に陥っていま する人たちなど、色んな人たちがバラバラにいて、全財産を置いて行かな ることができるという人たちと、 信用しないわけです。集結地にはデマがたくさん飛びかっていました。だ うような状態になってます」みたいな情報が入ってきても、要するに誰も に無政府状態になっていますから、居住民団では中国と交渉して、「今こ 最初に城内の日本人たちが引き揚げていきます。当時の集結地は完全 城外は危険なので、 城内の集結地に集まっていた方が確実に帰国す 積極的に城外に出て行き情報を得ようと

> した収容施設。 に帰還する際に一時的に集結(24)集結地:引き揚げ者が日本

と 嘘、噂、流言などを意味する。が行う虚偽宣伝を本義とし、(demagogie)の略。権力機構だ (25) デ マ: デ マ ゴ ギ ー

でしょう?

乱が北京でも起こっているわけです。 した。言ってみれば第二次大戦が終わる前後のベルリンの混乱みたいな混

そのような混乱の中、集結地に集まり、いろんな出来事があるわけです。

西苑』はそんな集結地を舞台にした小説で、すごく面白いんです。本当

にさまざまな人が出てきて、集結地の様子が詳しく描かれています。

うちの一家としてはですね、まずはお父さんがそうやって北京の文部

お母さんや家族に相談をするような人じゃないでしょう? 勝手にやる人 省の派遣教員に応募していく過程なんですけれども、お父さんはあんまり

この二人の子を置いてさっと北京に行ってしまいましたから、その時はも 感じでした。ですから私は、隆志が生まれたばかりで1歳、弘道が3歳

龍子 たしかに、相談というのではなくて、自分で颯爽と決めてしまった

う苦労いたしました。

2

立花家の

183

立花 龍子 それは戦後の話。北京に行くまでは長崎にいました。 それでお母さんは、実家のある水戸の方に行ったんですよね。

立花 てから、「来い」という知らせが来る。そういう流れですか? 北京に行ってしまったお父さんとしては、まず北京での生活を整え

龍子(そう。そのあたりはきっちりしていました。

育二・スコーそのおかりいまっせりしていました。

それはいつごろなんですか?

立花 龍子 なるほど。それで実際に北京に向けて5月に下関を出発したという あなたが1歳の時。5月生まれだから2歳かな?

龍子 神戸じゃなかったしら?

ことですね

花 この年表には、下関出発って書いてあるけど、これは……。

直代 それはお父さんのものね。下に、昭和17年5月17日に離日と書いて

龍子 その時は、もう戦争に入っています。

私たち一行は16年の7月に行くわけですね。 なるほど。そうすると、お父さんは昭和16年の5月に行っちゃ

龍子 いやいや、お父さんが16年の5月でしょ。 私たちはその翌年の17年。

185 2 立花家の 〈戦争の記憶〉

町の雰囲気などは覚えてる?

龍子 立花 龍子

あまり覚えていません。

母、太平洋戦争開戦の報を聞く れたばかりで。 立花 そうすると、長崎に2年いるの? なるほど。だから、ぼくが生ま

龍子 隆志は15年生まれだから、渡る時2歳で、お兄さんが5歳。そして、

その時にちょうど太平洋戦争開戦。それを水戸で聞いたわけ。 水戸で聞いたのですか?

立花

立花 龍子 泊まっていたときラジオで聞いたの。 それは、那何西に居たんだけれども、たまたま渡里の百合子の家に その時のことは多少覚えていますか?

あなたをおんぶして。ラジオを聴いたのだけ覚えている。

立花 その頃、 新聞はあったのですか?

龍子 新聞はもちろんありました。

立花 きな記事を見た記憶はありますか? じゃあ、「真珠湾を先制攻撃し、 大東亜戦争開戦す」みたいな、

大

龍子 記憶はありませんが、当時は皆あまり騒がなかったのを覚えていま

立花 騒がなかった?

龍子 なにしろ、みんな興奮したのね。その興奮が、本当のことが分かっ

した。 てという興奮ではなくって、「戦争で自分たちが勝つんだ」という興奮で

戦争中、ずっとラジオで軍艦マーチが鳴って、大本営発表という放(%)

送がされますよねっ

立花

龍子 それはずっと先のことでしょう。

それは先? 開戦の時はやらなかったの?

龍子 どうだったかしら……。

弘道 囲気ではなくて、今でこそ多少は栄えたけれど、当時は隣近所ですら離れ ラジオはなかったと思うよ。当時住んでいたところは町といった雰

> 26) 軍艦マーチ:鳥山啓作詞、 瀬戸口藤吉作曲の「軍艦」を、

れる。 ろがねの……」の歌詞で知ら たもの。「守るも攻めるも、 1900年に背戸口が編曲し

27) 大本営発表:大本営とは、 を伝えた。 営発表と称して、 天皇に直属して陸海軍を統帥 した最高機関。ラジオで大本 国民に戦果

弘道

水戸のどのへん?

187 2 立花家の〈戦争の記憶〉

> はめったに通りません。家はわら屋根。わら屋根の大きな……。 ていて、ぽーっと電気が見えるくらいの感じで離れていて、 昼間でさえ人

弘道 どこで聞いたの?

立花

え? それは長崎市内じゃないの。

弘道 龍子 水戸の市中に来たわけ? だから水戸だって。

立花

なるほど。お姉さん、百合子ちゃんちの家のおばさんのところに、

戦争が始まった時に一時避難していたわけですね。

弘道 立花 渡里。 渡里じゃ、そりゃ田舎だよ!

立花 くらいの田舎だ。 人なんか通らない。馬が通った、ちょうちん下げた人が通ったっていう あ の頃の日本人は、アメリカとの戦争が起きるってことは、びっく

りするようなことではなくて、いずれはそうなるとは思っていた?

龍子 立花 龍子 あなたが生まれる15年でしょ? その時はすでに戦争状態ですよ。

それは中国との戦争では?

はどうでもよくて、ただただ被害が及ぶという恐怖でいっぱいで……。

いやいや、敵国がどこの国かということは個人個人の家庭にとって

立花 龍子 それもあるけど、食べるものがなくなって来たの、着るものもなく 被害というのは、家族が兵隊にとられるとかいう?

て。

龍子 弘道 こちら(弘道)が生まれるときは何でもあって、こちら(隆志)が 買い物はすべては配給切符制で、もう衣類も何にも買えない

生まれるときは、おむつも食べ物もミルクも買えなくって。あなたは玄米

立花 ああ、そう。 ははっ (笑)。

の粉で育ったの。

龍子 そうなのよ。だから、病気をよくしました。栄養とれなかったんで

ああ、そうだったっけ。

立花

ははは (笑)。

弘道 着るものもあまりなかったしね

龍子

立花 ああ、なるほど。つわりがひどいって話は日記に出てきますよ。そ ちょうど私のつわりの時期に、物資不足が始まっていました。

イライラしてるという。

龍子 立花 「龍子、少しつわりか」と日記にあります。要するにこれがつわり とにかく食べるものがなかったの。

の時期ですね。少しイライラしているってありますよ。

弘道 少しじゃなかったんじゃ (笑)。

立花家の 立花 龍子 ああそう、ちょうどその頃? そして、やっとのことで二人が生まれた時は竹槍訓練で。

長崎中学という昔の旧制中学、長崎にひとつしかない学校があって、そこ

戦争前からすでにそういうことが始まっていました。うちの近くに

2

龍子

生の姿を見ました。西の端の長崎でも、戦争前からすでにかなり大変だっ に軍人の配属将校が姿を現し始めました。毎日、配属将校に連れられた学

189

立花 もう中国との戦争が始まっていると考えていいわけでしょ。

弘道 するって雰囲気だったの? それとも、三国同盟以降、新聞などでは、米英ともいつでも戦争を

すけれど、長女の姉の夫が職業軍人で、いち早く中国に出されました。2 龍子 私の兄弟は、6人全員女の兄弟なんです。男はひとりもいないんで

したから、とうとう招集は来ず、ずっと開業医をしていました。それから、 番目の夫も公務員でしたが、なんと赤紙召集で……。3番目の夫は医者で

4番目の夫は戦病死。戦場で亡くなったんじゃないんだけれども、無理を して病気になって……。それから私の妹の夫、この人は経済の勉強をした

たんじゃないかしら、帰ってきました。 人で、軍隊で経理の勉強をさせられていたので、危ないところは出なかっ

経理学校

立花

それは陸軍経理学校ですね

また話を戻します。その方が北京のうちへきますよね。一度。なん

立花

どういう風に?

り様にびっくりしました。

外地・北京での暮らし

かすごくいいお土産をもらった記憶があります。

いろいろ物資をたくさん持って。

龍子

たということで戦場には行きませんでしたが、教育召集までは受けたわけ 二乙種合格でした。丙種には至らなかったけれども、軍人には適さなかっ 私の主人は、体格的に非常に貧弱な人だったんです。兵隊の検査も、第

立花 龍子 そうそう、3週間くらい。その行く前と行った後で、あまりの変わ その教育召集というのは、北京にいるときに受けるわけですか?

です。男の人たちは、本当に多くの人が戦争で亡くなりました。

乙種は第二位の合格準備。甲種、乙種、丙種合格があった。

28

乙種合格:徴兵検査には、

はびっくりしました。たった3週間でどういう教育をしたのか。 したが、何かこう、戦争に対する気持ちが大きく変わったようでした。私 龍子 体も鍛えられたんでしょうけれども、あまり言葉では言いませんで

192 立花 中に大きな庭がある回廊ですね。 それで、北京に行って、豆腐池胡同のそこの四合院というね、

真ん

の手段で得られたの? その時代、今、世の中で何が起きているかというニュースは、なんらか

知っていらして、外地にいた私達はまったく何も知らされなかった。 龍子 戦争については、外地よりも国内にいた方のほうがほんとに真相を 暮ら

なかったし、それから防空壕に入るようなこともありませんでした。聞く しむきは日本よりもはるかによかったです。 物は豊かで何一つ困ることは

ところによると、北京は特別だったみたいです。

たいなものがねありませんでした? 立花

庭の真ん中に十字の道があって、交差点みたいなところに防空壕み

龍子 簡単なものね

立花 お兄ちゃんはそれ覚えてる?

防空壕は覚えてる。

あの中に入ったのは覚えてる?

弘道 立花

った。

弘道

入ったというかね、いつでも入れる感じだったよ。子どもだから遊

龍子 鶏の卵があった。

弘道 それを誰が盗んだか、とかなんとか大騒ぎした覚えがあるな。

立花 龍子 竹やぶ? そうね 竹やぶなんかもあったでしょう?

四合院の大きな庭を囲んで、何家族くらいいたんですか?

龍子 12 3家族かしら?

弘道

けれども、それを細かく区分けして、畳は入れるは何やらで。

もう、とんでもないすし詰め状態だよ。一応、中国の大邸宅なんだ

中には、オンドルか何かが入っていたんですか? オンドルもあったね。途中で燃料がなくなったことがあって、寒か

龍子 トイレも水洗だったのよ。

弘道 大金持ちの屋敷を割って、日本人が十数所帯入る。それが北京市内

一帯にいっぱいあるという感じかな。

立花 通りには大きな門があったなあ……。

弘道 いつも門番がいた。中国人の。

立花(それで、門の中はどういう感じになってたんですか?

弘道 たしかよその人が住んでいた。

龍子 の。入り口の方はあまりよくなくてね 門を入ると、十何軒かの家があってね。奥に行くほど、よい建物な

立花

手前のほうには、使用人が住むために使っていた塔とかいろいろあ ってね。そういう塔にも全部日本人が入ってるんだけれども、お互いに、

あっちがいいとかわるいとか、そんな話をよくしていました。

立花

要するに、『金瓶梅』の物語に出てくるようなものすごいでっかい

屋敷なんですね。

弘道

立花 ったところまでは分かりましたが、中までは行けなかったので、外から覗 僕は、最近になってその跡地に行ったことがあります。元々門があ

特に子どもの目にはものすごくでっかく見えたなあ。

龍子

大きな街路樹がずっとあったのよ。

弘道 屋敷はもうなかったでしょ? 唐風歩道は残ってた?

くみたいな感じでした。

立を 通りかつり引は残っていこ。 小則り戻するのけっ

龍子 建物自体は残っているの? 立花 通りからの門は残っていた。外側の塀はあるわけね。

立 花 うん、残ってる。だけど、その内部の四合院の部分までは見えない。

弘道 いる。 外側の通りの土塀みたいなところは分かるの。それで、大きな門は残って 行ったのはは北京オリンピックの前?

立花 ああ、そうかもね。 立花 オリンピックはもう4年前だから、前です。

の祀っ 弘道 た廟が近かったの。 あそこの辺りはだって中心部だもん。割と。天壇って言う清の皇帝

立花 いや、天壇はちょっと離れてるんじゃない?

196 立花 弘道 いや、わりと近くに似たようなのがあったよ。ものすごく大きい。 当時じいさんが、連れてってくれたよ。

弘道 しているところがあるかもね。 それは鼓楼だ。縄文の太鼓をやるところね。たしかに、それと混同

立花 むしろ、北海公園が近かった。

弘道 北海公園って言ってた。子ども心にペーハイ、ペーハイ言ってた。

龍子 ああ、 池ね。

て言った。ペーハイ、ペーハイと。 中国読みでペーハイ。親もペーハイって言ってた。俺もペーハイっ

テンダンはちょっと離れているけれども、故宮の裏からは近いとい

弘道 確かそういう感じ。割と一等地だな。 大金持ちの何某という人の屋 う。

立花

弘道

それで、日常の生活はどうだった? 召し上げたわけだから。 経済的には豊かだった?

お給料はきっと倍くらいだったんじゃないかしら?

龍子 立花 そもそも同じ給料であっても、 そして、 物資が豊かでね 北京では物の価値が全く違うだろう

からねえ。

弘道 いたしね。恐らく、日本の内地と比べたら段違いに豊かな生活になったん 北京中にたくさんあまっているアマさん(女中)をわざわざ雇って

立花 だよ。 アマさんのお給料がいくらだかは知らないけれど。 各家庭に違うアマさんさんがいたの?

立花 龍子 何軒くらいで共同で? いや、共同で。

〈戦争の記憶〉

龍子 4件くらいかしら。

立花家の

弘道

てたの持ってってないのって大騒ぎして。そこに住んでる日本人が集まっ

共同だったのかぁ。そのアマさんが日本人の家から砂糖菓子を持

までは知らないけれども。なんか「あの野郎!」みたいな感じのとげとげ て騒いでいたのは覚えてるなあ。そのアマさんさんが首になったかどうか

197

2

しい言葉だった。「このチャンコロ!」みたいな……。

龍子 うちのアマさんは、非常に立派な人でしたよ。しっかりしたね。

立花 それで日常生的には、食事なんかはアマさんが作るわけですか?

龍子 朝、火を起こす仕事があるの。 石炭の粉を固めた豆炭に火をつけて、

食事はお母さんが作るわけっ

一日中絶やさないようにするわけ。

弘道 石炭そのものもあったよ。思い出した。石炭を投げて怒られたりし

たんだ。

立花 ストーブの上でメリケン粉を溶いて、お好み焼きと称して何とかや っていたね

弘道 ねぎだけ入れてね。

葱餅ってのがそれ?

弘道 そんなの作ってくれたね。 あれは石炭だったかしら?

なんか記憶が薄れちゃった。

それで、とにかく中国蔑視がひどくてさ。あの中国人不信は異常じ

小学校に通ってるわけだれども、ある時、行きは集団で行くんだけ 帰りは北京市中は子ども一人でも大丈夫だった。だから一人で帰

ってきたわけね。すると、

中国の廻警っていう巡回警察が、「ガッ」と掴

ゃ

なかったかな。

〈戦争の記憶〉 です。それで解放されましたが、こちらは謝りもせず、憤然として帰った があって、ちょうどその日は市民全員が避難しないといけない日だったん したら、「ウー」っとどこからか鳴りはじめた。 ども、「なんだチャンコロが、俺に手なんか!」ってね。振り解いて抵抗 んで引き止めるわけ。俺は子ども心にその時の感情を覚えているんだけれ 当時中国にも、

防空訓練

2 199 立花家の たキリスト教の家庭で、『婦人の友』の友の会の会員で、当時としては普 ならなかったのかもしれない。さらに言えば、 として間違っている」と熱心に教えていれば、そのような傲慢 ば、学校教育にあるんだけど、俺が思うに、家庭でそうした人種差別は 当時うちはまだ進歩的だっ な態度には

いう意識が根強くあった。こういう目に見えない事実というのは根を探せ 記憶があるよ。とにかく小学校一年生が、「日本人のほうが偉いんだ」と

生が平気で「チャンコロ」と言っていたんですから、その程度だと思います。 通の日本人よりはリベラルな家庭だったと言えますが、結局、 小学校一年

立花 差別に関しては、僕は記憶はないんだなあ。

お母さんはほとんど土塀の中のあの一角にいたの? 外にほとんど行か

龍子 3番目の女の子がちょうど生まれましたから。

ずに。

立花

龍子 ほとんど。弘道の小学校にも行ったことがないくらい。

じゃあ、ほとんど町に出るってことはなかったわけね?

弘道 行ける範囲でしょう? 本人が歩いているんだから。遠くはない。

立花 僕はお兄さんの学校に一回行ってるんですよ。その時はお父さんに 龍子

入学式も全部お父さんが行った。

連れていってもらったと思いますけどね。それとは別に、僕は一回、一人

会った中国人の若い青年に、「バカヤロー」って言われたんですよ。 であの門を出て町に出たことがあるんですよ。それで、町へ出てすぐに出

なり向こうから。それでびっくりして家に帰ったっていう記憶があるんで

龍子 弘道も「バカヤロー」って言われて、「バカヤローって何のこと?」って 「バカヤロー」って言葉を、当時きっとよく使ってたんでしょうね

私に聞いてきたことがあります。

弘道 どこで? 日本で?

立花 龍子 そう、外でね 違う、中国でしょう?

〈戦争の記憶〉 弘道 こと言っちゃ大変なことになるからな。中国人の人力車の料金の問題で、 日本人とよう揉めてるのを見た。客が殴ったとか、金を払わず行ったとか、 日本人のチビだから向こうは言えるわけだ。成人の日本人にそんな

いろいろなんか揉めてるわけね。しょっちゅうね、小学校の時

2 弘道 そうそう、思い出した。洋車と書いて「ヤンチョウ」 立花家の

立花

ヤンチョウってやつね

201 立花 な移動していた。降りるときにお金払ってね。 タクシーではなくて、「ヤンチョウ」という人力車で日本人はみん

弘道 ないといけないよ」という話が出回ってた。相当日本人は嫌われてた感じ。 一方で日本人の間では、「中国のヤンチョウはぼるからな、用心し

庶民階層の人から、いや庶民とか関係なく中国人全体から。

立花 それで、日々の買い物ってのは、アマさんがやるわけ?

立花 龍子 それでアマさんには、「~を買って来い」みたいなことを言うんで だいたいはね。

龍子 そうそう。少しは私も行きました。八百屋さんとかね。

すか?

立花 八百屋さんとかじゃなくて、市場でしょ? 僕は一回市場に行って

るんですよ

弘道 行った行った。魚の市場で、干物とか太刀魚の生きた長いのとか、

あ。一人で行くわけないもんなあ。 記憶にあるわ。誰と行ったかな? 恐らく誰かと一緒に行ったんだろうな

弘道 なんか太刀魚ばっかり、何日も食わされたことを覚えているね。

そこは記憶がないなあ。

弘道

あ、アマさんに連れていってもらった記憶がある。肥った人ね、肥

立花 ツーマージャンと。 ああ、そう。僕は覚えてないけれども。覚えているのは、ナツメと

立花 弘道 それも知らないなあ。ツーマージャンってのはゴマで、ナツメはい 蜂蜜。蜂の浮いた蜂蜜。 瓶ごと買ってくると、蜂が浮いてる蜂蜜

っぱい積んであった。

弘道 赤く干したやつね

立花

市場へは、誰が連れてったんでしょう?

龍子 どうだったかしら?

立花 じゃあ、案外僕らの方が北京市内に出ているわけだ、お母さんより。 ったアマさん。肥ったアマさんが一番長続きしたんだ。

そうすると、お母さんはほとんど外で何が起きているか分からないんじゃ

龍子 あったということ。あれはニセアカシアかな、感じのいい街路樹があった。 覚えているのは、 家は人通りの少ない屋敷町にあって立派な道路が

203

2

立花家の

立花 かしくなってきつつある、というのは、多少は知っていたの? なるほど。それで、 戦争に関して、だんだん日本にとって情勢がお

ほとんど知らない。だって、新聞にもそういうことは出ないでしょ

う? だから私たちは知りようがないわけ。

新聞はなくとも、日常ラジオをみんなで聴くとかニュースを聞くと

立花

か、そういうことないわけ?

弘道 龍子 京の上空を飛んでいるのを見ました。 ラジオも「戦争は粛々と遂行中である」としか伝えませんから。 1945年8月の少し前だったか、金色や銀色の大きい飛行機が北

立花 ああ、そう。

弘道 空軍なんてアメリカには太刀打ちできないから。でもそんな飛行機が子ど それこそ、「あれはなんだ!」って感じで。もう、あの頃は日本の

少年にとっては。「なんか来たー」って。 も心に綺麗なんだよ、これがまたすごく。 メカ的な意味もあるしね、

軍国

ある時、飛行機がビラを撒きにきた。「日本負けた」と。お父さんが読

立花

どこの部屋に集まったの?

2

んでいるんだけど、見せてくれないんだよ。「父ちゃん何?」としつこく

聞

いた。

北京にて玉音放送をラジオで聞く

立花 いですか。それは聞いた? 終戦の「玉音放送」を、みんなでラジオで聞くところがあるじゃな

龍子 聞きました。

龍子 立花 そう。近所の人たちが集まってね。 あれはやっぱり北京でも、 部屋にみんな集まって、という感じ?

立花 龍子 ラジオ自体は各戸にないわけね。ひとまず、ラジオのある家にみん ラジオがある家が十何軒かある中の1件か2件で、そこに集まって。

龍子 ったのね。一体、何だろうと。後から説明もあったんだけれども、よく分 な集まったわけね そう。3家族か、 何人か集まって。でも、はっきりは聞き取れなか

された川田瑞穂が草案を作成。内閣書記官迫水久常から依頼り日正午、天皇が終戦の詔書は日正午、天皇が終戦の詔書は、1945年8月

大東亜省顧問安岡正篤が校閲。

からなかった。

立花 だけれども、あれ見たときに、あのラジオはこんなもんですよね、(大き ジオを手に入れて、それを壇上に乗せて数年前にシンポジウムをやったん にラジオ一台のせて、それをみんなで聞くんですよ。その時と同じ型のラ あの日、東大でも安田講堂にみんな集まって、安田講堂の演壇の上

さを手で示す)あれはびっくりした。

弘道 きちんともう、前ならえして、両手を両脇につけて「頭を垂れて聞け」っ 俺は、ちょうどその時学校にいた。とにかく全校生徒校庭に並んで。

て。それがもう嫌で嫌で。

だけっで終わっちゃった。 立花 僕は、「なんかおごそかな浪花節かなんかが流れてるなぁ」っての

ういう意味の放送か分からなかったんじゃないかな。それで、数日後学校 たちを前にどういうふうにしていいか分からず、「すぐ家に帰れ」って言 ・いました。「とにかく急いですぐ家帰れ」って言った。先生たちも、ど ところがね、終わった後も先生たちも分からなかったんだろうね。 〈戦争の記憶〉

立花

龍子

少ないと思うよ。

弘道 立花 先生は何人くらい 学校の校庭に。陸軍が持ってきて、引渡しの用意をして。兵隊もいるから。 戦車っていったって、今の軽自動車に毛の生えた程度の大きさの。 に行くと、校庭はもう軍需品でいっぱい。特に記憶にあるのは、 いっぱいあったのかね? そうやったんだ。その学校ってのは、生徒は何人くらいいるの? お母さん、あれ何人くらいいたのかね? そんなにないでしょ? 北京には日本人学校は

20台位 戦車 ね。

立花家の 弘道 どもだったからかもしれないけど、言葉という感じじゃなかった。 学校で聞いた玉音放送は、なんだか訳が分からなかった。雑音。子

弘道 お父さんは勤め先。それで俺が先に帰ってきた。母さんもいた。

2

立花

お父さんは、どこで放送を聞いたのだろう。

207

住んでる人たち全員が「恐らく戦争に負けた」と。 んまり騒いではないけれども、なんかあったというのは雰囲気で分かった。

父ちゃんが興奮気味に帰ってきてね、俺の目の前にあったブリキ製のバ

は対極にあるわけだ。そうでなかったら蹴らないもん。大事なバケツ。し ことがないね。とにかく、「万歳」とか「やった」とかそういう気持ちと た、思い切り蹴飛ばすくらい。その時どういう気持ちだったかは、聞 んなエコ、完全エコですよ。ところが、そのときの親父はものすごい怒っ が大事って、ご飯一粒落ちたって食う時代なんだから。当時、日本人はみ と思ったわけ。いやいや、「親父何する!」って。凹んでるから。当時物 ケツをバーンと蹴ってさ、凹んだわけよ。俺は子ども心に「もったいない」

立花 その時のこと覚えている?

かも子どもの目の前で。

にかかっていて、二人で熱を出して病人だったわけ。だから記憶があいま 龍子 その時期、ちょうど半年ぐらい直代と私は一緒に風土病のお医者様 いで覚えていない

覧子 二人一緒に。
立花 ああ、そう。二人一緒に?

弘道

立花 龍子

弘道 す。たしか、 当時は薬がないでしょう? ただでさえないのにその時期はますま 中国の薬屋さんに行ったような。昆虫、草木とかを干したよ

うなものを熱さましにね、ミミズだったかな。

立花

それ、覚えてるわ。

立花 弘道 俺も記憶ある。 印象深かったよ。本当にミミズの形しているんだもん。

熱が下がったんだよ。あれ薬効はあるわな。冗談抜きに。

子ども心にすごくびっくりしたよ。ところがそれが効いたわけだ。

立花 それは戦争が終わる前かな?

風土病は戦争が終わった後よ。

っこう効く解熱剤として有名。 あれは「地竜」って言うんだよね。地面の竜と書く。漢方薬ではけ

てご馳走を出していたのを覚えている。戦後になって虐められないように、 弘道 そして終戦から数日後、 隣近所の中国人を呼び入れて、 お酒を出

という意図かな。

酒飲ませてどうなるの」っていう意見もあって、子ども心に「正しい!」 その時、よく覚えてるんだけれども、中には「いまさらこんな風にして

龍子 覚えていない。病人だったわけでしょ。とにかく、家族でどう日本 と思ったのを覚えてる。周辺の中国人を呼んだの覚えてる、お母さん?

に帰るか、それを必死で考えてた。

それどころじゃなかったんだ。ただ、なけなしのものを持ってきて

弘道

飲ます食わすしたわけだ。お客はどんな人が来たんだろう。記憶ないよね

立 花 龍子 ラジオを聞かなかった人にはどのようにして知るのだろうか? 誰か有力 一つ分からない点があるんだけれども、終戦の玉音放送は、北京で 覚えていない。

龍子 新聞でしょ?

立花 新聞じゃないでしょう。

たしか、日本人居留民のなんとかいう自治会から知ったんじゃない

北京での日本人組織

立花

話 かな。そこの会長、副会長みたいのがいて、伝達がくるわけよ。恐らく電 当時の日本人は、 国内もそうだけれども、外地でもラジオはそこまで

流通されていなかったと思います。

立花 龍子 いや、俺は電話は覚えてる。 ラジオどころか電話も。

弘道 電話はあったよ。

ていたと思う。居留民を統括してたわけよ。

そういうコミュニケーションのツール

は、

所謂、

隣組組織が管理し

ベルが上についたような電話。記憶があるんです。

弘道

立花

北京では世帯が十何世帯くらいあって、それらが大きな居留民の組

制のために作られた地域組織。 町内会・部落会の下に属し、 隣組組織:戦時下、国民統

30

助・自警・配給などにあたった。 隣数件が一単位になって、

織との連絡はみんなその人たちがしてくれたの。

門を入った入り口に門番の中国の人たちが住んでいて、そういう組

龍子

織につながっているわけ

ね

212 立花

なるほど。

弘道 立花

たでしょう。この人が威張っててね。

いたかねえ。

の近所付き合いは大変だったと思う。近所に緒方さんという退役軍人がい

日本語がよくできる人が伝達したんだろうね。いずれにしろ。北京

弘道 立花

思うよ。お上の言うことを聞いて、下々に伝える役割

あんまり覚えてないなあ。

かをやらせようとしたりね。おそらくその人が隣組組織のトップだったと

に、「お前らもやれ!」みたいな話になって、陸軍体操とか、

海軍体操と

毎朝、えいえいえいと木刀をふりまわしてね。そのうち子どもたち

学校の先生でも、

って、こうした「お国のため天皇のため!」って怒鳴る人が必ずいたね

しょっちゅうお説教垂れる人とそうじゃない人と、子ど

それで、そういう日本人が何所帯何十所帯集まると必ず、中心にな

や修身の先生が多かったのかな。そのような天皇や戦争の話をしょっちゅ もがみてもすぐわかるんだよ。まぁ、役割分担があったにしてもね。教頭

弘道

龍子

持って行けるものなんて、何にも。

できたのですかっ

地を統括していたんじゃないかな。 うするような人たちがコミュニケーションのポイントポイントにいて、外

立花 それで、中国人の友達も知り合いにいたんでしょう?

龍子 そう。日本の大学を出て中国へ帰ってきた人がね。

弘道 たね。 立 花 ああ、 『西苑』にも、引き揚げ直前に中国人がうちへ来た話が書かれてい 思い出した。

お母さんがその人に、

立 花 龍子 立花 北京からの引き揚げ る場面が……。 覚えてます。 それで引き揚げの際、 集結地へ行くときに荷物を持っていくことが 訪問着を持っていってくださいと言ってあげ

214 弘道 ないでしょう。アルバムも焼かされたよ。 集結地にいく前に庭で、

立花 アルバムを焼いたのを覚えています。 なるほど。

弘道 たんだけど、これも結局集結地に入る時の検査で国民党の兵隊にとられた。 直代の赤いかわいい赤ん坊の靴だけ持って帰ろうとトランクに入れ

俺の目の前だから、これはまた惜しいなって思ってたわけだ。ぜんぜん履 いてない女の靴だから。

ういうわけで生き残ったか、こういうものがありました。

印刷物とかメモ類、手帳、写真なんかは焼いた覚えがあるんだけど、ど

ああこれ。これね

立花

弘道 これは北京から持ってきたのかね。

直代

違うよ。

弘道 確かに、 絶対北京からはないよ。 全部焼いた。

立花 ようするにこの資料群は、北京の部分の日記を除いて焼かれたもの

なのかな。

弘道 龍子

龍子

弘道

国民党軍ではあったね。政権白日。まず北京を制圧したのは。

陰さまでという感じ。

弘道 そうそう、そうだと思うよ。

立花 引き揚げの途中で、 お母さんが腕時計をしていて、 検査でとられそ

うになったことがありました。

は一つしかないって言ったの。 龍子 それは置いて行けと言われて、片言の中国語で、家族が5人で時計

弘道 いいエピソードね。

立花

龍子 無事うちへ持って行きました。

それはちゃんと日本に持っていったの?

その時計は。

あれはど

鶴丸印のアルマイトの大小の鍋があったじゃないですか。

弘道

うしました?

何だっけ。忘れちゃった。

あの鍋は北京から日本まで持って帰ったよ。あったでしょう。

引き揚げるときは本当、あまりに命の危険がなくてね、蒋介石のお

傘下の会社で製品化。

31 の表面を酸化アルミニウムの くく丈夫。1927年 被膜で覆ったもの。腐食しに アルマイト:アルミニウム

引き揚げ者は皆、

蒋介石にわりと感謝の念を持ってるのね。

立花

龍子

感謝でした。

に合わされなかったということがあるんですね。 だから北京からの引き揚げ者は、引き揚げの際にそれほどひどい目

立花

命の危険はまったくなかった。

弘道 知らないよね。 当時は、よっぽど左翼の人じゃないと毛沢東なんていう固有名詞は 立花

そういうことなんだね。

龍子

龍子 州とはぜんぜん違う。 同じ引き揚げでも満州からの皆さんは大変なようでした。北京と満

立 花 それで、引き揚げのために西苑に行くときはトラックで行くんです

か?

龍子

そうそう、トラックで。

トラックには3家族乗ったと……。

いや、2家族じゃない

32

蒋介石(188

7

1975):中国の軍人、政治 1906年、日本に短期

二次大戦後、 1949年、 国共内戦に破れ、 台湾に退く。中

により共産党と協力したが、 留学。抗日戦争では国共合作

華民国総統。

33) 毛沢東(1 想家。北京でマルクス主義 1976):中国の政治家、 8

加。 知り、中国共産党の創立に参 化大革命を起こすが、 和国を建国。1966年 1949年、 中華人民共

の誤りを指摘される。

どんどん移動を始めてたわけね。

立花

2家族ですか。

弘道 それで、

立花

列車に乗ったのは……。

それはその後。西苑からさらに港へ行くその過程だと思います。

弘道 トラック……。それは記憶にないなあ。

龍子 荷物と家族と一緒のトラック。

たいな組織がトラックを手配したのかな?

龍子

立花

そうすると、うちの前にトラックが来るわけね。それは居留民団み

帰りました。そして私たちは自力で帰る方法を選んだわけ。

日本に帰るには色々な方法があって、個人的に帰れる人は個人的に

だから十数世帯がみんなそれぞれに……。 なるほど、それぞれ何らかの個人的な手段で帰れる方法のある人は、

立花 じゃあ、やっぱり3家族じゃないですか。

龍子 立花 龍子

中上さんとそれから……。

あーなるほど。その西苑に行く2家族というのは。うちとどこ?

そうですね。

弘道

徳島の人。

龍子 そう。四国で会った人でしょ。

弘道 名前は忘れたなあ。

立花 それで直代と僕ら二人はほとんど風土病で死にかかっている感じで

龍子 そうそう。

立花 それで、直代はミルクとか……。

龍子 ミルクはもちろん買えないし、牛乳食もまったくないし、ねぇ大変。

よく生き延びた……。

立花

『西苑』を読んでても、よく生き延びたと感心するね。

当時は何を食べてたの? コウリャンの飯を集結地で食べたのは覚

弘道

えてるよ。コウリャンというのは中国の赤っぽいトウモロコシを細分化し

たようなきびね、きび団子のね。

立花 『西苑』にも重湯を作る場面があるけど。

龍子 玄米の粉を瓶に入れてお湯を入れて溶かしてね。

そうすると、トラックに3家族乗るときに持ってたものってどうい

うものですか?

立花

龍子 まずは食料。後は、お布団がないと夜寝られないから……。

立花 布団持ってたの。

龍子

あとは何にも持ってなかったでしょう。

弘道 立花 弘道 柳行李とは柳の枝で編んだ入れ物ね。 あった、 柳行李みたいなのが1個あったじゃん。柳行李って分かるかな? あった。

立花 この人(弘道)、妹の荷物全部背をわされて、中はおむつばっかり。 リュックを背おわされたのは覚えてる。

弘道 立花 弘道 和服の帯をこんな風にしてみたり。 今風のリュックじゃなくて……? 俺も、布製の手づくりリュック覚えてる。

立花 防寒帽みたいなものを被ってましたね。

弘道 綿をいれてね。 俺は防空頭巾を持ってた。

あれはもう絶対必需品だった。時期的に

はだい

ぶ寒い時期だったよねえ。

弘道

個々です。コウリャンの配給があって、

コウリャンを食べたのは覚

えてる。なんかある時ね

弘道

食事は個々でやっていましたね 食事は当番でやってましたか?

個々でしたか。

弘道

5000人てのはあながち嘘じゃないかもしれない。

集結の方が正しいのかもしれない。

かったかな。ここでは第一次集結になっていますね。もしかしたら第三次

っているけど、この小説だと人数はもっと多くて、

確か5000名じゃな

ですよね。北京市西苑に第三次集結って書いてあって、約2000名とな

北京の集結地は郊外、つまり城外にあるんですね。そこに数か月いるん

立花かなり寒い時期でした。ちょっと北京の話をまとめます。

それはもう苦労を共にして……。

弘道 龍子

って、

〈戦争の記憶〉

立花 書いてある。一家族2畳。兵舎の中で。えらく狭く思われますがそんなも んですか? それで2階建ての木造の兵舎はどこの部屋でも、一家族2畳単位と

龍子 そんなもんです。

弘道 2畳に4人、5人寝たのか。

を作ったりしてたけども、たしか隣組的な班みたいになってたでしょう。 立花 そうそう。それでみんな荷物や布団を積み重ねて隣の人との境界線

なんか城内の一角に住んでいる坂上さんという通訳をしている日本 ある時、子どもの友達ができて、その友達がお菓子もらえるぞと言

は何人かと小さい小屋にいて、そこでビスケットみたいなものを一つもら の兵隊の所に行ったのを覚えてる。戦闘帽被ってもちろん丸腰。坂上さん

立花 これは小説だけなんだけれども、 隣組は6部屋で約30世帯が 単位

となっていて、4つの隣組が一班になって、一班が一棟になって、集結所

221

2

た覚えがある。

立花家の

区、二区、三区に分かれていた。 全体に36班あって、それが36棟になった。 建物の位置で12棟がそれぞれ

それは正しい。

られていたような……。 ういうふうに書いてあるんですね。大体同じような職業の家族が班に集め **立花** それで、隣組がいわば五人組みたいな共同責任体制になったと。そ

龍子 教育関係者が多かったような気がします。

弘道 ぶ雰囲気がよかったように思います。よそでは、泥棒はするは、暴力を振 僕らが帰ってきてから引き揚げ者の方と話しをすると、うちはだい

るうはで、他はかなり大変なようでした。俺はそんな経験しなかった。

当時、学校教育者関係というのはちょっとね、もうみんなの模範たるべ

き人として、頭の知識はともかく、素行の点でも、礼儀とか何とか保って

たんだな。どおりで今謎が解けた。本当にひどいんだわ。他の集結地での

それで、あの集結地という空間の中で、自然発生的にいろんなもの

ر ا

2 立花家の〈戦争の記憶〉

> 龍子 を売ったり、物々交換する場所がなんか自然にできていったのね……。 引き揚げの直前の時には、 みんなお金の余裕があってそこに来てい

るわけじゃないでしょ。みんなとってもお金がなくて困って、中国のお菓

立 花 子を売って、ズック代にしていたりしていた。 お父さんは何を売って歩いたの?

龍子 私の作った中国のマントを。

龍子 お金はおぼつかなかった。

立花

おお、お母さんが作って。その時は、

お金はあったんですか?

立花 でも北京を出て西苑に行く前は、 うちにはお金があった訳わけし

北京から日本へ そんなたくさんはなかった。

立花 んですか? それで西苑から天津の集結地までは、 同じグループで行動している

龍子 そう。それで、だんだん仲がよくなっていった。

立花 なるほど。それで西苑から天津へ行く移動する途中は、

列車に乗る

弘道 乗った乗った。

わけですよね。

龍子 貨物列車ね。

立花 弘道 立花 あれ。 昔の奴隷を運んだみたいな列車ね。 一段ベットに横になって、板と板の隙間から風景が見えるわけよ。 俺は、 寝台列車に乗った記憶があるなあ。

弘道 したら列車が動き出してね。相手も渡せばいいものを父ちゃんに渡さない ちょっと出せってみたいなことがあって、なかなか渡さないわけよ。そう 聞を買いたくてね、それで新聞売りが来て、そこでお金がなんとか、もう そうそう。だんだん思い出してきた。ある駅でとまった時父親が新

立花 は売ってたわけですね。もう唯一の情報源だったから。 あの時、手袋をしてましたよね。

わけよ。それが子ども心にも悔しくてねえ。

お父さんも悔しがって。

新聞

私たちは子どももいて歩けないから……。

龍子 あの手袋ね、捨てちゃったの。

弘道

あれは手作りだよ。

立花 あっ、手作りなの。 何かに腹立てて捨てた記憶があるんですよ。

俺は、靴がどっちも右だったことを覚えている(笑)。どこかの集

結地で間違えたのかね。

弘道

立花 ますよね 列車もあったけども、全行程が列車ではなかった。トラックもあり

立花 弘道 で西苑からあっちへ移動したわけね。 歩きの記憶も……。だから歩きとトラックと列車と、こういう感じ 歩きもあったね。暗くなってから。

弘道 リアカー部隊もいた。老人とかね。うちはどうだったかな。ある程

度歩いたことは間違いない。

龍子 どこでも集結地では、 貨物を入れる部屋に押し込まれたって感じ。

今で言うと、がっちりした倉庫みたいな場所。巨大な、例えば穀物

弘道

かった。 なんかをいっぱい積み重ねていれるような倉庫。石造りという感じで冷た

立花子どもも多かったんですよね。

弘道 げは安全で、大人になってから色々な人と引き揚げの話をすると、い たよね。割と平和的だったね。本当に私たちの経験した北京からの引き揚 割合子どもはどこも多かった。集結地の中では、子ども仲間ができ かに

がすごいからもう本当に殺される人がいっぱい出たりするわけです。 過酷だったかを知って驚きます。特に朝鮮から逃げた人は、 朝鮮人の反感

立花 弘道 そうそう。 小説『赤い月』みたいな世界ですね。 満州まで行かなくても、北京以外の北支のほうも、

でした。 以外の人は大変だったみたい。北京はもっとも国民党の統制のとれた場所

弘道 立花 改めて考えると、 だから病気の妹とを抱えて我々を連れながら、 引き揚げ者の中では一番幸せな部類だったかと。 何とか帰ってこられ

たわけですよ。恐らく、違う地域だったらわからなかった。ここには誰も

るから、

当時の人は本当に蒋介石に感謝した。

N なかったかもしれなかった。 立花隆

立花 さっき話に出てきた腕時計というのは、 らね 船に乗り込む時ですか?

龍子 腕時計の話は、天津から船に乗るまでの話

弘道 北京と天津の違いも子ども心に強く印象的に残った。北京にいる兵

隊も、 なんていうのはそれはそれはひどかった。最初は、殺し殺されあった中で、 他の地域の中国軍と衝突するくらいだからかなり違います。八路軍

農民兵がばーっと来て占領したわけだから。そうしたところを分かってい

とにかく北京と天津とで、衣類からして違うんだもの。顔もまた違う。

という感じで本当に怖かった。北京の我々はまともな人間だという感じを 天津はなんか怖い感じだった。そして、乞食みたいな群集がいっぱいいる

正直持っていた。とくに、ススで顔が真っ黒になった人が何人も来たとき

立花 そのススは、どうしてつくんでしょうね

弘道 貨車かなんかでついたんじゃないの。だって石炭列車だから。

227

2

は、

僕はびっくりした。

立花家の

228 立花 じゃなくて、張家港から来たという人たちがいて、中には女の人が男装し 『西苑』では、西苑の集結所に来る人は、北京から来た人たちだけ

て逃げてきているとかいう話もありました。

弘道 すでに北京にも来てたんだ。

弘道 立花 こちらはあくまでも小説だから。 『西苑』には、集結地でのチフス・赤痢・コレラの話が書かれてい

龍子 あなたたちは赤痢になったよ。

るけど、うちはなかったよね? 北京はコレラ・赤痢はなかったですか?

弘道 風土病って、赤痢のこと?

龍子 直代が生まれる前だから。 立花

いつ頃ですか?

弘道 まだ戦中ね。それにしても赤痢とは。

龍子 そう。

弘道 その時、 お医者さんにかかった?

もちろん。そして伝染病だから、家に置いとくわけにいかなくって。

実際は違いますね

弘道 隔離?

弘道 龍子 うん。

なるほど。集結地じゃない所にね。 隔離された。

龍子 そう。二週間ぐらい。

立花 そうでしたか。

立花 龍子 あの時はびっくりした。 弘道 龍子

泣く元気もないぐらい弱ってたんじゃないの。 でも、一人病院に置かれても泣かなったの。

が代わりばんこに、どこか廊下の方に連れて行ったとあったけど……。 『西苑』の中では、子供がすごく泣くもんで、お父さんとお母さん

活水学院にお金がなくて給料もろく支払えなか

戦時下のキリスト教と戦争 資料を見てみると、

弘道

ったって書いてあります。日本政府や文部省がミッションからキリスト教

た補助金がたち切られて、活水学院は経営難になりました。 主義学校の補助金は受けず自主独立しろと言ったんで、年間何万円かあっ

りの制限を課しました。 ということで、アメリカ系のキリスト教団体に対して厳重に監視し、かな てたくらいだから、敵性宗教の学校だけいい目にあわせることはできない 国の方針で、女子学生も勤労動員といって工場で働くようなことをやっ

立花 ら。日本のキリスト者たちは、国家に追従していった一方で、文部省の統 を断ち切ろうとしました。それによって日本を独立させなきゃならないか 政府はキリスト教ミッションを派遣をしたアメリカの教団との関係

と、聖公会の立教女学院の3つに限定して政府に認められるわけですね。

改革派教会のフェリス女学院と、メソジストの活水学院、青山学院

弘道

制を拒否したこともありました。

立花そうですね。結局は、 立教も戦争に協力するみたいな方向にいっち

だからみんな戦争へ行くわけだ、青山学院も。あそこも学徒兵を出

(34) 改革派教会:カルヴァン派とも呼ばれる、ルター派教会と並ぶプロテスタント教会。と・リューリタンの流れが有名。とがでいる。

革派の影響を受けている。

2

んです。

231

立花

なるほど。日本国家としては、ローマ教皇の下ではないという体裁

龍子 水戸に一人だけ宣教師が住んでたでしょう。聖公会の。 中町という

したりしていました。

弘道 あれ、日本人じゃなかった。しかもカトリックでは?

いや聖公会。カトリックとプロテスタントの中間にあたるような

龍子

立花 それが聖公会。立教の母団体。

立花 龍子 1874年開校だから、138年。立教はキリスト教主義の学校の 立教は創立何年?

結局は別の道にたどったけれど、戦争中にも一緒になろうという話がある 中で一番古い。病院で有名な聖路加も聖公会で立教と同じ母団体なんです。

龍子 部省の配下に入っちゃうわけです。 年表によれば、 カトリックのほうは日本天主教団といった名称で文

> リスト教会。日本では 最高首長とする世界最大のキ 持つ。カトリックでは司祭は 紀以来のキリシタンの伝統を 16 世

(35) カトリック:ローマ教皇を

にしたかったわけね。

弘道 カトリックが、漢字だらけの日本天主教団。何だかすごいね。

立花 してはカトリックに近いあり方ですね 聖公会は何かとカトリックに近いといわれますが、立教も戦争に対

龍子 聖公会の礼拝には儀礼が多いんです。

聖公会はそうです。聖公会にもイギリス聖公会とアメリカ聖公会が

立花

じ流れ。 あって、立教はアメリカ聖公会。イギリス聖公会とは微妙に違う。でも同

話がすっかりキリスト教の教派の話になりました。さすが立教です。話

を引き挙げに戻しましょう。

弘道 そうしましょう (笑)。

天津から日本・仙崎へ

立花 晩で着くんだけども、乗せられた場所は船底みたいな所で、トイレは確 天津から船に乗るでしょう? そしてその船が嵐にあうでしょう?

か甲板にしかなくて、嵐の中トイレに行った覚えがあるんだけど。

龍子 日本への帰りの時ね。

立花 そう帰り。天津から九州の仙崎。

弘道 一泊だったかな。

立 花

にいったに違いないよね。一人で行けるわけがないから。

そう一泊。俺は甲板に出てトイレに行ったわけ。きっと誰かと一緒

龍子 あ、そう。私は知らない。

じゃ、お父さんかしら。

弘 道 花

の船底でしょ。しかも船は揺れるしなあ。 トイレなんてとても行けない。だって周りに人がいっぱいだしさ。真っ暗 きは濡れているわけよ。怖くて遠い所へ行けなかったというのを覚えてる。

俺はもうおもらししてびっしょりになって。引き揚げ船を降りると

てる。 龍子 私はお医者に行くために、真っ暗な甲板に上がっていったのを覚え

立花

それは覚えてないなあ。

それで船が仙崎に着くじゃないですか。接岸して降りるんじゃなくて、

龍子 そうそう。小さい船でね。

確か伝馬船か何かで港まで運ばれますよね

あれはどういう船? LSTかな?

龍子 L S T

立花

弘道 よく運ぶための。 戦時中、アメリカが大量に作った貨物輸送船よ。 戦時中物資を効率

龍子 荷物扱い (笑)。

弘道 い船だった。大きいしね。貨物船に乗り継いで仙崎に入るのは仕方ない。 だって貨物船だからね。でも、当時のおんぼろの船の中では格好い

大きな船は仙崎港へは入れないでしょう。

弘道 立花 その地域の漁船 それで漁港の小さな船がどんどん来て、それに乗り移って……。

弘道 龍子 お金払ったの。よくあったね。 いくらかお金を払ってね。

(36)LST:米軍の戦車揚陸艦

戦車などを揚陸させる船。 乗り上げて艦首を開き、 (landing ship tank)°

えつっ

龍子 そう。しかも一ヶ月一人が暮らせるぐらいのお金よ。

龍子 着いたときに払います。

それはどの段階? 仙崎で一晩泊まるでしょう。どこで払ったの?

立花

立花 龍子 そう。お風呂もゆっくり入れたし、ご馳走もたくさんいただいた。 いいお家に泊まりました。 なるほど。それであの晩、分散してその港の民家に泊まるんだよね?

弘道 二晩だ。俺は翌日床屋に連れて行ってもらったから、二晩です。

立花 弘道

晩だけ?

普通の家庭。

龍子

晩か二晩か。たぶん二晩。

弘道 立花 それでお母さん。僕らは仙崎でお金をもらったじゃないですか。 ああ、そうですか。

弘道 帰ってきた人全員にお金をあげてましたよ。

龍子

千円くらいもらったのかしら。

236 弘道 員、茶色い封筒に入ったお金をもらいました。 僕は小さかったけど、そのことをよく覚えていますよ。帰った人全

龍子(おにぎりはたくさんもらいましたが、お金までもらったかしらね。

してもらったという記憶はあります。 ただ、日本に戻ってから、食べ物や飲み物などはたくさんもらって、よく

弘道 チビだってそういうことには鋭いんですから

(笑)。

仙崎から東京への道のり

東京駅に着いたとき、ボランティアの学生がお迎えに来てくれて、

いってもらったのだけど、学生さんたちは履く靴がなくて裸足でね 隆志をまずおんぶしてくれたんです。それで、常磐線のホームまで連れて

裸足だったんですか。ありゃあ。

裸足で東京駅から上野駅まで送ってくれました。せめてものお礼に

と思って下関駅でもらっていたおにぎりを渡そうとしたのですが、受け取

ってもらえませんでした。

みんなで外を見てたんですから。

237 2 立花家の

> 弘道 龍子

すかっ

立花

それで下関から東京までは、乗り換えなしの一本の列車だったんで

龍子 そう一本。

立花 道中、広島の原爆のことは皆知ってた?

う。でも私たちはそんなことを知らずに列車に乗っていて、広島を通り過 龍子 当時は原爆が落とされた直後でしたので、みんな混乱していたと思

ぎました。

弘道 見て大変なことが起きたということを身を持って体験したと思いますよ。 えっ。それは違うんじゃない? 広島を通ったとき、みんなで外を

母子で別のところに座るわけないでしょう(笑)。とにかく窓の風 お前は別のところにいたんでしょう。

も心にもとにかく何か大変なことが起こったということだけは分かるわけ 景がずっと廃墟なんだから、何が何だかわからないわけです。でも、子ど

です。

(37) 広島の原爆:1945年、

8月6日

ウラン235型原

子爆弾がアメリカ軍により広

人以上の命が失われた。 島市内に投下され炸裂。 人類 13 万

史上最初の原子爆弾の実戦使

用

龍子 お前はそれを後から思ったんでしょう。

弘道 違います(笑)。 とにかく列車の中はその話題で持ちきりだったん

弘道 龍子 私は寝ちゃってたのかしら とにかくあれだけの焼け野原だったのだから、見たら何も思わない (笑)

けたらすすで真っ黒になるのに、窓を開けてその光景を見たのです。 時小学二年生ですので、自分で気づいてというよりも周りにつられて、 わけはないと思いますよ。私は周りの大人からの話も聞いて、とにかく 「ここ広島で大変なことが起こった」ということを認識していました。 当 開

ら東京駅行きの列車に乗り換えるわけですよね。それで下関駅のホームに **立花** 下関の前は、まず仙崎から下関に出るわけですよね。それで下関か

と聞きました。 戦争孤児がたくさんいて、それではじめてこの戦争は負けたのだと思った

龍子 そう。はじめて戦争に負けたのだということを痛感したのが下関で した。中国でも仙崎でも、話では聞いていても敗戦を体感するということ

東京から水戸へ

両親と子ども三人がとともにいる私たちをうらやましがっていました。 はありませんでした。下関には家も親もない子どもがいっぱいでしたから、

弘道 ああ。そうでしたか。こちらは私は記憶にないです。

立花 関駅から東京駅まではものすごく時間がかかっているわけですよね おもしろいですね。母子で違う部分が記憶に残っているわけだ。下

弘道 ンと音を立てていたのを覚えています。 夜に列車がとまるんですよ。それで連結器がガチャーン、ガチャー

龍子 そうですね。一晩はかかりました。

て水戸へ向かったのですか? **立花** それで上野から水戸に行くわけですよね。そこから私鉄に乗り換え

龍子 そうです。そして水戸には夜着きました。本当に真っ暗で、 駅から

ながら祖母の家に向かいました。荷物は手荷物だけで、大きな荷物は別に 二キロくらい竹やぶや田んぼの道を、 途中井戸などもあったので、 用心し

239

送ってありました。

立花 それで、真夜中に親戚の家にたどり着いたと。

龍子 そう。

立花 それで着いたとき雨戸を叩いて、家長さんが出てくると、お母さん

が「ああ、さっちゃん」と言っていたのを覚えています。

弘道よく覚えているねえ。

龍子 当時祖母の家には三家族が住んでいました。

弘道 水戸大空襲で家が焼けた親戚が来ていましたね。 (3)

弘道 立花 あれは主に日立製作所を狙ったものですね。空襲で大分被害があっ 水戸も空襲ですか?艦砲射撃も有名ですが。

艦砲射撃は主に爆発ですから。 たと聞きます。火事で家が焼けるというのは主に焼夷弾による空襲です。

龍子 祖母の家にお世話になりました。 そんな中、 祖母の隠居の家が焼け残っていたのです。それで一年間、

そのあたりは僕も記憶がありますよ。

月2日未明の空襲。 B29・99 1945年8

機による。死傷者1535人。

が水戸市吉沼地区にも落下した。 (39) 艦砲射撃を受け、砲弾の一部勝田市の軍需工場が米艦隊の7日午後8時過ぎ、日立市と7日へ後8時過ぎ、日立市との19年間である。

21人を超える死者が出た。

その話は知りません。『西苑』はまだ読んでいないのです。

立花 どもが相次いで出て、そのお墓が集結地の外側にあるということでした。 苑の集結地に数ヶ月間滞在するわけですよね。その集結地で死んでいく子 説があるのですから、舞台について語りましょう。『西苑』によると、 話をもう一度西苑の集結地に話を戻します。せっかくお父さんの小

西苑の集結地

立花 弘道 荒れ野原です。遠くから見ていて「怖い」と思って帰りました。 に行ったことがあります。その一角はたしかにありました。一言でいうと きちんとした墓石もなく、ただの荒れ野原に石があるという感じで その話は覚えています。子ども同士で、その遺体を持っていく場所

そういう感じです。遺体を集めて埋める場所だったのでしょう。た

2

弘道

だ、すぐ隣に焼き場はありました。

立花家の

すね。

立花 この『西苑』によると、集結地の近くに共同浴場があったというこ

241

龍子 そういう記憶はありません。

とですが、ありましたかっ

弘道 くらいでしょうか、軍隊の馬の水飲み場があって、そこを浴場として使用 私は記憶がありますよ。ただ共同浴場というよりも、25m×4m

いていたのです。 したと思います。そこで洗濯などもしていました。当時の軍隊は騎馬を用

立花 龍子 それが本当に大変でしたよ。歩いて往復30分くらいのところまで歩 それで弟や私のオムツの洗濯などはどうしていたのですか?

立花だん変くなっていくわけですよね。秋から冬にかけてですから。 いていって洗濯していました。

ありました。 龍子 非常に寒い時期を過ごしましたが、集結地には暖房のようなものは

立花まだ恵まれた方ですね。

2子 そうです。命の危険は感じませんでした。

その頃の中国の社会的背景というのは、国民党と共産党が争ってい

弘道

〈戦争の記憶〉

でしたが。 西苑の集結地から見える山の向こうでは、実際に内戦があったということ て、いつ内戦が始まってもおかしくないという状況だったと聞いています。

龍子 そうです。夜に出歩くのは要注意ということでした。

立花 そうしたことを伝える新聞のようなものはあったのですか?

正確な情報はあまり入らなかったように思います。 龍子(どうでしょうか。口伝えで聞く噂だけだったのではないでしょうか。

いや、それは違うでしょう。中国は、国民党系、共産党系のみなら

立花家の ず、さまざまな思想を持った集団や会合などがあり、様々な組織がとにか 報は入っていたと思います。絶対に情報はゼロではなかったと思います。 報はありましたから、日本がどうなっていたか、ということを含めて、情 く様々な新聞を発行します。玉石混淆とはいえ、集結地の外には様々な情

ます。 中国の新聞に載った情報の断片などから、日本の情報は入っていたと思い 集結地の人は、 中国人との接触はほとんどありませんでしたので、

新聞の紙片などが集結地に情報をもたらしたのでしょう。

243

2

244 立花 国語ができる人はまた別のルートから情報が入るということはあったので 『西苑』では、中国語でのやりとりというものが出てきますが、中

に入ったのだと思います。ただ、当時中国語ができるというのは、本当に 弘道 それはあったと思います。中国語が出来る人を通して情報が集結地

国がどうなるかということを知りたくて必死なのですから。

エリートです。そういった人が情報を入手しないわけがありません。みな

立花 のでしょう。「日本が今どうなっているか」ということを知るようになる れているので、原爆が落ちたということを日本人もすぐには知らなかった それで日本に着いてからの話ですが、原爆投下後も厳戒態勢が敷か

戦後、

日本人は日本が今どうなっているか知っていたか

龍子 に帰るということが何よりも優先でした。 とにかく当時は、情報がどうこうというより、子どもを連れて郷里 のは、

いつ頃、どのようにしてでしょうか?

立花家の〈戦争の記憶〉 く中 弘道 り恵まれていると思います。

立花 なるほど。 ちなみに、たとえばマッカーサーなんていう名前は

龍子 さあ。いつでしょうか。

知るのですか?

弘道 ことを大人はみな知っていたでしょう。 と、「こんな人間いるのか」というような今まで見たことのない白人を目 にした記憶があります。敗戦後すぐ、日本がアメリカに占領されたという 仙崎でDDTを袖口、襟口に吹き付けられていたときに、ふと見る

立花 中国 にいた頃からある程度情報はあったのでしょうか?

た」という声を満州からの引き揚げ者からよく聞きましたから、満州の場 情報は皆無に近かったのではないでしょうか。一方、西苑ではおそら 国の新聞は手に入ったと考えられますから、満州の人と比べるとかな 場所によるでしょう。「日本に帰るまで、何が何だか分からなかっ

> マッカ ーサー

MacArthur, 1880-1964): 戦争開戦時 国の陸軍軍人・元帥。太平洋 戦後、日本占領連合軍 米国極東軍司

(4) DDT (dichlorodiphenyltric 強攻策をとった。

をとる。朝鮮半島に対しては

高司令官となり、

民主化政策

hloroethane):戦時中に使われ ていた殺虫剤の一種。 有機塩 現在は

素系で残留性が高

立花 それで日本に着けば、 日本の新聞が手に入るわけですが、

当時の新

聞はどの程度報道していたのでしょうか?

龍子 の日本に気後れするばかりで新聞なんていつ読んだか。 当時は駅売りの新聞なんてありませんでしたし、ただただ久しぶり

弘道 したから、なかなか読者の手に届かないというのが現状だったでしょう。 当時の新聞は契約制でしたし、契約しても刷り部数に限りがありま

立花 おばあさんの家には新聞は配達されていましたか?

何ぶん用紙が不足していました。

龍子

弘道 回し読みです。当時はほとんどそうでした。

近所の人が届けてくれていました。

立花 『婦人の友』という雑誌が今もあるでしょう。あれが当時16ページ。

ちょうど新聞紙一枚分です。こちらも、読者十名に対して一冊、という割

り当てでした。やはり回し読みです。

弘道 て読み終えられませんので。 新聞もだいたい先日の新聞なんかを読んでいました。一日ではすべ

戦後における一般家庭の生活

したね。

〈戦争の記憶〉

うか? 立花 一般の家庭にニュースがラジオで届くようになるのはいつ頃でしょ

弘道 敗戦から二、三年後には一般家庭にラジオがありましたよ。

龍子 送があるというので、家族みんなで聞いていました。 水戸に移ってからラジオを聞いたことを覚えています。夫が話す放

聞いていました。内容はたしか、「今年の出版界の回顧」といったもので 立花 それはよく覚えています。近所の人がみなラジオの周りに集まって

弘道 たしか、それを活字化したものが新聞に載ったと思います。

ああ、そうでしたね

立花家の 弘道 ょ。 なことが少し載っていたように思います。私はそれをよく読んでいました 民衆にとって情報は制限されていましたが、ただ回覧板に、時事的

2

立花

回覧板に。

回覧板は、

247 弘道 もちろん行政的な意図も入ったものだとは思いますが。

たりという仕事をよくさせられていました。当時活字に飢えていましたか です。 実用的な情報を伝えるとともに、 私は長男だったので、新聞を持って行ったり、 時事的な出来事をも伝えるものだったの 回覧板を持って行

ら、隅から隅まで読みましたよ。

弘道 立花 帳というものもあって、あれが身分証明書みたいになっていましたよね。 配給手帳は戦前と戦後では全く違っていましたね。 お米の配給制度はいつまでありましたでしょうか。お米の配給手 戦前は配給キッ

プでしたし、戦後はハンコになっていました。

龍子 配給制度は戦争が終わってもしばらくは続いていました。

立花 帳が必要だったと思います。 帳が必要だったかと思います。たしか外食券食堂の発行にもお米の配給手 たしか、水戸に行って図書館の入館証をもらうのにもお米の配給手 まあ、 もっとも今外食券食堂といっても誰も

43

弘道 まりにうまかったんで覚えていますよ。味噌汁はさいの目に切った豆腐と 外食券食堂を使って水戸市内の食堂に行ったとき、その丼ぶりがあ

わかりませんね

(笑)

42) 配給手帳:主に米穀配給通 で米の配給を受けるために発 かった。 通帳を提出しなければならな 持参するか旅行者用穀類購入 館に宿泊する際には、 ばらくは、 より廃止された。 月11日の食糧管理法の改正に 行されていた。 ら日本にお であり、 レストランや いて食管制 1942年 1 9 8 終戦後もし 現物を 1年 の

券を、 食券を持参しなければ、 き換える制度。 食堂側は客から受け取った食 で米の食事が 給制度の時代、 外食券食堂:戦中戦後 役所でその分の米と引 出来なか 配給された外 の配 249

外食券がないと米飯は食べられませんでした。 小麦粉を練ったものが入っていました。本当に贅沢なことでした。当時 大根の根と葉が入った味噌汁でした。あと人間の耳たぶくらいの大きさの

いたのですが、家族でその外食券を持って東京に行ったことがあります。 当時、お父さんは東京でお勤めをしていて、私たちは水戸に住んで

が載っていてびっくりしました。結構きちんとしたレストランだったので それで外食券を持ってレストランで食事をしたのですが、お皿にナメクジ

ノミ、シラミ、ハエ、蚊の類は当時の日本にはたくさんいましたね

すが。

弘道

(笑)。

お父さんの手紙

2 龍子 家族がいることが重荷になる点と、支えになる点と、その両方の気持ちが この機に、 お父さんの古い手紙を丹念に読み返していたのですが、

書いてありました。

立花

それはいつの時期ですか?

弘道 まあ、それは現在の我々だってそうですけどね

龍子 私たちが水戸にいた時です。

弘道 じゃあ、一番大変だった時だ。

龍子 いときがあったのかもしれません。 古靴が手に入ったので送りますというものもあって、もしかしたら靴がな だから、三人の子どもの名前が沢山書いてありました。子ども用の

弘道 たと私は思います。たしかに教育勅語の遵守であったり、宮城礼拝であっ であったという解釈ばかりが先行しますが、必ずしもそれだけではなかっ なるような場所であって、 けです。学校は子どもにとっての楽しみでもあり、子どもの情操が豊かに いことを教えてくれて、ひな祭りも運動会もやったりして、行事も多いわ ではありませんでした。学校というところは、子どもにとって色々な新し りが言われるけれど、行っている当の本人にとっては、そんなに悪いもの 昔の国民学校の教育は、皇民化教育などと言われて、負の側面ばか 戦時下の学校教育が日本人を歪める悪しきもの

たり、 ていったわけです。その点だけ、付け加えておきたいと思います。 御真影へのお辞儀などはあったけれども、子どもはすくすくと育っ

弘道 立花 の学校生活でした。 北京の学校は1945年の入学でしたか? 1945年4月に入学して、8月には敗戦ですので、わずか4ヶ月

44) 教育勅語:1890年10月 令 (明治4年勅令第229号)、 捉えられた。また、 30 日 に、 ともされた。 民地)で施行された朝鮮教育 修身・道徳教育の根本規範と ら昭和時代前期まで、日本の された勅語。明治時代半ば 1号)では、教育全般の規範 台湾教育令(大正8年勅令第 明治天皇の名で発表 外地

か

45) 宮城礼拝:大日本帝国 いて、皇居(宮城)の方向に 下の日本、大東亜共栄圏にお 共に行われた。 の一つ。君が代の斉唱 天皇への忠義を誓わせる運動 向かって敬礼 (遥拝) する行為。 丸の掲揚、 御真影への敬礼と 日の I憲法

[質疑応答]

ますが、そういうことはなかったわけですね。 て、ソ連の爆撃機による空襲から逃げまどう、といった記録が残されてい われたわけですね。たとえば満州や樺太ですと、8月9日にソ連が参戦し 北京では、終戦から引き揚げまでの間、きわめて平和的に日本人は扱

弘道 地域と条件の違いによって、扱いもまったく違い、まったく違う体験をし とはありませんでした。私が強調したいのは、同じ引き揚げ者といっても、 れた」とか、そんなことが本当にあったのか、と。北京ではそのようなこ なんです。たとえば、「満人に襲われた」だとか、「女の子が強姦虐殺さ 龍子 そうなんです。きわめて平和でした。 私なんかも、満州からの引き揚げ者の話を聞いて信じられないわけ

ているということです。

時どのように機能していたのでしょうか?

終戦から引き揚げまでの北京における日本の行政組織というのは、

当

立花 なかったようですね この 『西苑』によると、組織としてはガタガタになり、 機能してい

弘道

隊が力をあわせて守っていたような気がします。 けです。あの大変よかった北京の治安に関しては、 日本の軍隊と中 国 0 軍

ガタガタでしょう。ただ、かなり程度のいい日本軍

のプロが北京にい

たわ

本来民間人を収容する集結地に丸腰の日本軍の兵隊もいたわけだし、

をよく作ります。 立花 そして、自治会の力もあるでしょう。日本人は割合そういったもの

たしかに、北京の残留孤児というのはあまり聞きませんよね。 黒竜江

の方や満州の話はよく聞きますが。

弘道 山西省の方もひどかったと聞きます。

龍子 そのようですね。 -山崎豊子の『大地の子』も満州が舞台ですよね。

さんありました。 じ日本人の間で、エゴイズムが嫌でも見せつけられるような出来事がたく り大人がいたりして、本当に嫌な思いをしました。極限状態において、 せている私の三人の子どもの目の前でわざと美味しそうに飴を舐めてみた 為をすることです。一番印象に残っている出来事があります。お腹をすか て、人の食べ物をとったり、荷物を盗んだりするなど、いやらしい犯罪行 引き揚げの段階で一番嫌なのが、一人ひとりがエゴイスティックになっ

龍子 立花をういうことが、この『西苑』にも書かれています。 そうですか。まだ読んでいないのです。

お母さんの美学には合わないかもね

(笑) 。

お母さんは芥川賞ライ

立花 める形にしているから、すぐに読めますよ。公になったら映画化もあるか ンしか認めない人ですから、これは直木賞ラインです。でも、 私たちで読

も知れない(笑)。

弘 龍 道 子

ありがとうございました。

龍子 お父さんからの手紙には、私にも何か書くように書いてありますよ

立花 (笑) 実際に書いてましたよね。お母さんの書いた童話はいくつか読んだ

龍子 活字にもなっていましたからね。

ことがあります。

弘道 思います。ありがとうございました。 **立花** ともあれ、今日は家族で戦争について思い出話ができてよかったと らなあ(笑)。 あれ、私は知らないですよ。ちょうど、あの頃親に反抗していたか